golden　phoenix

竜恩寺泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｇｏｌｄｅｎ　ｐｈｏｅｎｉｘ

【Ｎコード】
Ｎ９５４３Ｕ

【作者名】
竜恩寺泉

【あらすじ】
テニスの王子様の夢小説です。

ヒロインはコピー能力を持つ天才テニスプレイヤー。

ＳＷＥＡＴ＆ＴＥＡＲＳ２要素のアニメ沿いで不二、跡部、幸村寄りの幸村落ちで連載中です。

設定

上川美和

１３歳　中学２年

身長　１６０ｃｍ

体重　４５キロ

この物語の主人公。２年程ドイツのミュンヘンに居たため帰国子女。

青学の手塚と立海の真田とは幼馴染で彼らと同じくテニスプレーヤーで、公式戦負け無しの経歴から黄金の不死鳥と言う異名を持つ。

ドイツのジュニア選抜の経験もあり、選抜の中でもエースプレイヤーだった。

相手の技をコピーする能力を持っている。

母親がスポーツドクターの為、多少の応急処置が出来る。

１０歳年上の兄が居る。

容姿端麗で頭が切れる。幸村とは2年前に付き合っていたが兄の紫義によって破局した。

上川紫義

２３歳

美和の兄。かなりのシスコンだが、いざという時に頼りになる存在。

美和と同じくコピー能力の力を合わせ持ち、現在はプロのテニスプレイヤーとして活躍している。

美和と幸村を引き離した張本人。

不二の姉、由美子と付き合っている。

上川美奈子

美和と紫義の母親。竜崎の教え子でドイツの医療施設でスポーツドクターをやっている。

以前はプレイヤーとして活躍していたがある技を使用した事により腕が故障し、現役を引退した。

上川千秋

美和と紫義の父親。物腰柔らかで人望も厚い。

家族思いだが、アメリカでテニス関係の仕事に携わっているため帰国できずにいる。

東雲七海

青学男子テニス部のマネージャー。天然な性格のため、よく周りからからかわれる。不二に想いを寄せているが告白出来ずにいる。

柊捺希

不二の幼馴染で七海の親友。女子テニス部の部長でレギュラー。素直でとっても面倒見のいい姉御肌。

天条院若菜

氷帝学園女子テニス部のレギュラー。美和の事をライバル視している。

雪村時音

立海大付属女子テニス部の部長兼エースレギュラー。３年前の美和のダブルスパートナーで最大のライバル。

白石飛鳥

美和の従姉妹で四天宝寺の白石の双子の妹。兄と違い、人懐っこく美和にも懐いている。美和同様テニスプレイヤー。キレると関西弁になる癖が出る。

竜胆芹香

美奈子の妹で美和の叔母。金井総合病院の外科医で白石と飛鳥の母親。荒っぽい性格だが医者としての腕は優秀。過去に白石の父親と対立して離婚。以後、外科医としての職務を果たしている。美和を通じて白石や飛鳥の日常生活を聞いている。

基本的にはアニメ沿いで連載していきます。

オリジナル設定としてミクスド1，2，3の他に男子団体戦でミクスドダブルスとミクスドシングルスを含める設定です。

レイチェル・ハート

日米親善試合で出場するアメリカ人。前向きで落ち着きが無いが仲間思いの優しい女の子。

美和とは顔見知り。

レイラ・ハミルトン

冷静沈着容姿端麗でレイチェルの良き友人。レイチェル同様美和とは顔見知り。

帰国

季節は秋、此処東京の羽田空港では1人の少女がドイツから帰国してきた。

名前は上川美和。１３歳。

彼女はテニス界で指折りのテニスプレイヤーで過去に出場した公式戦は負けた事が無く、公式戦負け無しと言う経歴から黄金の不死鳥と呼ばれていた。

そして青学の手塚、立海の真田の幼馴染でもある。

美和は羽田空港を出て電車で今日柿木テニスガーデンで行われている新人戦の見物に行った。

暫くして美和は会場につくと丁度手塚の試合が行われおり、美和は試合を見ていた。

『…（まだ治ってなかったんだ、テニス肘。）』

そして試合は手塚の圧勝で終わり、美和は他校の試合を見たりして時間を潰していた。

数時間が過ぎ、試合も終わったのか、美和は手塚の携帯にメールを打ち、入り口前に立っていた。

その頃青学のレギュラーたちは…

不「ようやく終わったね。」

七「不二君、お疲れ様。」

不「ありがとう、七海。ところで、この後予定ある??」

七「ううん、無いよ。」

不「なら、一緒に帰ろう??」

七「うん、良いよ。」

不「それじゃあ、行こうか。」

七「うん。」

すると遠くから七海を呼ぶ声がした。

捺「あ、いたいた。七海~。」

七「あ、捺希ちゃん。」

捺「一緒に帰ろうってなんだ、周助も一緒か…」

不「僕が一緒にいたら困るのかい??」

捺「別に~。」

七「捺希ちゃんも一緒に帰ろう??人数は多い方が楽しいじゃない。」

不「そうだね、それじゃあ行こうか。」

不二達が行くと入り口の前に美和がおり、美和は待ちくたびれて、鞄からラケットとボールを出し、目を閉じてラケッティングをしていた。

抜群のコントロールの良さに3人は釘付けになっていた。

捺「…周助。」

不「うん、彼女、並のプレイヤーじゃない。」

捺「どこの学校かな??あんな子見なかったけど…」

すると美和の側に手塚が来た。

七「あ…手塚君。」

捺「ホントだ。」

不「ひょっとして、知り合いなのかな??」

一方美和は…

手「すまない。待たせてしまったな。」

『かなりね。』

手「…すまない。」

『クス、国光さっきからすまないばっかりね。』

手「…悪かった。次から気をつけよう。」

『そうしてちょうだい。でも仕方ないんじゃない??部長なんでしょ??国光って。』

手「だが女子を待たせる訳にはいかない。」

『相変わらず堅苦しいね、国光は。』

手「…」

『でも、そうだなぁ。遅れた罰として…』

手「俺にできる事ならやろう。」

『久しぶりにおばさんの手料理が食べたい。』

手「母さんのか??」

『うん、2年振りに帰国したんだもん。外食より、おばさんの手料理が食べたい。』

手「そうか、ならば母さんに頼んでみよう。」

『ありがとう。』

そう言って2人は手塚の家に行った。

転校生

次の日、手塚の計らいにより、転入手続きを済ませていた美和は帰国した翌日に青学に通うことになり、美和は職員室にいた。

暫くの間職員室にいると、朝練を終えた手塚と竜崎が美和の所に来た。

竜「おお、美和。久しぶりだねぇ、暫く見ないうちに綺麗になって。」

『竜崎先生、ご無沙汰しています。』

竜「今のお前さんを見ているとかつての美奈子にそっくりだよ。」

『竜崎先生、それで私は何組なんでしょうか??』

竜「お前さんのクラスは、手塚と同じクラスだ。手塚、分からない

事があったら教えてやりな。」

手「分かりました。」

そして、暫くするとチャイムが鳴り、手塚は先に教室に行き、美和も担任の先生と一緒に教室に向かい、今はクラスのメンバーと対面中だった。

先「紹介するぞ、彼女は上川美和さんだ。彼女は2年前からドイツに居て、かなり海外生活が長い。みんな、彼女が分からない事があったらフォローするんだぞ。」

全「は～い。」

先「では、HRを終了する。上川、希望の席はあるか??」

『えっと…窓際の1番奥の席がいいです。』

先「なら、そこにしろ。すまんが上川と席を替わってもらえるか？？」

『ゴメンね。』

ク男「い、いえ…」

先「あと、手塚。すまんが昼休みに上川に校舎を案内してやってくれ。お前達、顔見知りなんだろ？？」

手「…分かりました。」

そう言うと出て行き、先生が居なくなると、クラスの女子が一斉に美和の所に来た。

ク女？「ねぇ、ねぇ、上川さんって手塚君と知り合いだったの？？」

ク女?「どんな関係??」

『ど、どんなって、只の幼馴染なだけであって…』

ク女?「幼馴染なの??良いな〜。」

『そうかな??』

ク女?「うん!!」

ク女?「その上ドイツ帰りの帰国子女だもん。勿論、ドイツ語とかペラペラなんでしょ??」

『ま、まぁね（疲れる〜）。』

ク女？「上川さんが持ってるのってテニスバックだよね？？」

ク女？「じゃあ、やっぱり部活は女子テニス部？？」

『まだ、決めてないの。女子テニス部の実力もそうだけど、男子テニス部の実力も知っておきたいから。』

ク女？「男子テニス部の実力はすごいよ～。」

ク女？「なんたってレベルが違うもん。他の部活と違って。」

ク女？「特に、手塚君は全国トップクラスのプレイヤーだからね。」

ク女？「でも、柊さんも男子テニス部のレギュラーに負けないくらい強いって聞くよ？？」

ク女？「柊さん、女子テニス部の部長だもんね。女テニの中で1番強いから…」

『…そっか。』

ク女？「でも、気をつけてね。男子テニス部の皆、すごくモテるから変な嫌がらせが来るかもしれないし…」

ク女？「結構酷いっていうからね。用心に越したことはないよ。」

『うん…ありがとう。』

そして授業が始まり、あっという間に時間が過ぎて行った。昼休みに手塚は校内を案内し終わると、職員室に行った。

竜「手塚来たか。」

手「美和を連れてきました。」

『どういう事??』

竜「うむ、さて美和。単刀直入に言おう。お前さん、女子テニス部に入るのか??」

『…正直、迷ってます。男子テニス部は昨日の試合でレギュラーの大凡の実力は分かりました。

ただ、女子テニス部は部長の柊さん以外のレギュラーは男子テニス部の練習にすらついて行けないって聞きました。

正直、私が入ってもその姿勢は変わらないって思うんです。』

竜「なるほどな…お前さんの言いたい事も分かる。1度見学に行ってみな。練習風景をみて結論を出すのも遅くないよ。」

そして放課後になり、美和は女子テニス部の練習を見ていた。すると、捺希が声をかけた。

捺「見学？？」

『え？？あ、まぁね。』

捺「あ、あなた、昨日の…」

『？？』

捺「昨日の夕方、柿木テニスガーデンに居たでしょ？？」

『よく知ってるね。』

捺「見たからね、昨日貴方を。

私は柊捺希。あなたは??」

『…上川美和。』

捺「美和か…いい名前だね。よかったらコートに入って少し打たない??」

『え??良いの??』

捺「うん。」

そう言って捺希は半場強引に美和をコートに入れた。

捺「試合形式でいいかな??1セットマッチでいいよね??」

『良いよ。』

捺「じゃあ、サーブは上川さんから…」

『柊さん、やって良いよ。コートはここでいいから。』

捺「そう??なら遠慮なく。」

そうして、美和VS捺希の試合が始まり、美和は利き手の左ではなく、右でラケットを持って試合をしていた。それでも差は歴然としていて6－3と圧勝だった。

いつの間にか手塚達が試合を見ており、男子テニス部のレギュラーや七海は余りの実力の差に驚きを隠せずにいた。

『ゲームセット。』

捺「はぁ、はぁ、はぁ。」

七「捺希ちゃんが…」

桃「負けた…」

手「…（やはり、右でのハンデ付きでも美和には及ばないか…）」

捺「フフ、完敗だよ…打つ手なし。やっぱり居るんだね…天才って…」

『でも、久し振りだったよ。3ゲームも取られたの。』

捺「それは慣れない右で、手加減してたからでしょ？？」

桃「あの人、右利きじゃ無いんすか？？」

手「ああ、アイツは俺と同じ左利きだ。」

大「その上、手加減もしてたのか…」

捺「どのくらい抑えてたの？？」

『半分くらいかな。でも、ハンデ付きはお互い様なんじゃ無いの？？』

捺「え？？」

『右膝、怪我してるんでしょ？？』

捺「よく分かったね。」

『私の母さんはスポーツドクターでね、小さい頃から医学書や研究論文とか読んで、実践してたの。多少アレンジはしてもね。』

捺「…」

『そんな生活をしてたら、いつの間にか相手の怪我とかを見抜くようになった訳。』

捺「なんか…凄いね。毎日の生活がテニスづけって感じで。」

『そうかな？？』

捺「うん、それでどうかな??上川さんが女子テニス部に入ってくれたら嬉しいけど…」

『…誘ってくれるのはありがたいけど、悪いけど、今は入らない。ゴメンね。」

そう言って美和は鞄を持って帰って行った。

再会

そして月日が流れ、美和が青学に来て1ヶ月が過ぎたある日の事、
女子テニス部では青学と立海の合同練習が行われた。

その頃、美和は教室からコートを見ていた。

『…』

竜「気になるかい??」

『竜崎先生…』

竜「どうだい??ここ1ヶ月練習を見て。お前さん、本当は入っても良いんじゃ無いかって思ってるんじゃ無いのかい??」

『…まさか。だとすれば、もうとっくに入ってますよ。』

竜「美和、お前さんは仲間やライバルに決着をつけたくて帰って来たんじゃないのかい??」

『…』

竜「少なくとも、手塚や柊はお前を仲間として必要としている。もう1度よく考えてみな。」

そう言って竜崎は去って行った。

美和も暫くして教室から出て行き、帰ろうとしたが捺希につかまり、コートに連れて行かれた。

コートにつくと、かつてのダブルスパートナーでライバルの時音が居た。

『時音…』

時「!!美和…」

『…久しぶりね。元気だった??』

時「うん…美和も元気そうで、安心した…」

『…何かあった??元気無いみたいだけど…』

時「…美和、この後時間ある??話があるんだけど。」

『…分かった、待ってるよ。』

そう言って美和がコートを出ようとしたその時…

捺「上川さん。」

『何??』

捺「私、もう膝は感知してるの。だから、もう1度私と試合してもらえる??」

『…分かった。ただし今度は手加減しない。』

そう言い残し、美和は去って行った。暫くして練習は終わり、美和は正門前で時音を待っていた。美和が待つこと数分後、時音は来て美和は信じられない事を耳にした。

『精市が…倒れた…』

時「うん、美和だけは知らせておこうって思って…」

『…精市、そんなに悪いの??』

時「うん、確か…ギラン・バレー症候群を酷似した病気だって…」

『ギラン・バレー症候群…聞いたことある。急性・多発性の根神経炎の1つで主に筋肉を動かす運動神経に障害を受けて、四肢に力が入らなくなる病気よ。

私達アスリートにとっては天敵と言っていいほどの病気。』

時「やっぱり美和はスポーツ医療に詳しいね。」

『伊達に母さんの医学書を読んでないからね。』

時「でも、精市はかなりショックみたいで…今も誰とも会おうとし

ないの。」

『でしょうね…精市にとってテニスは精市その物だから…』

時「美和…1度、精市に会ってくれない??」

『え??私が??』

時「うん。恐らく精市は今も美和の事を想ってる。美和に会えば、何か変わるかもしれないし…」

『それじゃ返って逆効果だよ。』

時「え??」

『今も精市が私の事を想っているなら、きっと会おうとしないよ。

見っとも無い姿を晒したくないとか言ってね。』

時「美和…」

『だから、今会うのは止めとく。その代りとっては何だけど、これを精市に渡してもらえる??』

そう言って美和は愛用のリストバンドとペアネックレスを渡した。

時「リストバンドと…これは、ペアネックレス??」

『そう、2年前のクリスマスに渡そうと思ったんだけど…出来なくて。』

時「そっか…」

『じゃあ、私こっちだから。』

そして美和が去ろうとしたが時音が美和を呼び止めた。

時「美和。」

『？？』

時「美和がどうしてテニス部に入る事を拒んでるのか、なんとなく分かった。」

『…』

時「認めてもらいたいんでしょ？？紫義さんの妹としてではなく、上川美和として…」

『…そうだね、いつも比較ばかりされてた。上川美和としてではなく、上川紫義の妹として…

テニスを辞めようともしたわ。だけど、それは…』

時「逃げてる事と同じ。本当に認めてもらいたいなら…」

『兄さんを超えるしかない…そう思って帰国したんだけど…』

時「大丈夫よ。青学のメンバーは美和を認めてるから。」

『だといいんだけどね。』

時「それに、私はもう1度ちゃんとした場で、あなたと勝負したい。

だから、テニス部に入らないと承知しないわよ??」

『…その時までに力を蓄えててよ??』

時「勿論。」

そう言って美和と時音は再び試合をすることを誓った。

それぞれの想い

数日後、時音は部活帰りに幸村の病室を訪ねていた。だが、幸村はそっけない態度で接していた。

幸「来るなって言ったはずだろ??」

時「…この間、美和にあったよ。」

幸「…そう。」

時「美和にあなたの事を話した。」

幸「!!美和は…知ってしまったのかい??」

時「ええ…」

幸「どうして余計な事を言うんだ!!時音は俺の気持ちを知らない訳じゃ無いだろう!!」

時「…知ってるわ。だから、話すべきだった。美和は2年前の事を酷く後悔してたから…」

幸「どういう意味だい??」

時「美和がドイツに行ってからも連絡は取り合ってた。その度に美和は精市の心配をしてたの。

そして今回精市がこんな事になって、真っ先に様子を見たい筈なのに、美和は『私が行っても、何の力にもなれないから』って、行かなかった。」

幸「…」

時「その代り、美和からこれを預かって来たの。」

そう言って時音は幸村にリストバンドとペアネックレスを渡した。

幸「リストバンドと…ペアネックレス。」

時「美和も同じものをつけてるの。2年前のクリスマスに渡そうと思ったんだけど渡せなかったって。」

幸「美和…」

時「少なくとも美和は誰かの力に頼らずに乗り越えようとしている。だから、精市も負けないで。」

そう言って時音は出て行った。

次の日の夕方、美和は学校が終わると幸村の病室を訪ねた。

『（コンコン）』

幸「はい。」

『失礼します。』

幸「！！（この声は！！）」

『…来ちゃった。来ないって言ったばかりなのにね…』

幸「美和…」

『久しぶりね…元気そうじゃ…ないみたいだけど…』

幸「時音から聞いたよ。ドイツに居る間も俺の事を気にしてたって…」

『確かにね…でも私は貴方の力にはなれないの。ごめんなさい。』

幸「謝らなくてもいいよ。現にこうして会いに来てくれたから。それで十分だ。

だからもう自分だけ責めるのは止めてくれ。」

『…変わったね。精市。』

幸「そう??」

『うん、なんていうか…そう。器が大きくなったっていうか…』

幸「それは褒め言葉なんだよね??」

『もちろん。

考えてみれば、自信が無かったのかもしれない。私がテニスをしてたら、精市が、どこかに消えてしまいそうな気がして。』

幸「そんな事、ある訳ないだろ??」

そう言うと幸村は美和を力の限り抱きしめた。

幸「俺は美和を置いて行ったりしない。絶対に。だから美和も俺の側から離れないでくれ。頼む。」

『(精市)…うん。』

そして美和と幸村は抱き合ったままキスをした。まるで今までの空白を埋めるかのように…

暫くして美和は幸村にこう言った。

『精市、私決めたよ。女子テニス部に入る事にした。』

幸「そう、時音が喜びそうだな。」

『そうだね、時音とはいずれ決着をつけなきゃいけないって思ってたから。

それに、もう迷わない。精市がコートに戻るまでに強くなるから。約束。』

幸「ああ、俺も必ずコートに戻って来る。約束だ。」

そしてお互いのリストバンドにＮｅｖｅｒ　Ｇｉｖｅ　Ｕｐと刺繍(ししゅう)

した。

次の日の放課後、いよいよ美和ＶＳ捺希の試合が行われようよしていた。

その試合は手塚を始め、男テニのレギュラーに七海、そして竜崎も見物に来ていた。

『フィッチ??』

捺「スムース。」

そして美和がラケットを回すとスムースになり、捺希はサービスを選んだ。

審「ザ・ベストオブワンセットマッチ、柊、トゥサーブ。」

捺「…（上川さんは、今回は手加減しないって言った。ならこっち

も最初から全力で行く。）フ、ッハ！！」

七「弾丸サーブ。捺希ちゃん本気だ…」

不「捺希の弾丸サーブは見た目と違ってスピードも重さもある。あれを打ち返すのは至難の業だよ。」

『ん…（見た目と違って早いし、重い。）でも、これで点を取れると思ったら大間違いよ。』

パコン！！

七「打ち返した。」

捺「だと思ったよ。でも、これならどう？？」

そう言って捺希は前に出て、美和が居るコートの反対側にストロークを打った。

審「15－0.」

『へぇ…うまく裏をかいたね。これは面白い試合になりそうね。』

その後、激しい攻防戦が続き、捺希はサービスゲームをキープした。

審「ゲーム、柊、1－0.チェンジコート。」

『…やるね。最初のゲームを取られたの久しぶりだよ。』

捺「まだまだ、これからだよ。」

七「…2人とも、笑ってる。」

不「テニスを楽しんでるって感じだね。」

『…女の子相手にあれを使うのはちょっと気が引けるんだけど、使わないと不味いからね。』

捺「出し惜しみしてないで使ったらいいじゃない。」

『そう??なら遠慮なく。』

そう言って、美和はラケットを右に持ち替えて、構えた。

手「む…あいつ、あれを使うのか…」

タ「あれってなんだい??手塚。」

竜「見てれば分かるよ。」

捺「（右に持ち替えて何するんだろう??）」

『（さぁ、行くよ。）フ、ッハ!!』

美和が打ったボールは捺希の前で回転して、回転したボールは捺希の顔面に向かっていった。

捺「え??うわ!!」

捺希は驚きの余り、尻餅をついてしまった。

桃「おい、今のサーブってまさか…」

乾「ツイストサーブだな。」

英「にゃ～、あの子ツイストも打てるんだ～。」

捺「ほえ～。」

『あ～、やっぱり止めた方がいいかもね。』

そして美和はそれ以降ツイストは打たず、普通のサーブで試合を進めて行った。それでも美和は捺希を引き離していき、気がつけば美和のマッチゲームになっていた。

審「ゲーム、上川、５－３．チェンジコート。」

捺「はぁ、はぁ。」

『…フゥ。』

竜「やはり、黄金の不死鳥は健在だな。」

海「黄金の不死鳥??」

竜「美和の異名さ。あの子は公式戦1度も負けた事が無いんだ。」

桃「1度もッスか??」

手「そうだ。公式戦負け無しと言う経歴で不死身の強さからついた異名が…」

竜「黄金の不死鳥って訳さ。」

七「すごい二つ名ですね。」

竜「他にも美和はある能力を隠し持っているからね…厄介な選手って事には変わりないよ。」

一方美和と捺希は…

『マッチゲームだけど、もう少し意地を見せたら??』

捺「言われなくたってするよ。」

『じゃあ、その意地とやらを見せてよ。』

そして再び激しい攻防戦が続き、美和がマッチポイントいう土壇場で捺希は弾丸スマッシュを打った。

美和は受け止めはしたものの余りの重さにラケットが弾き飛ばされた。

審「デュース。」

『…（手がまだしび出てる。なんて威力。）』

捺「上川さん、大丈夫??」

『うん、痺れてるだけだから。（すごいな…柊さん。元々技術はあるからこれからスピードとスタミナさえ上げれば時音以上に厄介な選手になる。）』

そして美和は先にアドバンテージを取り、最後にはスマッシュに見せかけたドロップボレーで勝利した。

捺「…空中ドロップボレー。」

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ上川。６－３．」

『フゥ、なんとか勝ったわね。』

捺「…負けちゃった。強いね、上川さん。さすが、黄金の不死鳥って呼ばれてるだけの事はある。」

『知ってたんだ。私がなんて呼ばれてるか。』

捺「有名だからね。コピー能力を持つ天才テニス少女って。」

七「コピー能力??上川さんって、相手の技をコピーできるの??」

『ええ、１度見れば大抵はできる。』

七「す、すごい…」

竜「さて、美和。もう結論はついているんだろ??」

『はい。』

竜「聞かせてもらおうか。」

『正直、私がどこまでやれるか分からないけれど、やってみようって思います。』

捺「それじゃあ…」

『これからよろしくね、柊さん（ニコ）。』

捺「うん！！」

そう言って捺希は美和に抱きついた。

『く、苦しい…』

七「捺希ちゃん、上川さん苦しそうだよ？？」

捺「あ！！ゴメン！！」

『ケホ、ケホ…大丈夫。』

七「自己紹介がまだだったね、私は東雲七海。男子テニス部のマネージャーなの。よろしくね。」

『私は上川美和。こちらこそよろしくね。』

英「次はオレ！！オレは菊丸英二、英二って呼んで！！」

大「俺は大石秀一郎。副部長で英二のダブルスパートナーだ。よろしく。」

不「僕は不二周助。よろしくね。上川さん。」

タ「俺は河村隆、よろしく。」

乾「乾貞治だ。君のデータきっちり取らせてもらうよ。」

桃「俺は桃城武です。１年です。皆からは桃って呼ばれてます。よろしくお願いします。」

海「海堂薫です。同じく１年です。よろしくお願いします。」

竜「以上が男子テニス部のレギュラーだ。仲良くしてやってくれ。」

『はい、皆こちらこそよろしくね。』

捺「因みにいうとね、私と周助は幼馴染っていうか、腐れ縁??」

『つまり、私と国光みたいな関係って事だよね。』

捺「簡単に言えばそうだね。」

不「へぇ、上川さんは手塚の事名前で呼ぶんだ。手塚も上川さんの事名前で呼ぶの??」

手「…」

『そうだよ。お互い名前で呼び合ってる。ただ、国光は照れ屋だから人前ではあまり呼ばないけどね。』

手「余計な事を言うな。」

『クス、はいはい。』

捺「じゃあ、上川さんは明日から正式に入部って事でいいかな??」

『良いよ。』

捺「ＯＫ。それとね、周助には気をつけた方が良いよ??」

『どうして??』

そして捺希は美和の耳元でこう言った。

捺「アイツは黒種族だから、何考えてるか分かんないのよ。だから、弱み握られないように気をつけりよ??」

不「捺希、何上川さんにある事ない事吹き込んでるんだい（黒）？？」

捺「本当の事じゃない。」

『…（なんだか、不二君精市と蔵に似てるな…）』

不「上川さん、僕が誰に似てるって??」

『!!な、何でもない。』

七「不二君、そろそろ戻ろう??」

不「ああ、うん。それじゃあね、上川さん。捺希、また妙な事を言ったらタダじゃ済まないよ??」

そう言って不二は去って行った。

捺「でしょ??」

『うん…ここにもいたのね…』

捺「ここにも居たってどういうこと??」

『2人ぐらいああいうタイプの人を知ってるの。』

捺「2人も知ってるの??」

『うん、1人は私の従兄妹。もう1人は…』

捺「もしかして彼氏??」

『そう、正確に言えば、元彼になるのかな。』

捺「そんなにいるんだ…」

『柊さんも大変だね。』

捺「分かる??それとさ、その呼び方止めない??捺希でいいよ。」

『でも…』

捺「良いから。私も美和って呼ぶから。」

『そうだね、これからよろしく。捺希。』

捺「うん！！ついでに言うと七海の事も名前で呼んであげて。七海きっと喜ぶから。」

『分かった。』

そうして次の日から美和は女子テニス部員として活動をするようになった。

サムライジュニア登場

それから月日が流れ春休みが終わり、美和達は3年生へと進級した。

そして始業式が終わって美和達はクラス替えの掲示板を見に行くと、そこには既に捺希が居た。

『…凄い人だかり。』

七「うん、これじゃあ見えないね。」

『クラス、一緒だったらいいね。』

七「うん、私は美和ちゃんと捺希ちゃんと一緒のクラスだったらどこでも。」

『七海の場合、欲を言うなら不二君とも一緒のクラスがいいでしょ??』

七「え??う、うん…」

捺「あ!!美和、七海〜。」

七「捺希ちゃん。」

『クラス替えどうなったの??』

捺「3人とも同じクラスだったよ。6組だって。」

七「ホントに??よかった〜。」

捺「ただ…」

すると英二が美和に抱きつこうとしたが、不二によって阻まれたのだった。

不「やぁ、七海。クラス替えの掲示板見た??」

七「うん、美和ちゃんと捺希ちゃんと同じ6組だって。」

不「そうなんだ。実はね、僕と英二も七海と同じ6組なんだ。」

七「ホントに??」

『成程ね…（だからさっき捺希の表情が一瞬曇ったのか。）』

捺「ねぇ、そろそろ行かないとチャイムなるよ??」

『そうね、ならいこっか。英二、ほら一緒にいこ??』

英「おう!!」

そう言って美和達5人は教室へと行った。

そんな日々がしばらく続き、1年生が入学して部活にも入り始めた頃テニスコートではちょっとした騒ぎになっていた。

その日の昼休み、美和は竜崎に呼び出されて放課後にレギュラーウェアを着てコートに来るように言われていた美和はその騒ぎに不審に思い、行ってみた所、先輩気取りをしていた荒井と池田が1年イビリをしていた。

それを見ていた美和、七海、捺希の3人は溜息をついてコートに入って行った。

美和達が止めに入ろうとしたその時、1年生の1人がラケットを持って凄い勢いでコーチ端にある缶を吹っ飛ばした。

『…』

捺「今の音、まさか。」

そして捺希が落ちた缶を拾うと缶の中身は大量の石が詰めてあった。

『そのまさかみたいね。』

捺「どういう事??荒井、池田。いくら相手の実力を見るからって1年相手に此処までやる??」

七「荒井君、池田君。やって良い事と悪い事があるよ。2人なら分かるよね??」

荒池「「…はい、すいません。」」

『今日はもういいから帰り??この後竜崎先生来るから。』

荒池「「失礼します。」」

そう言って2人は帰って行った。2人が帰ると美和は缶を吹っ飛ばした男の子の所に行った。

『見事なサーブだったよ。リョーマ。』

七捺「「え??」」

リ「サーブだけで分かったんすか??流石っすね。」

そう言ってリョーマは被っていた帽子を取り、美和の方を向いた。

『久しぶりね、リョーマ。相変わらずちっこいまんまね。』

リ「余計なお世話ッスよ。」

『クス、本当の事でしょ??』

そんな世間話をしていると、捺希たちが話しかけて来た。

捺「お話し中悪いんだけど、美和この子の事知ってるの??」

『あぁごめん、この子は越前リョーマ。私が一時期アメリカに居た時に知り合ったの。』

捺「でも、美和ドイツにいたんじゃ…」

『だから、一時期って言ったでしょ？？この子ちょっと生意気だけどテニスの腕は保証するよ。まぁ私より弱いけどね。』

リ「一言余計っすよ。」

捺「私、柊捺希。よろしく。」

七「私は、東雲七海。男子テニス部のマネージャーなの。よろしくね。」

リ「どうも。」

すると、桃がレギュラージャージを羽織ってやって来た。

桃「へぇ、お前がツイストサーブを打つ1年か。」

『桃。』

捺「ねぇ、桃。越前君もツイストが打てるの??」

桃「打てるって聞きましたよ??」

『確かに打てるわ。』

桃「なら試合しようぜ??お前がどれ程のものか見てやる。」

『ダメよ桃。それ以前にアンタは怪我人でしょ??』

捺「そうよ、悪化でもしたらどうするの。」

七「それにもうすぐ先生が来るから途中で止めさせられるよ??」

桃「チェ。」

するとようやく竜崎が現れ、周りには女の子が3人居た。

竜「待たせてしまったようだね。」

捺「先生、遅〜い。」

？「あれ??リョーマ君じゃん。こんな所でどうしたの??」

リ「赤月に小鷹。」

『リョーマ知り合いなんだ。それより、私の試合の相手はそこのポニーテールに結んでいる女の子ですか??』

竜「そうだ。小鷹、この人が先程言っていた上川美和だ。美和は強いぞ、部長の手塚と保々同じの実力者だ。ラブゲームにならんよう気をつけろよ。」

那「小鷹那美です。よろしくお願いします。」

『こちこそよろしく。』

そして美和と小鷹はコートに入り、試合が始まった。

捺「美和、手加減してやりなよ??相手は1年なんだから。」

『こう言ってるけど、どうする??手加減しようか??』

那「全力でお願いします。」

『だってさ。なら遠慮なく本気で行くよ。』

そして試合は始まり、ラリーはおろか、殆どがサービスエースかリターンエースで決まっていた。

審「ゲーム、上川。５－０、チェンジコート。」

『…』

那「はぁ、はぁ、はぁ。」

『ねぇ、小鷹さん。ふざけてるの??』

那「そんなこと!!」

『私にはそうとしか思えない。小鷹さんの本気ってこんなものなの？？』

那「！！」

『あなたの気持ちが本物なら、見せて見てよ。貴方の力を。』

そしてズルズルと離されていき、遂に美和のマッチポイントになったその時、小鷹の潜在能力が一瞬だが開花し、美和からエースを取った。

『！！』

審「４０－１５．」

那「今のは…」

『フフ、やれば出来るじゃない。』

小鷹の潜在能力が開花したのも束の間最後は美和のサービスエースであっさりと負けてしまった。

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ上川。６－０．」

那「はぁ、はぁ、はぁ。」

『お疲れ様、最後のスマッシュは良かったよ。正直見直した。』

那「あ、ありがとうございます！！」

竜「どうだい？？試合した感想は？？」

那「はい、えっと…先輩はテニスの腕じゃなくてメンタル面でも器が大きいなって…」

『器が大きいって言われたの初めてだよ。』

捺「具体的に美和のどの辺が大きいなって思ったの??」

那「なんて言うのかな…よく分からないんですけど、でもこれだけは分かります。先輩は本当にテニスが好きなんだなって…」

『…』

捺「そうね、美和は何よりテニスが好き。だから強い。理由なんてそれで十分よ。」

竜「それで、美和はどうだった??」

『…まだ、改善すべき点はいくつかありますけど、強くなりますよ。この子。』

竜「そうかい。やはり、小鷹をお前さんと試合をさせて正解だったね。」

『それはどうも。小鷹さんは元々経験者だから試合勘を取り戻せば大丈夫でしょう。

ただ、彼女はそうはいきませんよね??』

?「え??」

竜「流石だねぇ、そこまで気付いてるとは思わなかったよ。」

捺「美和、どういう事??」

『つまり、あの子は私達より背は高いし、アスリート向きだけど、

テニスは全くの未経験初心者ってこと。』

捺「初心者??マジ??」

『うん。そうだよね??えっと…』

?「巴です、赤月巴。」

「巴ね、私は上川美和、よろしく。』

竜「お前さんの言う通り、美和には他にも頼みがある。実は、空いた時間とか練習が終わった後に巴を鍛えてやってほしいんだ。

巴は初めから美和達の練習メニューはハードだろうからね。」

『そうですねぇ、巴はやりたい??かなりキツイと思うけど。』

巴「確かにきついかも知れません。でも、早く先輩が着てるレギュラーウェア着たいですから。」

『そう、分かった。竜崎先生、良いですよ。』

竜「そうかい??悪いねぇ、次から次へと頼んでしまって。桜乃(さくの)は強制じゃないがやりたいならやってもいいんだよ??」

桜「うん。」

『あなたが竜崎先生の孫の桜乃ちゃん??』

桜「はい、竜崎桜乃(りゅうざきさくの)です。よろしくおねがいします。」

捺「可愛い〜!!全然似てないし〜。」

竜「柊、何か言ったかい??」

捺「何でもありませ～ん。」

『さてと、先生。私達は帰りますから。』

竜「ああ、休みなのにワザワザすまないねぇ。」

そう言って美和達3人は帰って行った。

数日後、本格的な練習が始まり、美和を始め、捺希や小鷹、巴達ミクスドプレイヤーは1年生の入部から男子テニス部の練習に加わっていた。

練習に入ろうとした美和がある事に気付いた。

『あれ??七海、このミクスドダブルスって何??』

七「あぁ、それは今年から男女混合のミクスド制が行われるからペアを組んで陣形の打ち合わせをしたり、試合をするメニューだよ。」

『成程ね…』

すると不二が美和の所に来た。

不「上川さん、キミもミクスドダブルスのメニューが入ってるの？？」

『え？？うん…』

不「なら、僕と一緒にペアを組まない？？」

『え？？良いけど…』

その時美和は捺希をチラッと見ていた。

不「クス、大丈夫だよ。捺希は手塚と組むみたいだから。」

『そうなの？？ならいいよ。』

そう言って美和と不二は練習に入り、捺希と手塚のペアと打ち合っていた。

休憩に入ったそんな時、不二が美和に言った。

不「上川さん、ひょっとしてダブルス経験ある??」

『え??』

不「組んでて随分ダブルスに慣れているんだなって。」

『…よく分かったね、私がダブルス経験があるって。』

不「やっぱりね、とてもやりやすかったよ。」

『それはどうも。』

捺「ちょっと待って!!美和ってダブルスプレイヤーだったの??」

『元々はね、3年前に時音と組んでた時があったから。』

捺「ヒェ〜〜。」

手「アイツはシングルスでもダブルスでも戦力になるからな。」

捺「でもどうしてシングルスプレイヤーに??」

『…倒したい人が居るから。』

捺「倒したい人??」

『うん、と言うより、認めて貰いたいだけなのかも知れない。私はいつもその人と比較ばかりされてきたから…』

捺「比較…（まるで、周助と裕太みたいな関係…）」

手不「「…」」

『今は無理でもいつか倒せるようになりたい、そう思って練習してきたからね。』

捺「美和…」

『さぁ、そろそろ休憩時間も終わりだから戻ろ??』

そう言って美和はコートに戻って行った。

暫くして練習は終わり、美和は巴の練習を見ていた。そしてさすがの巴も疲れたのか終わった頃には疲れ果てていた。

巴「はぁ、はぁ、はぁ、疲れた～。」

『お疲れ様、はいこれ飲むといいよ。』

巴「ありがとうございます。」

『今日はもう終わりだから帰って良いよ。明日の朝練も遅れないようにね。』

巴「はい！！お疲れ様でした～！！」

そう言って巴は着替えて帰って行った。美和も片づけをして帰ろうとしたが部室の前に不二が居た。

『不二君…帰ったんじゃなかったの??』

不「忘れ物をしたついでに上川さんを待っていたんだよ。」

『そう、じゃあ私帰るから不二君も気をつけてね。』

不「送って行くよ。」

『でも…』

不「良いから、それにこんな夜道を女の子1人で帰らせる訳にはいかないからね。』

『それは巴も同じなんじゃないの??』

不「それなら心配いらないよ、さっき越前を見たからね。」

『成程ね。なら遠慮なく。』

すると、美和の携帯が鳴り、美和はディスプレイを見ると溜息をつきながら電話に出た。

『はい…兄さん何か用??』

不「（お兄さん??）」

紫＜＜美和、お前今学校か??＞＞

『そうだけど??』

紫＜＜今ちょうど学校の前に居るんだ、乗って行けよ。＞＞

『言われなくてもそうするよ、じゃあね。』

そう言って美和はそっけない態度で電話を切った。

『不二君、悪いけど私迎えが来てるみたいだから今回は遠慮するよ。』

不「そう??じゃあ、気をつけてね。」

『不二君もね。』

そう言って美和は帰って行った。

暫くして美和達は家に帰りつき、紫義は美和にある事を言った。

『え??兄さん、明日テニス部のコーチするの??』

紫「あぁ、竜崎先生から帰国しているなら1度部員のコーチをしてやってくれってさ。」

『それが明日って訳ね。なら一言言っておく、練習中は私に構わないで。』

紫「何故だ??兄妹なんだからいいだろ??」

『ダメよ。兄妹だからと言って馴れ合いはしたくないの。兎に角、明日は必要最低限にしか話しかけないで。』

そう言って美和は部屋へと戻って行った。

そして次の日の放課後紫義の紹介から練習は始まった。

竜「え～っと、知っている奴もいると思うが今日1日だけ紫義がコーチを務める。紫義は主に男子レギュラーの指導に当たってもらう、お前達しっかりやれよ??」

R「はい!!」

紫「はじめまして、俺は上川紫義だ。職業は一応プロテニスプレイヤーだ、よろしくな。何か質問がある人はいるか??」

男部「はい!!」

紫「なんだ??」

男部「コーチは上川とは兄妹なんですか??」

『…』

紫「あぁ、そうだ。美和は俺に負けないくらい強いからな。」

『…（嘘ばっかり）。』

紫「他に質問がある奴はいるか??」

女部「はい!!コーチは恋人はいますか??」

紫「…一応は居る。だがそう言ったプライヴェートな質問はしないで貰いたい。他に質問は??』

全「…」

紫「居ない様だな、それでは俺からは以上だ。」

竜「では、各自練習初め。」

そう言って美和達は練習を始めた。

女部「上川さんのお兄さんってカッコいいね、超イケメンだもん。」

女部「うん。上川さんも強いけど、コーチはもっと強いんだろうな〜。」

『…』

捺「ちょっと、そう言った話は他でやって貰えない??練習の邪魔だから。」

女部「ご、ごめん。」

そう言って女子部員たちは去って行った。捺希はその後美和の所に行った。

捺「美和、大丈夫??」

『うん、大丈夫。ありがとう、捺希。』

捺「お礼を言われるようなことは言ってないよ。」

『そんなことないよ、さぁ、早く練習しよ??』

そして美和は練習に入った。捺希はそんな美和を心配そうに見ていた。

練習が始まってしばらく経ち、美和と捺希は休憩をしていた。そんな時、英二と不二も休憩なのか美和達の所に来た。

英「にゃ～、疲れたにゃ～。」

『お疲れ様、英二。』

そう言って美和は英二と不二にスポドリを渡した。

不「ありがとう。」

英「美和、サンキュー。だけどコーチの練習はハードだけど、為になるにゃ～。」

『え?:あ…そう…』

不「アドバイスも的確だしね。」

『そうなんだ…良かったね…』

不「…上川さん、どうかした??」

『ううん…何でもない…』

捺「…美和、そろそろ戻ろっか??」

『え??う、うん。』

捺「…」

捺希は不二に何か言いたそうな顔をしていたがコートに戻って行った。

暫くして練習も終わり美和は巴と追加練習をしていた。その頃紫義と竜崎は…

紫「ここに来て美和は随分変わりましたね。暫く見ないうちに強くなった。」

竜「そうだね…信頼する仲間が出来たからだろうか。」

紫「それもあると思いますが、もっと他に美和を支えている人が居るはず。」

手「それは恐らく幸村でしょう。」

紫「国光。それはどういう事だ??」

手「今幸村は難病にかかっていて、まともにテニスが出来ない状態だと聞いています。」

紫「難病??そこまで悪いのか…」

その時、不二が職員室の前を通りかかり、聞き耳を立てていた。

紫「引き離した所で2人の気持ちが離れる事は無い…か。」

手「そればかりか、アイツらの想いは一層強まってる。」

紫「確かにな、幸村が今美和を必要としていると同じ様に美和もまた幸村を必要としている。

今じゃもう俺も嫌われてるしな。」

手「そんなことないと思います。」

紫「何故、そう思う??」

手「以前美和が言っていました、『兄さんは私と精市を引き離した張本人だけど、別に恨んでない』っと。」

紫「しかし美和は俺に対して強いコンプレックスを抱いている。どこに居ても、何をしていても俺と比較されている。こんな惨めな事は無いからな。」

不「…（そうか、上川さんは裕太と同じ境遇だったんだ…）」

すると足音が聞こえて不二は咄嗟に物陰に隠れた。暫くすると美和が来て中に入って行った。

『兄さん、まだいたの??早く帰ろうよ。』

紫「美和…俺が嫌いか??」

『…何言ってるの??そんなはずないじゃない。』

紫「しかし俺は…」

『もうあの事は気にしてない、それに兄さんは私の事を想ってやってくれているんでしょ??それくらい分かってるから。』

紫「美和…」

『だからもう気にしてない。』

竜「物分りのいい妹で良かったな。」

紫「…そうですね、よし美和！！今日はぱぁっと飲みに行くぞ！！お前も付き合え！！」

『ちょ、ちょっと！！』

そう言って紫義は美和の手を取り、去って行った。

次の日、美和が屋上にいると不二がやって来た。

不「やぁ。」

『不二君…どうしたの？？最近は七海と一緒じゃないみたいだけど？？』

不「上川さんに話があったんだ。」

『何??』

不「僕に弟が居るって事は知ってるよね??」

『えぇ、確か…聖ルドルフ学院に通っているんだったっけ??』

不「うん、裕太っていうんだけどね、僕と裕太も上川さんとコーチと似たような関係なんだよ。」

『確かにね…天才と言われる兄とそんな兄にコンプレックスを抱く弟。まさに私はそんな弟君の立場だったから。』

不「でも上川さんは裕太とは違った。」

『…今はそっとしておいた方が良いよ。説得した所で今は理解されないと思うから。』

不「…」

『今は無理でも不二君の真意を知ればきっと分かってくれる、そんな気がする。』

不「…だと良いんだけどね。」

『なら、教室にもどろっか??そろそろ英二と捺希が騒ぎ出す頃だと思うから。』

不「クス、そうだね……上川さん。」

『何??』

不「クス、何でもない。呼んでみただけ。」

『？？変な不二君。』

そう言って美和は先に屋上から出て行った。

不「上川さん…キミにはもう決まった人が居るんだね…」

そう言う不二は悲しみに満ちていた。それを美和が知る事は無かった。

校内ランキング戦

リョーマ達が入部して1ヶ月が経ち、青学は地区予選、都大会のレギュラーを決めるランキング戦が行われた。

しかも今回は特例で1年生が何人か出る事になり、リョーマ、小鷹、そして巴もランキング戦に出る事になった。

その頃美和と捺希はランキング戦の張り紙を見に行っていた。

捺「え～っと私は…Aブロックか。うわ、マジ!?」

『どうしたの??』

捺「手塚と大石と同じブロックだよ、最悪…」

『そう??私まだ国光と同じブロックになった事ないんだよね。』

捺「それは嫌味なの？？」

『そうじゃないよ、只国光はどうして私と国光を同じブロックにしないのかなぁと思って。国光が決めてるんでしょ？？ランキング戦のブロックって。』

捺「あ…うん。」

『まぁ、しょうがないよね。無理に試合をしても何の意味もないし。』

そう言うと美和は自分のブロックを探し始めた。

『あぁ、あった、私はCブロックだって。英二と桃と同じブロックだ。』

すると英二が嘆きに似た声を出していた。

英「え～～！！美和と同じブロックだにゃ～～。」

『英二、私と試合するの嫌？？』

英「だって美和スゲ～強いし、オレ1度も美和に勝ったことないにゃ～～。」

『でも、決まりは決まりだからね。手加減はしないよ？？』

英「鬼～～！！」

そして今度は桃が来て、美和に宣戦布告をしてきた。

桃「美和先輩、俺今度こそ美和先輩に勝ちますから先輩も全力で来てくださいね。」

『勿論。』

桃「そう言えばDブロックのランキング戦の名簿見ました??」

『ううん、まだだけど??』

桃「Dブロックには越前が入ってるからもしかしたらレギュラーの入れ替えがあるかもしれませんよ??」

『成程…リョーマはレギュラーを狙えるほどの実力は持ってるから、下手をしたらランキング戦全勝で行くかもね。』

桃「全勝!??」

英「美和、それはいくらなんでも…」

捺「そうよ、いくら越前でも全勝は無理なんじゃないの??」

『そうかな??レギュラーさえ倒せば全勝はそれほど難しくないよ??』

捺「それはそうだけど…」

その時、手塚の怒鳴り声が聞こえた。

手「お前達、何をしている!!早くコートに入れ。」

『はいはい、じゃあ捺希、またね。ランキング戦頑張って。』

そう言って美和と英二、桃の3人は去って行った。

そんな日々が1週間続き、美和を始め、手塚、大石、不二、英二、タカさん、桃、海堂、リョーマ、捺希、小鷹がレギュラー入りを果たした。

もう1人のレギュラー

次の日の放課後、リョーマと小鷹はレギュラーウェアを着て練習する様になり、それを見ていた巴は2人に劣等感を感じていた。

巴「…」

『どうしたの??』

巴「あ…美和先輩…」

『…羨ましい??あの2人見て。』

巴「はい…なんか…いきなり差つけられたなって…」

『仕方ないわ、あの2人は特別。元々経験があったし、かなりの実力者だったから。』

巴「…」

『でも、巴も負けてないと思うよ??』

巴「え??」

『私もたった1ヶ月で此処まで伸びるとは思わなかったよ。全く経験が無いなんて信じられないくらいにね。

巴は基礎がしっかりしてるから、あと少しで着られると思うよ??あのレギュラーウェア。』

巴「ホントですか??」

『えぇ…不二君もそう思うでしょ??』

すると不二がフェンスの裏から出て来た。

不「気付いてたんだね。でも、そうだね。美和は人を見る目は確かだからもうすぐだと思うよ??」

『でしょ??自信持って。』

巴「はい!!頑張ります!!」

そう言って、巴は去って行った。

『クス、リョーマと巴を見ているとまるで昔の国光と私を見ているみたい。』

不「そんなに似てる??」

『少なくとも今のリョーマは昔の国光のようだわ。テニスが強くて無口で生意気、それはもう似てるわ。』

不「クス、確かに似てるね。」

『それに不二君はどさくさに紛れて私の事名前で呼ぶしね。』

不「嫌だった??」

『別にいいけどね。』

不「そう言えば、先生が呼んでたよ??」

『先生が??なら行ってこよっか。後よろしくね。』

そう言って美和は職員室に行った。

暫くして職員室につくと竜崎の他に手塚もいた。

『失礼します、先生何か…って国光も来てたんだ。』

竜「あぁ、ワザワザすまないね。実はお前さんの意見も聞こうと思って呼んだんだよ。」

『意見??』

竜「あぁ、実は今度の地区予選から巴を試合に出してみようって手塚に言っていたんだが、美和が1番巴に詳しいと思ってな。」

『巴を試合に??でも巴は…』

竜「そう、ランキング戦でレギュラー落ちをしている。だが、あやつは試合に出させた方がもっと伸びるんじゃないかと思ってね…

そこで美和、お前さんの意見を聞きたい。どう思う??」

『…そうですね、巴はまだレギュラーを名乗るには力不足かも知れません。

でも、あの子きっと私達には無くてはならない選手になるはずです。私はその可能性を信じたい。』

竜「…そうか。」

『1度レギュラーを全員集めてはどうですか??それから決めても遅くないと思います。』

手「それが1番妥当だな。」

竜「そうだな、明日の昼休みにでもレギュラーを集めようか。」

手「レギュラーには俺から言っておきます。」

『なら私はミクスドのレギュラーと七海に言っておく。』

手「そうか、悪いが頼む。」

『了解。』

そう言って美和達はコートに戻って行った。

次の日の昼休み、レギュラーは全員部室に集まり、巴のレギュラー入りの討論を始めていた。最初はみんな力不足だと、反対していたが、この1週間巴が本当にレギュラーに相応しいかどうか、各自で判断して結論を出すと言う事だった。

そして瞬く間に1週間が過ぎ、美和達は再び部室に来ていた。

『1週間が過ぎたけど、皆結論は決まった??』

全「うん（あぁ）（はい）（ウィッス）」

女部「私は、赤月さんをレギュラーに加えてもいいと思う。」

『どうして??』

女部「あの子が入部してから比べ物にならない位に上手くなったし、素質もある。」

捺「そうね、巴は素質はあると思うわ。それに私達の練習にもきっちりついてきてる。

私も巴のレギュラー入りには賛成だよ。」

『…そう、リョーマ達も同じ意見??』

美和が聞くとリョーマ達も頷いた。

『先生、皆ＯＫだそうですよ。』

竜「そうかい、よかった…」

タ「でも、納得のいかない人も多いだろうね…」

英「ま、なんとかなるっしょ！！」

不「いざとなったら僕達がフォローすればいいしね。」

桃「やるしかねーな、やるしかねーよ。」

海「フシュ～。」

大「だが、確かに心配だな…」

『巴なら大丈夫だと思うよ??巴は強いから…』

大「…あぁ、そうだな。」

暫くして昼休みになり、巴は部室に呼び出されレギュラー入りの話を聞いた。その時の巴はとても嬉しそうだった。

その日の放課後から巴はレギュラーウェアを着て練習し、レギュラーとしての実力を発揮し始めたのだった。

驚異の乾汁

巴がレギュラー入りして数日が経ち、地区予選が近づいてきたある日の事、美和達レギュラーにある試練が待っていた。それは…

竜「お前達レギュラーにはこの男にとっておきの練習メニューを頼んでおいた。」

すると美和達の前には体操着姿の乾が居た。

全「乾（君）（先輩）」

乾「やぁ、全国大会を勝ち抜くためにはまず、足腰の強化が必要だ。

そこで、全員分のパワーアンクルに２５０グラムの鉛の板を２枚差し込んでおいた。

両足に１キロの負荷がかかる訳だ。」

桃「大した重さじゃないですね。」

乾「さらに赤、青、黄色のコーンに同じく赤、青、黄色の溝をを塗り分けたボールをたくさん用意した。」

英「ふっふ～ん、にゃ～る程ね。」

乾「ミスが出たら終了だ。いくぞ、英二。」

パコン！！

そうしてコーン当ての練習が始まった。しかし、練習が続くにつれて判断力も鈍り、英二は乾のフェイントでミスをしてしまった。

英「乾！！ひでぇ～よ！！フェイント！！」

乾「体力も落ちれば判断力も落ちる。」

英リ那「「「！！」」」

乾「菊丸後退、そして言い忘れていたがミスしたものはこの乾特性野菜汁を飲ませてやろう。」

英「えっ！？」

手大不タ桃海捺「「「「「「「『！！」」」」」」』

英「な、何が入ってるの？？」

乾「食べ物だ、心配するな。味も調整してある。」

そして英二は恐る恐る野菜汁を手にし、一気に飲み干した。英二が飲み干した次の瞬間…

英「げぇ!!なんだこれ!!ヒェ〜!!水、水、水!!」

そう言いながら英二は洗面所に駆け出した。

竜「越前。」

七「小鷹さん!!」

リ那「「あ!!」」

そして余所見をしていたリョーマと小鷹もミスをしてしまい、乾は2人に野菜汁を飲ませたがやはり耐えられず、洗面所に行ったのだった。

R「…」

竜「何をしている!!次、大石、河村、柊!!」

大タ捺「「「!!」」」

大「（ミスは…）」

タ「（許されない…）」

捺「（絶対に…）」

そうして大石から恐怖のコーン当てが始まった。大石は野菜汁のの恐怖心と闘いながら、確実にコーンに当てて行った。

朋「わぁ～、大石先輩上手～。」

堀「流石副部長、派手じゃ無いけど確実だな。」

しかし、パワーアンクルの負荷でバランスを崩してしまいギブアップしてしまった。それはタカさんと捺希も同じの様で…

タ「あぁ～～！！」

捺「から～～～い！！」

『クス、皆必死ね。』

巴「美和先輩、あの野菜汁ってそんなに美味しくないんですか??」

『さぁね、私は試作品を1度飲んだことがあるけど、物凄い不味か

った。

それで、気を失ったことがあるから。』

巴「そんなに…」

七「次、巴ちゃんだよ。」

巴「は、はい！！」

しかし、巴もミスをしてしまい、耐えられずダウンしてしまった。
その後の桃と海堂も洗面所に行ったのだった。

そして遂に美和と手塚、不二のコーン当てが始まり、不二は野菜汁飲みたさにワザとミスをした。

水「あ！！不二先輩もミスった！！」

英「不二！！今のワザとだろ！！」

不「うん、ちょっと飲んで見たくて…」

そう言って不二は野菜汁を飲み干したが当の本人はキョトンとしていた。

不「プハァ、何だこれ結構うまいよ??オススメ。」

英「嘘つけ！！あぁ～～。」

カ「恐るべき人が居た。」

捺「と言うより、周助の味覚がおかしいのよ。」

堀水カ「「「捺希先輩！！」」」

七「捺希ちゃん大丈夫??」

捺「…何とかね。貴方達1年生はまだ分からないかもしれないけど、乾が作った特製ドリンクは効果はあるかも知れないけど想像を絶する程不味いわ。

それをいとも容易く飲み干す周助は味覚自体がおかしいのよ。」

すると不二がどす黒いオーラを出しながらやって来た。

不「捺希、誰の味覚がおかしいって??（黒）」

捺「周助の他に誰が居るのよ!!」

不「僕に盾突くとはいい度胸だね。（黒）」

捺「ホントの事でしょ。」

七「ま、まぁ2人とも落ち着いて。ね??」

不捺「「七海は黙ってて。」」

七「ヒィ…」

するとコーン当てを終わった美和が2人の間に割って入ってきた。

『はい、そこまで。』

不捺「「!!」」

『つまらない事で喧嘩しないの。七海や1年生が怯え切っちゃって

るじゃない。』

不捺「「あ…」」

『2人が言いたい事も分かるけど今はそれどころじゃないはずよ。』

捺「そうだね…ごめん。」

不「僕も悪かったよ。」

『よし、これにて終了。』

そう言うと美和は七海の所に行った。

七「ありがとう、美和ちゃん。」

『どういたしまして。』

乾「全員終わったところで流石、思ってたより動けたな。

菊丸はインパクト時にグリップがずれる傾向がある。前腕筋を鍛えるともっとショットが安定するよ。柊は技術とスピードはあるがその分スタミナが続いていない。

大石、海堂、小鷹は前後、河村、不二、赤月は左右のダッシュが甘い。大腿四頭筋と下腿三頭筋を強化する必要がある。」

英大タ海「「「「どこだよ、それは!!」」」」

乾「桃城はショットを打つとき７０％位に抑えて打った方が確実性が増す。」

桃「へ～い。」

乾「ミスらなかった手塚と上川は流石だが、手塚はもう少し柔軟が必要だ。表情も硬い。」

英大不桃「「「「っプ！！」」」」

『…クス、乾君、本人が気にしてる事を言ったらダメだよ。』

手「…美和、フォローになって無いぞ。」

『そう？？』

乾「そして越前…毎日2本ずついこう。」

そう言って乾はリョーマに牛乳を2本渡した。

リ「幾ら牛乳飲んだってそんなにすぐデカくなる訳…！！」

英大桃海「「「「飲めよ。」」」」

手「乾が言うんだ、間違いないだろう。」

竜「本人で実証済みさ。」

乾「では本題に戻って鉛の枚数を1枚追加…」

不「待てよ、乾。」

大「5枚で良いぞ。」

タ「お前と同じ枚数だろ??」

桃「ねぇ乾先輩、どうせ5枚までやるんでしょ??」

リ「6枚でも良いけどね。」

乾「いや、レギュラーは10枚まで…」

英大不タ「「「「…」」」」

『クス。』

英「ふざけんな!!この~!!」

そう言って英二達レギュラーは乾にボールを当て始めた。暫くして騒ぎは収まり、美和は乾にある事を聞いた。

『ねぇ、乾君。私達も鉛の数が１０枚なの？？』

乾「いや、女子の鉛の枚数は８枚だ。」

那「良かった～。」

『それならよかった。じゃあ続きやろっか。』

那巴「「はい！！」」

そう言いながら一同は気合を入れ直し、練習に励むのだった。

行く手を阻む者

それから数日が経ち地区予選も間近に近づいたある日の事美和はストリートテニス場に来ていた。

しかし美和が来たころは人が大勢いてその中にもリョーマと桃、そして巴もいた。

『リョーマと桃、それに巴じゃない、どうしたの??』

リ桃巴「「「美和先輩。」」」

『3人がこんな所に居るなんて珍しいね、どうかした??』

桃「それが…」

そして桃は美和にこれまでの経緯を話した。

『成程…それにしても、っプ！！』

リ「笑わないで下さいよ。」

巴「先輩は知っていたんですよね??リョーマ君がダブルスの経験が全然ないってこと。」

『まぁね、アメリカに居た時にも1度ダブルスの基本をこの子に教えたんだけど、見事に忘れてるみたいだし。まぁ、無理もないわね。リョーマはシングルス向きだし。

ミクスドは基本はダブルスだし、ある程度はマシになったけど、試合とはまた別の話だけどね。』

リ「チェ。」

『とりあえず、今日は3人とも帰りなさい。ここに居ても仕方ないからね。』

桃「美和先輩はどうするんですか??」

『私はもう少しここに居て彼らのレベルを確かめてから帰るよ。』

桃「じゃあ、俺も残ります。」

『心配しなくても家はすぐ近くだし、試合とかはしないから。大人しく帰りなさい。

それとも明日寝坊してグランド走らされたい??』

桃「げ!!」

巴「それはちょっと嫌かも…」

『下手したら乾君の野菜汁もでるかもね。』

リ「桃先輩、帰りましょう。」

桃「…そうだな。」

『分かればいいのよ。』

そう言って3人は大人しく帰って行った。すると女の子が声をかけた。

？「貴方が上川美和さんですか??」

『そうだけど、あなたは??』

？「はじめまして。私、橘杏って言います。」

『（橘ってどこかで…）橘さんね、よろしく。』

杏「上川さんはあの手塚さんと同じぐらいの実力の持ち主だと聞いてお手合わせしたいなって思ってたんですけど…」

『このコートはダブルス専用らしいからね。』

杏「…はい、試合はまたの機会にします。」

『橘さんもミクスド選手??』

杏「はい、今度ある地区予選にも出るんです。」

『そっか…ならお互い頑張ろうね。』

杏「はい！！じゃあ私はこれで。」

『それじゃあね。』

そう言って美和と杏の2人は帰って行った。

地区予選開始

それから数日が経ち、地区予選が始まった。暫くしてから青学の試合が始まり、Ｄ２でリョーマと桃のペアの試合を美和は不安げに見ていた。

そこにミクスドの試合を終えた巴が来た。

巴「美和先輩…」

『あ…巴、試合は終わったの??』

巴「はい、終わりました。不二先輩がフォローしてくれたおかげで勝つことが出来ました。」

『そう、よかったね。巴のデビュー戦だもの。勝ちたいよね。』

巴「はい！！ところでリョーマ君と桃ちゃん先輩は…」

『う～ん、特訓はしたんだけどね、まだ不安はあるわね…』

巴「…はい。」

その後相手のペアに翻弄されながらもなんとか勝ったが、あまりにも低レベルなダブルスに竜崎は激怒し、その後の2試合は謹慎処分となった。

その後も青学は順当に勝ち進み、決勝戦まで上り詰めた。手塚と不二、美和の3人は第2シード校の柿ノ木中学の試合を見ていた。

そこに柿ノ木中の九鬼が来た。

九「手塚に不二、そろって敵情視察か??」

手「…」

『…誰？？』

不「柿ノ木中の九鬼だよ、この大会の第2シード校なんだ。」

『ふ～ん。』

九「ところで手塚、初戦は試合に出なかったそうだな。いや、出れなかったんじゃないのか？？」

『…』

手「行くぞ、不二、美和。」

九「待てよ！！」

すると九鬼が手塚の左肘を掴んだ。

九「腕見せろよ、何か理由があるんだろ??」

手「…離せよ。」

そして九鬼は強引に手塚を引っ張ろうとするがビクともしなかった。

すると美和は我慢の限界が来たのか2人の間に割って入った。

『いい加減にしなさいよ!!』

そう言って2人の腕を引き離した。そして3人は去って行った。

暫くして準決勝が終わり、美和達は信じられない話を耳にしていた。

捺「それ本当??第2シードの柿ノ木中が無名の学校に負けたって。」

七「うん。部長の九鬼君も対戦相手の2年生に手も足も出ないって感じで…」

『2年生に??』

捺「信じられない…」

不「次の決勝戦、そう簡単に勝たせてくれない様だね。」

『そうね…』

そう言うと美和は広場に行きだした。

捺「美和、どこ行くの??」

『アップのついでに準決勝の結果見てくるよ。どんな選手が出てるのか気になるしね。』

そう言って美和は去って行った。暫くして美和がウォーミグアップをしていると杏が声をかけた。

杏「あ、上川さん!!」

『ん??あ…橘さん。』

杏「今アップですか??」

『えぇ、初戦以外全部見物だったからね。』

杏「ミクスドエースが出なくても勝てるなんてやっぱり青学は強いんですね。」

『そうでもないよ、特に次の決勝戦はそう楽に勝てる相手じゃないみたいだし。』

すると不動峰の神尾がやって来た。

神「杏ちゃんここに居たんだ、橘さんが呼んでるから…って青学の上川!?」

『よく知ってるね、私の事。』

神「それは…もちろん。女子テニスの中でもアンタは全国トップレベルのプレイヤーって聞いてるからな。」

『それは光栄ね、えっと…』

杏「あ、彼は神尾アキラ君です。不動峰のレギュラーなんです。」

神「どうも。」

『その神尾君と一緒にいるって事は橘さんはやっぱり…』

杏「はい、不動峰中のミクスド選手です。」

『成程ね…そうなんじゃないかって思ってたの。』

杏「試合に当たったら手加減無用でお願いします。」

『望む所よ。』

すると七海が美和の所にやって来た。

七「美和ちゃん、そろそろ集合だから行こう??」

『分かった、それじゃ2人ともまたあとで会いましょ。』

そう言って美和と七海は去って行った。残された2人はと言うと…

神「ところで杏ちゃん、あの人といつ会ったの??」

杏「この間ストリートテニス場であったの、なんていうか上川さん、雰囲気がお兄ちゃんに似てるなって思って。全国の実力やってみんなそうなのかな??」

暫くして青学は集合がかかり、竜崎は決勝戦のオーダーを発表した。

竜「さぁ、いよいよ決勝戦だ。相手は不動峰中学、柿木中学を全く寄せ付けなかった相手だ。くれぐれも油断しないように。」

全「はい！！」

竜「ではオーダーを発表する。まずＤ２、河村・不二、先手必勝。Ｄ１、大石・菊丸、ミクスドＤ、河村・柊、河村は体力配分を考えな。Ｓ３、海堂、ミクスドＳＳ、美和、Ｓ２、リョーマ、Ｓ１、手塚。このオーダーに変更はない、しまって行くよ。」

手「青学～、ファイ！！」

全「オォ～！！」

そうして決勝戦が始まり、Ｄ２の試合が始まった。序盤のうちは不動峰が優勢だったが、流れを変えるため、不二はトリプルカウンタ

ーの1つ、つばめ返しを発動した。

『へぇ～。不二君ってやっぱり天才だね、ボールが弾まない技も打てるんだ。』

捺「美和、もしかしてトリプルカウンター初めて見た??」

『うん、不二君は3つのカウンターが打てるって聞いてたけど実際どんな技か知らなかったし。』

七「あれが不二君が得意とするトリプルカウンターの1つ、つばめ返しだよ。」

捺「相手のトップスピンを利用して超スライスの回転をかけ、相手に放つ。つばめ返しの攻略法はいまだ見つかって無い。」

『味方としては心強いけど敵となるとこの上なく厄介な技だね。』

そして流れに乗った青学は不動峰を引き離していくが、不動峰は試合の終盤で波動球と言う強力なフラットショットを打ち、その打球は不二へと向かっていった。不二は打ち返そうと構えたその時、タカさんが不二を庇い波動球を打ち返したがタカさんはその衝撃で手首を痛めてしまい、Ｄ２は棄権負けとなった。

七「取りあえず病院に入った方が良いよ、骨が折れてるかもしれないから。」

『はい、氷。』

タ「美和、ありがとう。ゴメンな、捺希。俺が怪我したばっかりに…」

捺「そんなことないよ、タカさんは怪我を治す事だけを考えて。」

タ「じゃあ、行ってくるね。」

そう言ってタカさんは病院へと言った。暫くしてＤ１の試合が始まり、６－２で圧勝で終わった。その後のＳ３は苦戦はしたものの海堂の新技ブーメランスネイクがさく裂し、持ち前の体力と精神力で勝利した。

そしていよいよミワのミクスドＳＳの試合が始まろうとしていた。

『よ～し！！やっと出番が来たようだね。』

捺「実力を見せつけてやりな！！」

七「頑張ってね。」

手「美和、くれぐれも油断はするなよ。」

『はい、はい。国光はいつも硬いね。』

竜「美和、思いっきり暴れておいで。」

『はい！！』

そう言って美和はコートに入って行った。美和がコートに入ると不動峰は杏が出て来た。

杏「やっぱりミクスドＳＳは上川さんだったんですね。」

『決勝戦ぐらいは出ないとね。』

審「それでは青春学園対不動峰中学校、ミクスドＳＳの試合を始めます。」

そして最初のサービス権は杏から始まった。

審「1セットマッチ、不動峰橘、トゥサーブ。」

杏がサーブを打ってから暫くラリーが続いたがやはりサーブ権を握っている杏が優勢なのか、杏はサービスゲームをキープした。

審「ゲーム不動峰、1－0．チェンジコート。」

神「よし！！」

『ふ～ん、結構やるね。』

手「また始まったか…」

七「どういう事？？手塚君。」

竜「美和は昔から相手の力量を図るためにワザと落とす癖があるんだよ。そして相手に会わせて力の配分を変えるんだ。」

不「戦法が僕に似てるね。」

すると美和が戻ってきた。

『フゥ…』

竜「どうだい??久々の公式戦のシングルスは??」

『そうですねぇ～、久々だから武者震いが出ましたよ。』

手「美和、もっと真面目にやれ。」

『やってるよ??それに橘さん、2年生にしては結構やるもん。』

手「…」

『でも、これじゃあ私には勝てないよ。』

そう言って美和は杏を見て不敵に笑っていた。その後美和は本領発揮し、杏を引き離していった。

審「ゲーム青学、5－1．チェンジコート。」

全「…」

橘「まさか…此処までとはな…」

神「杏ちゃん…」

杏「はぁ、はぁ、はぁ。」

『これが実力の差だよ。』

杏「っ!?」

そして美和が水分補給をしている時、リョーマがこんな事を言った。

リ「ねぇ、美和先輩。先輩、コピー技使わないの??」

『え??』

捺「考えてみれば、そうね。と言うより美和、帰国してから1度もコピー技使ってないよね??」

『言われてみればそうね…見たい??』

捺「見たい!!」

『じゃあ、良いよ。誰の技にしようかな…』

七「美和ちゃんそんなに持ってるの??」

『一応ね。』

手「あまり腕の負担がかからない技にしろよ。」

『分かってるよ、え〜っとあ、そうだ。あの技にしよっと。』

捺「ねぇねぇ、誰の技??」

『当たったらジュースおごってあげるよ。』

そう言って美和は再びコートに戻って行った。

それからラリーが続き、美和がマッチポイントなった。そして美和がスマッシュを打とうとしたその時、美和は従兄妹の白石の得意技円卓ショットを打ち、勝利した。

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ青学、上川。６－１.」

捺「い…今の技って…」

英「にゃ～～、ボールが１２個位に見えたにゃ～。」

海「今の技が先輩のコピー技なんだろうな。」

手「あれは円卓ショット、大阪の四天宝寺の部長、白石が得意としている技だ。」

不「手塚良く知ってるね。」

捺「でもなんで美和がそんな技を知ってるの??美和って大阪出身だっけ??」

竜「美和が知っていても無理ないさ、美和と白石は従兄妹同士だからね。」

全「従兄妹同士!!」

乾「なるほどな、上川が誰かに似ていると思っていたが、四天宝寺の白石だったか。」

『ただいま、ねぇみんなして何を盛り上がってるの??』

捺「ねぇ、美和。アンタ四天宝寺の白石と従兄妹ってホント??」

『う、うん…確かに私と蔵は従兄妹だけど…』

捺「マジで…」

大「そう言われれば、似てる気もするな…」

不「だから知ってたんだね。」

『円卓ショットが分かったのって国光と先生だけでしょ??』

捺「…ご名答です。」

『じゃあ、さっきの賭けはなしだね。』

すると準備万端のリョーマがジャージを脱いでコートに入って行った。美和はリョーマが出る際にこう言った。

『リョーマ、しっかりね。』

リ「ウィーッス。」

そうしてS2の試合が始まり、両社1歩も引かない激しい好勝負となった。しかし、試合の中盤になるとリョーマは伊武のスポットと言う筋肉麻痺の技にはまり、リョーマは無理に打ちに行った為、左瞼を怪我をしてしまった。

『あ～あ…』

不「無理に打ちに行くからだよ。」

海「ハッ！！ざまねぇな。」

手「東雲、どうだ??」

七「…ダメ、眼球は大丈夫そうだけど、傷口が酷くて…」

大「ここまで来て棄権するのは悔しいけど…」

すると、リョーマがやると言い出した。

リ「俺、やるよ。」

大「越前、だが…」

審「越前君、傷口が止まらないようじゃ、試合続行は認められない。」

そしてリョーマはユニフォームに傷口を擦り付け言った。

リ「血は止まったよ。」

『クス…』

審「き、君…」

竜「美和、あの傷口止められるかい？？」

『…まぁ、出来ない事は無いですけど。先生、まさか…』

竜「ああなったリョーマはもう止められないからね。」

『確かに…全くしょうがない子ね…リョーマ、こっちおいで。』

リ「血、止めてくれすの??」

『しょうがないからね…リョーマは1度決めた事は変えない主義でしょ??』

リ「もち。」

『痛いから我慢してよ??』

そして美和は救急箱を取り出し、止血に取り掛かった。暫くして応急処置が終わり、傷口はすっかり止まっていた。

『…終わったよ。』

リ「あ、止まってる!!」

七「嘘!!あんなに止まらなかったのに!!」

『でも一時的なものだよ。持って15分程度って所かな。』

捺「美和、すご〜い。」

不「美和ちゃんパワーだね。」

『…不二君、それやめてくれる??』

そしてリョーマはラケットを取ろうとしたがその前に大石が立ち塞がった。しかし、手塚がラケットを持ってリョーマに言った。

手「１０分だ、１０分で決着がつかなければ棄権させるぞ。良いな。」

リ「十分。」

そうして試合が再開し、リョーマは本当に１０分以内に決着をつけ、青学は無事、地区予選を勝ち抜いた。

表彰式が終わった後、乾は美和にこんな事を聞いた。

乾「上川。」

『何??乾君。』

乾「お前、橘の妹と顔見知りだそうだな。」

『そうだけど??』

乾「橘って名前、聞いたことないか??」

『乾君も思った??私も橘さんと知り合ってから引っかかってたの。』

乾「…そうか、お前でも知らないか。俺の方でも少し調べてみる、上川も何か分かったら教えてくれ。」

『分かった。』

そう言って美和達は祝勝会があるタカさんの実家に行った。

覚悟

地区予選が終わって数日が過ぎ、リョーマの左目もすっかり完治し、都大会に向けて練習を重ねたある日の事、部活の終わりに巴は美和にある事を言っていた。

『え??今度の週末??』

巴「はい、先輩予定入ってますか??」

『いや、特に予定はないけど、どうして??』

巴「でしたら、私が行ってるテニススクールで練習を見て欲しいんですけど、ダメですか??」

『なんだ、それならそうと早く言えばいいのに。良いよ、付き合ってあげる。』

巴「ホントですか??有り難うございます!!」

それから数日が経ち、週末が来た。美和がテニススクールにつくとまだ巴は居なく、美和は入り口で巴を待った居た。暫くしてダッシュで走ってくる巴が来た。

巴「ごめんなさい!!遅れてしまって…」

『…今度からは気をつけてね。』

そして2人は中に入り、レギュラーウェアに着替えた後、それぞれアップをしていた。

『巴、準備はできた??』

巴「はい!!」

『それじゃあ、始めよう。』

巴「あの、先輩。先輩に折り入ってお願いがあるんですけど…」

『改まってどうしたの??』

巴「先輩!!私にツイストサーブを教えて下さい!!」

『…』

巴「前にリョーマ君にも頼んだんですけど、教えてくれなくて…」

『…だから私に??』

巴「はい、私も先輩やリョーマ君、レギュラーの皆のように決め技がほしいんです！！」

『成程ね…そのために今日私と練習しようって言ったわけか。』

巴「…はい。」

『でも、巴にツイストサーブを教える訳に行かないの。』

巴「でも！！」

『巴、どうしてリョーマがツイストサーブを教えなかった理由を考えた事ある？？』

巴「え？？」

『リョーマがツイストサーブを教えなかったのは、巴のプレイスタイルに合って無いから。』

巴「プレイスタイル？？」

『そう、私とリョーマのプレイスタイルが違うように巴自身のプレイスタイルがあるの。

皆それぞれ自分のプレイスタイルを理解して極限まで努力して初めて自分だけの技を身につけるの。

みんなそうやって技を編み出してるの。私みたいに、相手の技をコピーする能力があれば話は別だけどね。』

巴「自分のプレイスタイルを理解して努力し続ける…」

『そう、決め技って言うのは一発逆転のような奥義みたいなものだから生半可な覚悟じゃ身につけられないの。』

巴「…」

『…でも、巴自身の技を編み出す練習の手伝いならいくらでも付き合ってあげるよ。』

巴「（パァ！！）はい！！」

そして2人は巴自身の技を編み出す過酷な特訓を始めた。暫くして巴はばてたのか大分息が上がっていた。

巴「はぁ、はぁ、はぁ。」

『もうお終い？？』

巴「！？」

『巴はこの程度で音を上げるの??』

巴「先輩達はこれ以上に努力しているって事ですか??」

『言ったでしょ??簡単な事じゃないって。それに努力してないように見える??』

巴「…先輩、もう1度お願いします!!」

『…分かった。』

それから再び過酷な特訓が始まり、巴はもう限界寸前だった。

『…（やっぱり、巴にはまだ早かったか。）』

そして美和が止めようとしたその時…

巴「えぇぇぇい！！」

『！！』

強烈なバックスピンがかかったパッシングショットが美和のコートに入り、美和は驚きを隠せずにいた。

『…今のは。』

巴「あ…出来た…やった～！！」

巴は歓喜の声を上げると美和に抱きついた。

『巴、出来たじゃない。』

巴「はい！！先輩のおかげです。」

『でもこれで終わりじゃないよ、これからずっと技を磨き続ける事。出ないと折角の決め技が台無しになるから。良いね？？』

巴「はい！！あと先輩、この決め技の名前を付けて貰えませんか？？」

『名前？？そうだな…バックスピンがかかった高速のパッシングショットだから疾風刃って言うのは？？』

巴「疾風刃…いい名前ですね。」

『気に入って貰えたならよかった。』

すると拍手をしながら2人に近付く人が居た。それは…

？「疾風刃ですか、素晴らしいパッシングショットでしたよ。」

『…誰??』

巴「あ…観月さん。」

『巴、知ってるの??』

巴「はい、このスクールに通ってる聖ルドルフ学院の部員さんなんです。」

観「観月はじめです。初めまして上川美和さん。」

『よく知ってるのね。』

観「それは貴方は有名ですから。青学ミクスドエースでその実力は手塚君と保々変わらないとか。」

『それはどうも。』

するとルドルフのメンバーが続々とやって来た。

早「観月さん、練習メニューは全部終わりました…って赤月さんと、この人ってまさか??」

沢「青学の上川だ〜ね。」

観「上川さん、貴女さえよろしければうちのエースと試合してみませんか??」

『試合??』

観「えぇ、彼もいい勉強になると思いますし。裕太君、ちょっと来てもらえますか??」

裕「はい…」

巴「あ…不二さん。」

『（不二??不二ってまさか…）』

裕「観月さん、何か…ってなんだ赤月も来てたのか。」

巴「はい、今日は美和先輩に練習をつきあってもらいました。」

『巴、この人まさか…』

巴「やっぱり気付きました??そうです、不二さんは不二先輩の弟さんです。」

『やっぱりね…』

裕「…どうも。」

『でも、あの野蛮人の弟にしては全然似てないね。』

裕「や、野蛮人…」

巴「せ、先輩…野蛮人って…」

『ホントの事よ??巴達1年生は知らないかもしれないけど、不二

君は青学テニス部の影の支配者だから。』

巴「し、信じられない…」

『表向きは温厚で優しい先輩で通ってるけどね。』

観「さて、どうです??嫌なら別に断ってもいいですよ??」

『…別にかまわないよ、ただ…巴、レギュラーが勝手に他校の生徒と試合をしたらいけない事になってるの。だから皆に言うのは黙っててね。』

巴「はい。」

『そっちはどう??やりたい??』

裕「…お願いします。」

観「決まりですね。」

そして暫くして美和ＶＳ裕太の練習試合が始まった。しかしその差は歴然で美和は裕太を６－２で圧倒的差をつけて勝利した。

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ上川、６－２.」

全「…」

裕「はぁ、はぁ、はぁ。」

『…大丈夫??』

裕「あ…はい、すみません。」

『気にしなくていいよ。』

早「…強い。」

淳「あの裕太が手も足も出ないなんて…」

沢「女子テニス、全国？1って言うのは伊達じゃないだ～ね。」

観「んふ。」

『…（やっぱり兄弟ね、この子のテニスセンスは抜群ね。）不二君って強いね。思わず本気出しちゃった。』

裕「そんなことないです、実際上川さんには手も足も出ませんでしたから。」

『謙虚だね、でも素質は十分あるからもっと強くなると思うよ??』

裕「ありがとうございます。」

暫くして美和は巴の所に来た。

『巴、今日の練習はここまでにしようか??』

巴「え??でも…」

『気が張ってて分からないかもしてないけど、かなり疲れてるはずよ??ここで無理したら何にもならないし、下手したら怪我するよ??分かった??』

巴「…はい。」

『それじゃあ、気をつけ帰ってね。お疲れ様。』

巴「お疲れ様でした!!今日はありがとうございます!!」

そうして美和は帰り際に振り返らずに手を振った。暫くして帰る準備が出来た美和は偶然裕太の練習風景を見ていた。そして休憩中に美和は裕太に声をかけた。

『お疲れ様。』

裕「あ…上川さん。今、帰りですか??」

『うん、さっきあなたが練習してるとこを見たの。』

裕「そうなんですか…」

『…キミを見てるとね、昔の私を見てる気がするの。』

裕「昔の上川さんですか??」

『そう…私にもね１０歳離れた兄さんが居るの。私の兄さんも、不二君と同じように天才って呼ばれてたの。私はその天才の妹って呼ばれてたの。今の君と同じようにね。』

裕「…」

『私も認められたくて必死に練習してたけど、現実はそう簡単な事じゃなかったの。そのせいで兄さんに色々と八つ当たりもしてたわ。

でもね、どんなに憎んでも兄さんは兄さんでしかないから。それは決して変わる事は無い。それに兄さんは私の事認めてくれてるし。』

裕「上川さん…」

『だから、今自分にできる事を1つずつやってみようって思ってるの。後悔だけはしたくないから。貴方は不二君を倒すことが最終目的みたいだけど、これだけは覚えておいて。憎しみは憎しみしか生まないってこと。それだけは覚えといて。』

裕「…ご忠告どうも。」

すると美和の携帯に捺希からの連絡が入った。

『はい??』

捺＜＜あ、もしもし美和??私よ、捺希。＞＞

『捺希、どうしたの??』

裕「捺姉??」

『（コクリ）』

捺＜＜あのさ、これから七海と一緒に美和の家に行くんだけどいいかな??＞＞

『私の家に??それは良いけど、私今家にいないよ??』

捺＜＜じゃあ、学校の駅前で待ち合わせって言うのはどう??＞＞

『うん、良いよ。』

捺＜＜じゃあ、駅前で待ってるね。＞＞

『ＯＫ。』

そう言って2人は電話を切った。

『じゃあ、私帰るね。練習頑張って。』

裕「はい、あの…上川さん。」

『何??』

裕「捺姉にあったら伝えて貰えませんか??心配かけてゴメンって。」

『…分かった。それじゃあ、都大会で会いましょう…裕太君。』

裕「…・はい！！」

そう言って美和は去って行った。暫くして駅前につき、美和がつくと既に捺希と七海が来ていた。それから3人は美和の家に行き、2人は美和が出したアルバムに興味津々だった。それから各自好きなことしていたある時、美和は捺希に裕太に会った事を話した。

『捺希…』

捺「ん??何??」

『今日ね、不二君の弟に会ったの。』

捺「!?裕太に…」

『うん…なんていうのかな、彼…不二君にだけ異常なコンプレックスを抱いてるみたい。』

捺「…幼い頃からずっと天才の弟としてしか見られなかったせいなのかな??」

『分からないけど…でも、もう少ししたらきっと不二君や捺希の想いも伝わると思うわ。都大会でそのきっかけが出来ればいいんだけど…』

捺「…そうだね。」

『あとね、帰る時に彼が捺希に心配かけてゴメンって言ってたよ。』

捺「そっか…裕太、元気にやってるんだね。」

『この事を不二君にも言おうかなって思ったんだけど…』

捺「今はそっとしておいた方が良いだろうね。」

『…そうだね。』

そうって2人はこの時話した事に胸の奥に仕舞い込んだ。

手塚VSリョーマ

美和と裕太が知り合ってから数日が過ぎ、都大会が目前に迫ったある日の事美和生徒会の仕事でグランドを歩いていたその時、手塚とリョーマが深刻な顔をして話していた。

美和は2人に気付かれないように物陰に隠れて聞き耳を立てていた。

手「春野大のクレイコート、知っているか??」

リ「校下したの所っすよね??知ってますけど??」

すると手塚はポケットからテニスボールを出し、リョーマに渡した。

リ「何スか??」

手「3日後の午後3時に待っている。1人で来い。
ボールは俺が用意する。」

そう言って手塚は去って行った。暫くしてリョーマも去って行き、美和は手塚に向かってこう呟いた。

『…余計なこと言っちゃったかな。でも、今のリョーマには必要な事なのかもしれないね…』

それから暫くして美和は仕事を終え、帰って行った。そして3日後美和は母親の美奈子がドイツから帰国するため部活を休んでいた。

しかし、美和は空港に行く前に手塚とリョーマの試合が行われている春野大のテニスコートに来ていた。美和がコートにつくと試合は既に行われており、コートの側には大石も来ていた。

『なんだ、大石君も来てたの。』

大「美和…お前も知っていたのか…」

『まぁ、気になるからね。それに私が余計な事を言ったせいもあるから、せめて試合を見届けようと思って。』

大「…そうか。」

そして美和と大石の2人は2人の試合を黙って見ていた。暫くして試合は手塚の圧勝で終わり、手塚は帰り際に「青学の柱になれ」と言い、去って行った。

『じゃあ、私も行くね。今日、母さんが帰国してくるから。』

大「あぁ、また明日。」

『…今日の事はみんなには黙っていた方が良いと思う。国光やリョーマも、騒がれたくないと思うし。』

大「そうだな。分かった。」

『それじゃあ。』

そう言って美和は空港へと向かった。

次の日、レギュラーは美和達を不審に思いながらも練習をしていた。そして部活の帰り、美和はリョーマの様子を見るため、こっそり越前家を訪ねていた。

美和ががコートの様子を見るとリョーマは手塚や美和が伝えたいことを理解したのか、美和は安堵のため息をついて家に帰ったのだった。

都大会～迫りくる影～

そして数日が経ち、都大会が始まった。しかし、肝心のリョーマと巴が都大会の会場にまだ来てなかった。

美和達は仕方なく堀尾と桜乃で代役を立て、選手登録路済ませたのだった。暫くして2人は到着し、手塚や竜崎にこっ酷く怒られたのだった。

そんな中、美和は第1シード校の氷帝の試合を見ており、あまりにも派手な氷帝コールに溜息をついていた。

『う～～わ、相変わらず派手ね…』

すると、捺希が美和を呼びにやって来た。

捺「美和、ここに居たんだ。」

『捺希。』

捺「氷帝の試合を見てたの??」

『まぁね、にしても派手ね…』

捺「部長の跡部はとことん派手好きだからね。」

そう言って2人が話していると、裕太達聖ルドルフが来た。

裕「あ…上川さん。」

『??あぁ、裕太君じゃない。久しぶりね。』

捺「裕太…」

裕「…捺姉。」

捺「裕太…私…」

裕「…もういいよ。」

捺「え??」

裕「もういいから、俺の事はほっといてくれ。」

捺「…」

裕「上川さん、次勝ったら今度は青学と当たります。」

『そうだね。』

裕「今度はそう簡単に負けたりしませんから。」

そう言って裕太は去って行った。それから美和達青学も順当に勝ち進み、ベスト８まで上り詰めた。

そしていよいよ、青学ＶＳ聖ルドルフの試合が始まろうとしていた。

竜「よし、全員そろったね。いよいよ、ベスト８だこれに勝てば無条件で関東行きが決まる。くれぐれも用心するように。」

全「はい！！」

竜「ではオーダーを発表する。Ｓ１手塚、Ｓ２不二、ミクスドＳＳ美和、Ｓ３リョーマ、ミクスドＤ桃城・赤月、Ｄ１大石・菊丸、Ｄ２海堂・桃城。このオーダーに変更はない。良いね。」

桃海「「！！（此奴と？？）」」

そうして多少の不安があるものの試合は始まって行った。そして案の定２人は試合中にケンカを始め、審判にも注意される始末だった。

それからと言うもののちょっとしたことでもすぐケンカを始め、ルドルフにどんどん突き放されていった。

そしてルドルフのマッチゲームになると、海堂の火がついたのか海堂はまだ未完成のブーメランスネイクを出し、本来の力を取り戻し、ルドルフに追い上げて行った。

すると再び桃のチャンスボールが出たその時、桃のダンクスマッシュが柳沢の顔面に当たり、ルドルフは棄権負けとなった。

暫くしてＤ１の試合が始まり、部長の赤沢が出すブレ球に動体視力の良い英二やリョーマ、そして美和までも悪影響を与えていた。次第に英二の体力が落ち、試合はタイブレークまで持ち込まれた。

だが、英二の体力は限界だったのかタイブレークはルドルフが制し、

ゴールデンペアは惜しくも負けたのだった。

次のミクスドDもルドルフが制し、試合は1勝2敗と負け越したままS3へと移り、リョーマVS裕太の試合が始まろうとしていた。

『そっか…巴達もダメだったんだね。』

捺「次のS3が落とすことがあるならもう負けられないって事だよね…」

『大丈夫よ、リョーマなら。』

そんな時、裕太と不二が別の方向で美和達の所に来ていた。

捺「どうしてそんなに言い切れるの??」

『リョーマの実力はアメリカに居た時から知ってるからね。心配い

らないよ。』

捺「でも…」

『捺希、2人が心配な気持ちも分かるけどもう少し信じてあげたら??』

捺「…そうだね。美和、ありがとう。」

『どういたしまして、じゃあ行こっか。それに、私達が居ると2人も邪魔だろうしね。』

そう言って美和は不二と裕太に笑いかけた。

不「なんだ、気付いてたんだ。」

『そりゃそうよ、それじゃあ裕太君、試合頑張って。』

そして美和達が去ろうとしたその時、美和は裕太にこう言った。

『あ、そうそう。裕太君、言っておくけどリョーマは強いよ??君が思っている以上にね。』

美和はそう言うと去って行った。美和達が去った後、2人の間に長い沈黙が流れ、その沈黙を壊したのは不二だった。

不「元気そうだね、裕太。どう??寮生活にはもう慣れた??

てっきり裕太はS1か2って思って対戦を楽しみにしてたんだけど??」

裕「嘘ついてんじゃねぇよ!!そっちがその気ならいいぜ??」

不「…」

裕「あの乾さんを倒してレギュラーになった1年、全身全霊をかけてその1年を倒す！！」

不「…」

裕「上川さんは無理だが兄貴は観月さんにコテンパンにされるといいさ、それで聖ルドルフの勝ちだ。」

不「僕の事は別として、美和の言う通りそう簡単にいくルーキーじゃないよ。裕太。」

不裕「「…」」

裕「やってみないと、わかんねぇよ。」

そう言って裕太は去って行った。

暫くしてＳ３の試合が始まり、序盤から裕太は得意のライジングショットを打ち、リョーマ度どんどん突き放していった。

しかしリョーマも追い上げて行き、次第にリョーマが裕太を押していった。そして試合も中盤に入ったその時、裕太はツイストスピンショットを打ち、一気に流れを引き戻した。

ツイストスピンショットを見た美和、不二、手塚、竜崎、そしてリョーマはその技の危険性はすぐに察知した。

『…あの技、危険すぎる。』

捺「どういう意味??危険すぎるって…」

『…（まだ骨格も出来てないこの時期にあんなあんな態勢からショットを打つなんて…観月はじめ、選手をなんだと思ってるの??）』

その後も裕太はツイストスピンショットを打ち続けたがリョーマも

新技、ドライブBで突破口を見つけ、そのまま勢いに乗り、裕太に勝利した。

審「ゲームアンドマッチ、青学越前、６－４．」

ゲームセットと同時に喝采の声が上がり、美和は次の試合の準備の用意をした。

するとそこに不二がやって来た。

不「美和、ちょっと頼みたい事があるんだけどいいかい？．」

『…不二君が私に頼みごとなんて珍しいね。何？．？』

不「次のミクスドＳＳ、ラブゲームで行ける？．？」

『…お望みなら、１０分以内で終わらせようか？．？』

不「クス、そうしてくれると助かるよ。」

『ＯＫ。』

そして次のミクスドＳＳ、美和は１０分以内で終わらせるどころか、相手に１ポイントも与えずに勝利した。

全「…」

審「ゲ、ゲームアンドマッチ、青学上川、６－０.」

沢「すごいだ～ね、強すぎるだ～ね。」

那「早～い。」

「はぁ、はぁ、はぁ。」

『…残念だけど相手が悪かったね。』

そしてコートに出る際、美和は観月の所に行き、こう言った。

『私や不二君を怒らせたこと、後悔する事ね。それに、データだけじゃない事を学習する事ね。』

そう言って美和はコートを出て行った。

『ただいま、不二君タイムどうだった??』

不「8分弱だったかな、美和は本当に強いね。」

『まぁ、スッキリしたけどね。』

不「クス…手塚、そろそろ試合したい？？」

手「む…」

不「悪いけど、今回は君まで周りそうにないよ。（開眼）」

そう言って不二はコートに入って行った。それを見ていた捺希と美和は…

捺「周助、かなり怒ってるね…」

『うん…まぁ、不二君が怒るのも無理ないかな。』

暫くしてS2の試合が始まり、不二はワザとゲームを落としていった。そして観月のマッチゲームになり、コートチェンジの移動中に不二は観月に言った。

不「観月、念のため聞いておくけど、体に負担がかかると知ってて裕太にツイストスピンショットを教えたのか??」

裕「!!」

観「大事なのは勝つことだから。僕に言わせれば勝利に犠牲がつきものですよ。」

裕「…」

『…クス、勝負あったね。』

そして不二に火がついたのか、不二は観月に1ポイントも取らせずに勝利した。

ゲームセットと同時に氷帝も来て結果を見届けていた。

跡「流石不二周助、相変わらず隙がねぇ。覚えておけ、樺地。」

樺「ウス。」

宍「無様だねぇ、アイツ。」

観「うわ～～～！！」

そう言って観月が嘆いていると不二がやって来た。

観「貴様ぁ！！０－５はワザとだな！！ふざけやがって！！」

不「…弟が…世話になったね。」

観「…」

裕「兄貴…」

リ「いい試合、だったんじゃないの??これはこれで。」

裕「…ああ。」

そうして青学は４勝２敗でベスト４進出を決めた。その後美和は捺希は氷帝ＶＳ不動峰戦を見る前に裕太の所に行った。

捺「裕太。」

『こんにちは。』

裕「あ…捺姉に、上川さん。何か??」

『腕は大丈夫??』

裕「あ、はい。何ともないです。」

『そう、ならよかった。』

裕「あ、あの…」

『テニスを続けたいなら、あのツイストスピンショットは極力打たない方が良いよ。』

裕「…」

『…関東に上がってきなよ??私や捺希、そして不二君、皆楽しみに待ってるからさ。』

裕「あ…はい！！」

捺「なら美和、行こっか。」

『うん。』

捺「じゃあね、裕太。」

そう言って美和と捺希は氷帝戦の試合を見に行った。しかしその結果は余りにも悲惨だった。Ｄ２は４－６、Ｄ１は１－６、ミクスドは３－６、そしてＳ３の宍戸ＶＳ橘は０－６とストレート負けをした。

その時、美和はようやく橘の正体を突き止めた。

『思い出した！！』

捺「美和、思い出したって何を？？」

「国光から去年の全国大会のビデオで見た事があるの。彼を。」

跡「アイツは元九州2強の1人、獅子学中のエース、橘じゃねぇか。」

乾「なるほどな、そう言う事だったのか。」

『成程ね。』

捺「つまり、橘は全国区って事？？」

『そう、無名校であることを利用してはなっから最初の４試合でかたをつけるつもりだったのね。』

跡「フン、やられたぜ。」

審「ゲームアンドマッチ、不動峰橘、６－０．」

『勝負あったね、帰ろっか。』

捺「うん。」

そして美和と捺希、乾の３人は集合場所へと向かった。そんな後姿を跡部は黙って見ていた。

審「大会１日目はこれで終了です。ベスト４に進出たのは不動峰、山吹、銀華、青学。以上４校は関東大会の出場権を得ました。」

朋「やった～！！」

堀「関東大会出場！！」

審「1週間後に、準決勝、決勝、コンストレーションを行います。
それでは解散してください。」

全「ありがとうございました。」

各自解散していく中、裕太は観月にある事を告げていた。それは…

裕「観月さん…今まで、ありがとうございました。」

赤「裕太、お前まさか、うちを出て行くんじゃないだろうな？？」

裕「いいえ、ここまで来れたのは観月さんのおかげです。感謝してます。それに勝ちに拘るのは、俺悪いとは思いません。」

赤観「「…」」

裕「ただこれからは…もう少し、自分の力でやってみたいです。観月さん、良いですか??」

赤「…」

観「そうか…分かった。」

裕「ありがとうございます。コンストレーション、必ず勝ちます！！」

それを聞くと観月と赤澤は帰って行った。2人が帰った後、裕太の

後ろには不二と捺希が居た。

不捺「「裕太。」」

裕「…」

不「コンストレーション頑張って。」

捺「待ってるからさ。」

裕「う、うるせぇ。」

不「聖ルドルフが関東に進んだら今度こそ試合やりたいね。」

裕「フン、俺はやだね。どうせなら手塚さんに挑みたいよ。」

捺「ミクスドだったら私とも試合してよね。、裕太。」

裕「わかんねぇよ!!」

不「ところで裕太、今日家によって帰らない??」

裕「断る!!」

不「母さんが好物のかぼちゃ入りカレー作って待ってるよ??」

裕「え??」

不「姉さんだってラズベリーパイ焼いてたなぁ。」

裕「う…」

捺「じゃあ、私食べに行こうっと！！」

そんなこと言いながら3人は帰って行った。美和はそれを笑顔の眼差して見ていた。

『もう…大丈夫みたいだね。』

手「そのようだな。」

『じゃあ、私達も帰ろう??』

手「あぁ。」

そう言って美和達も帰って行った。

負傷

次の日、部活がオフになった美和は久々にストリートテニスに来ていた。だが、コートにつくと2人組の男がテニスコートを荒らしていた。

それを見た美和は激怒し、2人組にくってかかって行った。

『貴方達!!そこで何やっているの!!』

「何だぁ??」

「女はすっこんでろ!!」

『貴方達にはちゃんとしたコートがあるでしょ??それとも何??実力が無いから八つ当たり??』

「何だと??なめてんじゃねぇぞ!!」

「やっちまえ!!」

すると2人組はラケットを四方八方振り回して美和に襲い掛かった。
美和は紙一重でかわしていたが、足を踏み外し、美和の気がそれた
その時、男のラケットが美和の左肘に当たり、美和は左腕を抑えな
がら激痛に耐えていた。

『っ痛…』

「フン、よぉどうした??さっきの威勢はよぉ。」

「俺たちを怒らせたのが運のつきだ。」

すると、橘と杏が来てすぐさま美和に駆け寄った。

杏「上川さん!!」

『!!橘・・・さん。』

橘「おい、彼女を気付つけたんだ。それ相応の覚悟はできてんだろうな??」

「覚悟??何の覚悟だよ??」

「その女が最初にケンカ売って来たんだぜ??」

だが橘の表情はいつにもまして凄みを帯びていた。2人組はだんだん怖くなり早々に逃げ去って行った。

2人組を追い払った後も美和は冷や汗をかきながら激痛に耐えていた。

杏「上川さん、大丈夫ですか？？」

『…痛。』

橘「かなり腫れてるな、１度病院に行った方が良い。」

『…そうだね。』

杏「そんな…1週間後は決勝戦があるのに…」

『…大丈夫だよ、橘さん。大した事無いと思うから。それじゃあ2人とも、助けてくれてありがとう。

それと、この事はみんなには言わないで。心配すると思うから…』

橘「…分かった。約束しよう。」

『…ありがとう。』

そう言って美和は帰って行った。去って行く美和を見ながら杏はこう言った。

杏「あれ、相当酷いよね??」

橘「ああ、恐らく青学は決勝戦上川抜きで戦うことになるだろうな。」

杏「上川さん…」

暫くして美和は家に帰り、応急処置をして痛みを和らげていた。そして夜になり晩御飯が終わった後美和の母、美奈子は片づけを終えた後美和を呼び出した。

『母さん、何??話って??』

美「…美和、腕を見せなさい。」

『!!』

美「私が気付かないとでも思った??左肘怪我してるんでしょ??」

『…うん。』

美「全く、どうして黙ってたの??」

『心配かけたくなくて…』

美「…バカね、美和はそんなこと気にしなくてもいいの。」

『…ごめん。』

美「心配をかけない事が親孝行じゃないのよ??こんな時だからこそ、頼られたいって思うのが親なの。」

そう言いながら美奈子は腕の手当てをしていた。

美「よし、とりあえずはこれで良いわ。でも結構酷いから当分の間公式戦には出ない方が良いんだけど…」

『そんなことできない!!もし出なかったら…』

美「分かってる。でもシングルスはダメよ??肘にかかる負担がダブルスよりも酷いから。」

『…分かった。』

そうして美和は納得がいかないまま部屋に戻った。

ペナル茶（ティ）

次の日の放課後美和達は部室につくと傷だらけのリョーマが居た。荒井とカチローの話によると準備の最中に山吹中の阿久津と言う男が現れ、リョーマを八つ裂きにしては去って行ったというものだった。

大石は中体連に訴えようと言うがリョーマは自分でかたつけるような表情をして部室を出て行った。

暫くして練習が始まり、テニス部の部員全員ランニングだった。しかしそれは只のランニングでは無かった。

乾「それではここで給水ターイム。」

大「助かるよ、乾。」

英「充電完了、にゃ～んちゃって。」

そうして美和達が再びランニングを始めようとしたその時、1部の部員が嘆き声をあげて倒れて行った。

英「??何なの??」

美和達は不思議に思い振り返った。

大「何だ??どうしたんだ??」

乾「これから1周1分以上の人にはこれを飲んでもらうよ。」

英「何??それ…」

すると乾の持つ紙コップから赤いドロドロの液体が出て来た。

乾「名付けて、ペナル茶（ティ）。」

大英タ捺「「「「え！？」」」」

リ桃海巴「「「「い！？」」」」

乾「このペナル茶（ティ）は体に良いもんなんだぞ？？」

英「そう言う問題じゃにゃ～い！！」

その言葉と同時に美和は全速力で走って行った。

桃「なんスか？？あのドロドロは？？」

タ「飲みたくな～い！！」

英「加速～！！あんなの絶対飲まないもんね～。」

捺「あ！！英二！！」

そう言って美和達も英二の後を追いかけたのだった。

竜「ハハハ！！効果ばっちりだね。」

乾「周を重ねるごとに犠牲者は増えますよ。どうです？？先生と東雲も一杯。」

竜「遠慮しとくよ。」

七「私もいらない。」

乾「美味しいんですけどねぇ。」

七「乾君、そうは見えないよ??」

そうして犠牲者は次々と増え、残るはレギュラーのみとなった。

カ「もう30周目だよ??」

堀「残ってるのは結局レギュラーだけか。」

水「やっぱりすごい人たちだね。」

カ「うん。」

竜「皆よっぽど飲みたくないんだねぇ。」

七「そりゃそうですよね。」

乾「さぁ、ラスト1周だとっておきのを出すか。」

七「!?い、乾君それは…」

すると乾はジョッキに入ったペナル茶(ティ)を出した。

乾「それじゃあ、ビリの人はこれね。」

リ大英タ桃海捺那巴「「「「「「「「「「ゲ!?ジョッキ!?」」」」」」」」」」

桃「よっしゃ、負けらんねぇ。」

すると桃はスピードを上げ、前方にいる海堂と場所の奪い合いをしていた。

桃「何しやがるんだ!!」

海「俺の前を走るんじゃねぇ!!」

桃「何!!」

不「体格的に割って入るのは不利だね。」

捺「そうね。」

リ「…フ。」

するとリョーマは近くにあったラケットを持ち、タカさんに渡した。
ラケットを持ったタカさんは当然バーニング状態になる訳で…

タ「よっしゃ!!グレイトー!!邪魔だ!!バーニング!!」

桃「行かせね～!!」

タ「ドリヤァ～～～!!」

英「ホイホ～イ!!イエ～イ!!絶対飲まないもんね～!!」

タ「ＥＩＪＩ!!ｙｏｕ!!ｄｒｉｎｋ!!」

桃「タカさ～ん!!」

海「フシュ～！！」

大「第３コーナーまではタカさんの後ろで風の抵抗を減らして…」

巴「那美ちゃん！！私達も遅れないようにしないと！！」

那「うん！！あんなジョッキ飲むの嫌だもんね。」

不「クス、皆張り切ってるなぁ。あれ、美味しいのに。どう？？手塚、美和、是非。」

手「『結構！！」』

すると中央部に通路ができ、リョーマはそこを通って先頭に立った。

リ「まだまだだね。」

全「越前～！！」

そして恐怖のランニングは全員同着で終わった。

乾「全員、同着。」

英「はぁ、はぁ、危なかったもうバテバテ…」

大「乾、もうドリンク攻撃は止めてくれ。頼むから。」

乾「勝者もいなければ、敗者もいない。余るのは勿体無いので皆で分けるっていうのはどう??」

リ大英タ桃海捺那巴「「「「「「「「「自分で飲め！！」」」」」」」」」

暫くして練習も終わり、タカさんはリョーマの怪我を心配していた。

英「あ～、疲れたにゃ～。」

巴「はい。」

タ「越前、怪我どうだ??」

リ「ん??」

タ「大した事無くて、よかったな。」

リ「はぁ。」

桃「なぁ、腹減らねぇ??皆でハンバーガー食いに行かね??」

英「おぅ!!行こ行こ!!」

捺「じゃあ、私も行く!!巴も行くでしょ??」

巴「はい!!」

捺「美和もいかない??」

『え??あぁ…私はパス。行くとこあるから…それじゃあ。」

タ「俺も、ちょっと野暮用があるから、じゃあ。」

そう言って美和とタカさんは帰って行った。

捺「なんか今日の2人変だったよね??」

英「言われてみればそうだにゃ～。」

そして数日が過ぎ、都大会決勝戦が前日になったある日、地獄のランニングは今日も続いていた。

「ヒェ～～～!!」

全「??」

乾「今日のペナル茶(ティ)はバージョンアップした。」

英「バージョンアップ？？」

不「それは是非飲んでみたいね。」

英「マジ？？」

大「俺は絶対嫌だ！！」

捺「私だって嫌よ！！」

桃「なんか乾先輩、最近あれ飲ませるの楽しんでないスか？？」

海「フシュ～～～。」

桃「あ、マムシ！！させるか～！！」

英「あんなの飲んでらんないよ～！！」

そして犠牲者はドンドン増えて行き、カツオや荒井もその犠牲者の1人となった。

乾「今日は1周55秒だ。それを超えた者にペナル茶（ティ）が待っている。」

英「マジかよ！？」

不「面白いねぇ。」

英「えぇ？？」

捺「呑気に笑ってる場味じゃないわよ！！」

大「ペースを上げなくては…」

桃海「「あんなもん、死んでも飲むか～！！」」

手「あまりペースを上げると後が持たんぞ。」

タ「確かに。」

リ「でも絶対飲まない！！」

そして美和達が必死に走っている中タカさんだけ浮かない顔をしていた。

桃「タカさん、何浮かない顔してるんスか？？」

英「余裕だね、余裕と言うより、色ボケじゃないの??」

大「色ボケ??」

タ「何の事だい??」

英「ふ～ん、フフフフ。」

そして英二は昨日の帰りの事を皆に話し出した。

大「阿久津仁…か。」

タ「あ…うん。阿久津仁、中学に入ってから道場に来なくなって悪い噂ばかり耳にしてたけど、まさか、またテニスを始めてたなんて…」

不「また??またって??」

タ「小学校の頃は名のあるコーチがついてたみたいだから、物凄くうまいよ。」

不「ふ～ん、で、その一緒にいた人がタカさんの彼女って事??」

タ「え??か、彼女??」

英「やっぱそう言う事だよね??」

タ「ち、違うよ!!」

桃「しかし、タカさんも隅に置けないっスよね。」

タ「誤解だ！！あれは…」

英「いいの、いいの。誰でもそういう時期があるんだから。」

海「そういう時期？？」

英「年上に憧れる時期だよ。」

海「年上か…」

タ「違～う！！」

捺「って事は英二や皆は私や美和よりももっと年上の人が好みって事なんだね。」

英「なんでそうなるんだよ～！！」

捺「だってそうなるじゃん、年上に憧れるって事は私や美和は眼中にないって事でしょ？？」

巴「そうなんですか？？」

那「海堂先輩もそうなんですか？？」

海「…」

英「美和！！オレ、美和が嫌いだなんて言ってないからな！！」

そう言って英二は美和の左腕を掴んだ。

『!?…う、うん、分かったから。』

手「…」

英「イエ～イ!!やっぱり美和は優しいにゃ～。」

捺「美和、どうかした??」

『え??ううん、何でもないよ。』

手「いい加減にしろ!!ペースが落ちてるぞ!!ラスト1周。」

乾「結局残ったのはレギュラーだけか。今日もビリの人にはこのジョッキが待っている。

超特性改良型デラックスペナル茶(ティ)。」

大「あぁ、そうだった。」

そう言いながら大石が前を見ると美和達はもうすでに大石の遥か先に居た。

大「ああ!!待ってくれ〜!!」

そして必死に走っている中桃は不二にある事を聞いた。

桃「??不二先輩。」

不「ん??何??」

桃「不二先輩ってあれ好きなんじゃ??」

不「乾の特製ドリンク??うん、好きだよ。美味しいよね。」

桃「じゃあなんで真剣に走ってるんスか??」

不「人の苦しむ所はもっと好きなんだよ。クス。」

桃「…（この人だけは絶対敵に回すまい）」

捺「周助!!さらっと黒いこと言わないでよ!!」

巴「美和先輩、あれが前に先輩が言ってたことなんですか??」

『そうよ、不二君だけは絶対に敵にまわしちゃいけないの。よく覚えていてね。』

巴「はい。」

不「美和、今誰を敵に回したらダメって言ったの？？（黒）」

『…さぁね。』

そう言いながらもレギュラーは必死に走り、またしても同着でゴールした。

そしてランニングが終わった後すぐに練習試合が行われようとしていた。

手「不二。」

不「…」

手「越前。」

リ「ん??」

手「お前達からコートに入れ。」

そうして不二ｖｓリョーマの試合が行われ、その練習試合で不二は２つのトリプルカウンターの１つ、「罷落とし」をだしリョーマはスマッシュをあえてコードボールにして罷落としを見事に攻略したのだった。

暫くして小鷹ｖｓ巴、手塚ｖｓ桃、美和ｖｓ捺希、海堂ｖｓタカさん、大石ｖｓ英二の試合が時間ごとに分かれて始まった。

しかし、突然雨が降り出し、試合は中断となった。そして部室では手塚と不二がこんな事を話していた。

不「ねぇ手塚、越前と試合した時、君もこうだった??」

手「…知っていたのか。」

不「うん、なんとなく。」

手「今の越前との試合、なぜ本気で勝ちに行かなかった??」

不「!?」

手「乾が言っていた、お前のデータは取らせてもらえないと。本当のお前はどこにいる??」

不「…手塚、どうやら僕は勝負に執着できないみたいなんだ。」

手「不二。」

不「相手の力を限界まで引き出してスリルを楽しむ…だけなのかな??君こそどうなんだい??」

すると部室の外側で美和は雨に濡れながら2人の話を聞いていた。

手「どういう意味だ??何としても勝つ。今は全国制覇しか頭にないからな。」

不「…支障が出るなら僕をレギュラーから外してくれ。」

『!!（不二君…）』

そして美和は2人に気付かれないようにこの場を去ったのだった。
暫くして美和は着替えた後美和は職員室に来ていた。

『（コンコン）』

竜「入れ。」

『失礼します。竜崎先生、何か用ですか??』

竜「単刀直入に言う。腕怪我してるだろ??」

手「…」

『…何のことですか??』

竜「…お前さんも意地っ張りだな。」

手「隠しても無駄だ、今日の練習試合は右でしたそうだな。」

『だから??』

竜「怪我をしているなら、明日の決勝戦にお前を入れる訳にはいかない。」

『!!そんな事したら…』

竜「そうだろうね、間違いなくミクスドSSに他校はエースプレイヤーを入れてくる。」

『…確かに今私は腕を故障してます。でもここで負ける訳にはいかないんです。』

竜「そりゃそうだが…」

『お願いします、先生。ダブルスだけでも試合に出させてください。』

そう言って美和は頭を下げた。それを見た手塚は…

手「先生、俺からもお願いします。」

『国光…』

手「何かあれば俺がフォローします。美和を試合に出させてください。」

竜「…しょうがないね。次は無いよ。」

『ありがとうございます。』

そう言って美和と手塚は帰って行った。

それぞれの想い

次の日、いよいよ都大会の決勝戦が始まり、青学の対戦相手の銀華中は全員棄権をして青学は不戦勝で決勝行きを決めた。

そんな中神尾達が都大会の会場に行く中交通事故に遭い、怪我をしたまま試合に出たことが分かり、不動峰もまた棄権負けをした。

そして美和が他校の試合を見ていたその時、山吹の千石が美和に声をかけた。

千「美～和ちゃん！！」

『？？誰？？見たところ、山吹中の選手みたいだけど？？』

千「俺は千石清純、君でしょ？？青学ミクスドエースの上川美和ちゃんって。」

『そうだけど…今の千石君の態度って只のナンパよ??』

千「…それを言わないで欲しかった。」

『クス、千石君って面白いね。見てて飽きないよ。』

千「でも決勝戦では手を抜くつもりはないよ。」

『勿論、いい試合にしようね。』

するとリョーマ位の男の子がやって来た。

?「千石先輩!!」

千「おや、檀君。どうしたんだい??」

壇「先輩もう集合時間すぎてますよ!!急いでください!!」

千「おや、もうそんな時間なの??な~んだつまんない。」

『…クス。』

壇「あ!!失礼しました、僕は壇太一って言います!!山吹中の1年です!!よろしくです!!」

『こちらこそ、よろしくね。私は上川美和、青学の3年だよ。』

壇「あ…あなたが上川さんだったんですね。千石先輩が言ってました、青学に美人でテニスが凄く強い女子が居るって。」

『そんなこと言ってたの…』

千「でも実際美和ちゃんって強いでしょ??俺以上に。」

『そんなこと…ないと思うよ??』

壇「それは無いです!!阿久津先輩も女子にしてはやるって言ってましたから。」

『…阿久津も??』

壇「はいです!!」

『…そう。』

千「そろそろ行かないと伴爺に怒られそうだ!!檀君、行こう。」

壇「はいです！！」

千「じゃあね、美和ちゃん、今度会ったらデートしてね～。」

そう言って2人は去って行った。千石たちと入れ替わりに不二と捺希が来た。

捺「美和、ここに居たんだ。」

『捺希に不二君、もう時間？？』

捺「まだ大丈夫だけど、そろそろ行った方が良いかもね。」

不「ところで美和、今の千石だったみたいだけど知り合い？？」

『ううん、１人でいる所をナンパされた。』

捺「ナンパ！？大丈夫だったの？？」

『うん、軽そうだったけど、悪い人じゃないみたいだし。』

不「でも気をつけた方が良いよ？？」

『…そうね。』

それから暫くして青学ＶＳ山吹の試合が始まった。山吹はダブルスの名門校なだけあり、Ｄ２は３－６で惨敗、しかしＤ１は英二と大石の息の合ったコンビプレーで７－５で勝利した。

そして次のミクスドＤの試合では美和と手塚が出たため、６－４と勝利した。そんな中美和がダブルスに出た事に不審に思った人は少なくなかった。それは捺希も同じだった。

捺「な～んか変じゃない？？」

七「変って何が？？」

捺「美和だよ、最近美和私達に何か隠してるんだよね…」

不「うん…確かに様子がおかしいよね…手塚と先生は何か知ってるみたいだけど…」

捺「そうだよね！！昨日の練習試合も右でやってたんだもん。」

七「え？？右で？？」

捺「そう、右での試合と言い、今日のダブルスと言い…絶対に怪しい！！」

そんなことを言ってると美和と手塚が戻ってきた。

七「美和ちゃん、手塚君、お疲れ様。」

手「ありがとう。」

『ありがとう七海。』

捺「ねぇ、美和。私達に何か隠してない??」

『…何のこと??』

不「本当に何もない??」

『不二君も何??別に何もないけど??』

捺「…そう、ならいいけど。」

不「何か心配事があるなら遠慮しなくていいからね。」

『うん、ありがとう。』

それからのシングルス戦はミクスドは落としたもののＳ３の桃ＶＳ千石の試合は桃が痙攣を起こしながらもジャックナイフを出し、見事ジュニア選抜経験者の千石を下し、勝利を収めた。

続くＳ２は阿久津の圧倒的な大差で差をつけながらもリョーマは潜在能力を開花し、青学は見事都大会優勝を決めた。

美和はその後コンストレーションの試合を見に行ったが、氷帝は聖ルドルフに大差をつけて勝利していた。

『…まさかここまで差が開いてるなんて…』

跡「フン、青学はこんな奴らに手こずっていたのか。なぁ樺地。」

樺「ウス。」

『…（流石、跡部って所ね…全国区って言うのは伊達じゃないって事か。）』

跡「??あれは…（青学の上川…アイツ、帰国してたんだな。）」

そう考えながら跡部は美和を見つめていた。

『…（こっちを見てる）』

美和はそんな跡部を神妙な眼差して見ていた。そこに手塚が来たため美和は見切りをつけて去って行った。

偵察

都大会が終わって数日が過ぎ、６月に入り関東大会に向けて過酷な練習が続いていたある日の事、ある人が青学に来ていた。それは…

大「君、青学の生徒じゃないみたいだけど、うちに何か用かい??」

？「うお!!もう見つかった。」

全「…」

？「…バレちゃしょうがねぇ、立海大付属中2年生エース。噂の切原赤也って言うのは俺の事っス。」

乾「立海大付属中…神奈川県地区予選を合計1時間で終わらせたという…関東の?1チーム。」

大「真田の所か。で、その神奈川県代表がうちに何の用だい??」

切「ウィッス、ちょっとばかしスパイと、ある人を見て見たくて。」

桃タ「「スパイ??」」

不「ある人って…」

すると美和がやって来た。

『ゴメン遅くなって…』

捺「美和…」

『どうかしたの？？』

七「それが…」

切「あ～！！見～つけた！！」

そう言って切原は美和の所に行った。

切「アンタ、上川さんだろ？？幸村部長の元カノの！！」

『！！』

捺「え？？」

英「美和、知り合い？？」

『知らないよ。』

捺「じゃあ、なんで切原は知ってるの??」

『大方、時音に聞いたんじゃないの??』

切「うわ〜、間近で見ると一段と美人っすね。でも部長を振るなんて意外と男を見る目無いんすね。」

『そう言うプライヴェートなことは言わない方が良いよ??後で酷い目に合うよ??例えば…弦一郎とかにね。』

切「い…!?」

そして今度は手塚もやって来た。

手「そこで何をやっている。」

切「あ!!いたいた!!アンタ、手塚さんだろ??うちの先輩達も一目置いてる。

去年の関東大会でうちの先輩倒したのアンタだけだし。」

大「お、おい!!」

切「いや〜!!ちょっとお手合わせしたいなって…いいでしょ??」

手「部外者は出て行ってもらおうか。」

切「そんな〜、手塚さん1セットでいいですよ、硬い人だなぁ。

こんな顔ばっかしてると疲れてしまいますよ??」

捺「っな!?」

切「顔の力抜いて、ね??」

手「…」

だが荒井は我慢の限界だったのか切原に向けてボールを打った。しかし切原はその一瞬でラケットを取り出し、新井が打ったボールをいなした。

『!!』

切「手塚さんさぁ、何も別に深い意味じゃなくて、1球2球交えようって言ってるだけじゃん??

そんなシカト気分悪いなぁ。アンタ、潰すよ??」

手「『…』」

切「な～んて、まぁ、嫌なもんは仕方ないか。」

そう言って切原は荒井に向かってボールを打ったが、周りの人の巻き添えを食い、遂には海堂がキレ、コートは一瞬にして大騒ぎとなった。

切原は切原でさっさと帰って行き、手塚は部員全員にグランド３０周を言い渡した。

暫くして騒動も収まり、手塚と竜崎が切原の話をしていた。

竜「立海大の切原がうちに来たのか？？」

手「はい。」

竜「全国レベルの強豪校だ、関東を勝ち進めば間違いなく当たるだろう。部員の強化が必要だな。」

手「明日から関東大会のレギュラーを決めるランキング戦を始めます。」

竜「そうかい、その他のスケジュールも考えないとね。」

手「はい。」

竜「だが美和は大丈夫だったのかい??動揺しないといいんだが…」

すると美和がやって来た。

『大丈夫ですよ、竜崎先生。』

竜「聞いてたのかい??」

『少しだけ…彼が心配じゃないって言ったら嘘になるけど、だけどけれは誰の力も借りずに戦っている。私が今できる事は彼を信じて見守る事だと思うんです。』

手「…」

『大切なものが出来た時…人は本当に強くなれるから…』

手「…そうだな。」

そう言うと美和は再びコートに戻って行った。

次の日から関東大会のレギュラーを決めるランキング戦が行われ、美和はもちろん、リョーマや捺希、巴に小鷹も順当にレギュラーを勝ち取った。

しかし、乾がレギュラー入りを果たしたと同時に千石を破った桃がレギュラー落ちをした。そしてランキング戦の最終日に手塚ＶＳ乾の試合が行われ、手塚は乾のデータテニスに押されながらも実力を見せつけ、手塚は手塚ゾーンという相手の打球をコントロールする高度な技を出し、手塚は乾を圧倒していった。

そうして最終的には零式ドロップショットで勝利し、美和達は呆然としていた。

そして桃はその日、レギュラージャージをたたんで部室を出て行き、次の日から部活を休んでいた。

桃が部活に来なくなってから3日が過ぎ、美和は病院から帰る途中ストリートテニス場に来ていた。

するとコートには桃と杏が居て、それは楽しそうにしていた。

美和は安心して帰ろうとしたその時、氷帝の正レギュラー全員が桃達を見ていた。

跡「随分と楽しそうだな、桃城。お前らできてんのか??」

桃「…（氷帝の跡部さんか…）どうも。」

跡「フン、都大会では兄貴にマンマとやられたぜ杏ちゃんよ。」

杏「気安く呼ばないでよ!!」

跡「関東大会では全員正レギュラーで臨ませてもらう。2度とあんな間違いはない。」

杏「…ムカつく。」

忍「おい、跡部。此奴、ホンマに青学のレギュラーなん??大した事あらへんなぁ。」

滝「大した事無いに決まってるって。こんな所で遊んでるんだからよ。」

桃「あぁ??上等じゃねぇか、コートに入れよ。」

向「悪いけど、俺たちダブルス専門だから。」

忍「お前、その子と組んでやる??」

『…』

美和は呆れて帰ろうとするが、その前に美和の前にボールが来て立ち止まった。

跡「何とんずらしてるんだよ??居るのは分かってるんだぜ??出てこいよ。」

すると美和は飛んできたボールで跡部に向かってツイストをかました。

しかし跡部に当たるはずもなく…

跡「随分と手荒な挨拶だな…上川。」

杏「上川さん!!」

桃「先輩!!」

『それはお互い様でしょ??景吾。』

若「…上川さん。」

『…樺地君に会うのも久しぶりね。』

樺「…ウス、お久しぶりです。」

跡「久しぶりだな、お前はてっきり氷帝に来ると思っていたが??」

『青学で悪かったわね、私は氷帝のような金持ちで、自己中な人間が多い所は1番嫌いなのよ。』

忍「若菜、アイツか??お前がライバル視してるっちゅう女子は。」

若「そうよ。」

『天条院さんに会うのも久しぶりね…まさか、氷帝にいたとは知らなかったけど。』

若「上川さん、今までの私だと思ってたら大間違いよ??」

『それを言うのは私に勝ってからにしてよね。』

跡「フン、上川も相変わらずだな、だがなそんな腕で勝てるほど氷帝レギュラーは甘くないぜ??」

『やってみなくちゃ分からないでしょ??』

杏「上川さん…（やっぱりまだ…）」

桃「先輩!!どういう事っすか??まさか、決勝戦でダブルスに出た本当の理由は…」

『それ以上言わないで。』

桃「でも!!」

『良いから。』

跡「フン、やはりな。お前、俺様の女になれよ。」

『却下。』

向「うわ、即答かよ??」

跡「フン、言うと思ったぜ。」

『なら最初から言わないでよね。』

すると跡部がこんな事を言った。

跡「なら賭けでもするか??」

『賭け??』

跡「あぁ、関東大会で氷帝と青学が当たったら勝った方の言い分を呑む。」

『もし氷帝が勝ったら…』

跡「お前は氷帝に来てもらう、そして俺様の女になるんだ。」

『青学が勝てばすべて帳消しって事ね。』

跡「良いだろう。」

桃「先輩！！そんな賭け…」

『桃は勝つ自信が無いの？？』

桃「それは…」

『ようは勝てばいいてことよ、今年はするんでしょ？？全国制覇。』

桃「…はい！！」

すると今度はリョーマがやって来た。

リ「ねぇ、今日もサボりっすか??桃先輩。」

杏「あ…」

『…（リョーマ）』

リ「ウィーッス。美和先輩、今日は寄る所があるって聞きましたけど??」

『その用が終わって此処に居るのよ。』

リ「ふ～ん、まぁ、俺には関係ないっすけどね。それよりこんな所で何油売ってるんすか??」

杏「越前君、ちょうど良い所に…実はね…」

跡「お前が例の1年レギュラーか。」

リ「…」

跡「あの山吹中の怪物、阿久津を倒したらしいな。」

鳳「え??このチビが??あの長身の阿久津をねぇ…」

滝「やるねぇ。」

忍「怪物と言われた阿久津も大した事あらへんなぁ。」

向「いえてるぜ、侑士。あの不良遊んでばっかでまともな練習してねぇから、体力持たなかったんじゃねぇの??

ハハハハ、ハハハハ!!」

桃「おい、それは言い過ぎだぜ??」

すると向日は持ち前の身体能力で桃を飛び越え、後ろについた。

桃「…随分と身軽だな。」

向「やるなら来いよ俺が2人まとめて相手してやる。」

リ桃「「ヤダ。」」

向「??」

桃「やりたいのは山々だがこの越前って言うのがまた下手なんだよ。
ダブルスのセンスまるでなし。」

リ「よく言うよ、桃先輩だってイノシシみたいに突っ込んで行くだけじゃないスか。」

桃「なっ！！お前、先輩に向かってイノシシって言うのは何だ！？」

リ「イノシシじゃ無かったら、暴れ馬ってとこッスか？？」

桃「何？？」

リ「何スか？？」

桃「よ～し！！今日こそかたをつけてやる！！」

杏「ちょ、ちょっと…」

リ「良いっすよ、相手になりますよ。」

『……止めなさい！！』

そう言って美和はラケットのフレームで2人の頭をたたいた。

桃「いって～！！何するんすか？？」

『アンタ達がバカな事をするからでしょ？？2人ともこの状況を見て言ってる？？』

リ桃「「あ…」」

『…全く、もう…リョーマもリョーマよ？？いちいち、桃を挑発するようなことは言わない！！』

リ「…ウィス。」

忍「ホンマに女は怒らせると恐ろしいさかいなぁ…」

リ「…ねぇ、それよりさぁ、そこの猿山の大将、俺と試合やろうよ??」

『…はぁ。もう、嫌。』

鳳「ほぅ、威勢がいいねぇ。」

滝「阿久津を倒した位で、天狗になってるんじゃないの??」

リ跡「「…」」

『…』

跡「…焦んなよ??」

リ「逃げるの??」

忍「このチビ、いっちょ前にうちの跡部を挑発してるで。」

鳳「大した度胸の1年坊主だ。」

滝「やるねぇ。」

桃「…（あいつめ…どこまでも先に向かって挑戦しやがる。それに比べてこの俺は…）」

『…リョーマ、今は止めときなさい。』

リ「何でですか??」

『少なくとも、今のリョーマでは勝てないからよ。言っておくけど、景吾は私より強いわよ??』

リ「先輩より??」

「そう…だから挑戦した所で結果は見えてる。』

跡「フン、そう言う事だ。どうしてもしたけりゃ関東大会で直々に倒してやる。青学全員、完膚なきまでにな。

行くぞ、樺地。」

樺「ウス。」

跡「上川、さっきの賭け、忘れんなよ??」

そう言って跡部たちは去って行った。

桃「…（関東大会）」

暫くして美和は先に帰って行き、杏も帰ろうとしていた。

杏「じゃあ、私帰るね。」

桃「サンキュウな、色々と。」

杏「色々??」

桃「いや、こっちの話。送って行こうか??」

杏「平気、此処へはしょっちゅう来てるから慣れてる。バイバイ、

関東大会頑張ってね。」

桃「あのさ、さっき跡部さんが言ってた先輩の…」

杏「…ごめん、私からは言えないの。それに言ってたじゃない、それ以上言わないでって。」

桃「…そうだな。」

杏「それじゃあね。」

そう言って杏も帰って行った。そして数日後、関東大会の抽選会が行われ、青学の1回戦は氷帝になり、美和はある決意をするのだった。

関東大会開幕

数日後、いよいよ関東大会が始まり、青学ＶＳ氷帝の試合が始まろうとしていた。

関東大会が始まる数日前の事美和は竜崎と美奈子にある事を話していた。

美「美和…でも…」

『覚悟はできてる、だからお願い。氷帝戦だけシングルスに出させてください！！』

竜「…確かにシングルスで氷帝のレギュラーを倒せるのはお前だけかもしれない。

だが、今お前は怪我人だ。悪化すると分かっていてお前を出すわけにはいかない。」

『私の怪我の事はどうだっていいんです。それにここで負けたら私達3年は引退です。

それだけは絶対に嫌なんです！！』

美「美和…」

『お願いします！！竜崎先生。1度きりの我儘をお許し下さい。』

そう言って美和は2人の前で頭を下げた。2人は暫く考えた後美和に言った。

竜「仕方ないな、今回だけだぞ??」

美「美和はこうと決めたら、絶対に曲げないもんね。」

『…ありがとうございます。』

美「どれ程持つかはわからないけど、サポーターに冷却シートを貼っておくから、あとは自分でやるのよ??」

『…分かってる。』

との事があり、現在に至ったのだった。暫くして美和は関東大会の会場につき、その後のメンバーも会場に到着したが、大石だけがまだだった。

そんな時、大石が怪我をしたことを聞き、代わりに桃が試合に出る事になった。

その頃、氷帝はというと…

忍「青学か…なんかピンときいひんな…もうちょっと強そうなの居らんのか??」

向「だが、これに勝てば上川はうちに来るんだろ??アイツ、結構

美人だし。」

忍「せやけど、アイツ今怪我人やないか。利き手を負傷してる上に、鳥取に勝つのはまず無理やで。」

向「言えてるぜ。まぁ、跡部は結構マジみたいだから適当に勝てば何も言われないんじゃねぇの??」

一方美和達青学は…

竜「今までの相手とはレベルが違う、全力でいかないと叩きのめされるよ??

D2菊丸・桃城、D1乾・海堂、ミクスドD不二・柊、S3河村、ミクスドSS美和、S2不二、S1手塚。

このオーダーに変更はない。此処で負けたら3年は引退だ。全国大会の道も絶たれる。

皆、悔いの無い様にしっかり戦ってくるんだよ??」

全「はい!!」

手「桃城。」

桃「青学〜!!ファイ!!」

全「お〜〜!!」

そうして青学ＶＳ氷帝の試合が始まった。序盤から氷帝が押していき、桃と英二は忍足と向日に振り回される一方だった。

そして誰もが万事休すかと思ったその時、美和はベンチの近くに居た英二に言った。

『あきらめるな…』

英「え？？」

全「？？」

『諦めるな、諦めなければ必ずどこかに弱点は見えてくる。チャンスは何処かにあるはず。自分たちの力を信じよう…』

英「美和…」

『いつも言ってるでしょ？？大石君が。だから、諦めないで、英二。』

英「…そうだな、そうだよな！！有り難う、美和。」

そう言って英二はコートに戻って行った。それからの英二と桃は本

来の力を発揮し、遂に同点まで追いついた。

一方氷帝は向日が前半必要以上に動き回り、向日は体力の限界だった。しかし、その後の青学の勢いが止まる事は無く、Ｄ２は英二たちの逆転勝利だった。

続くＤ１はレギュラー落ちかと思われた宍戸が鳳とダブルスを組み、その執念と努力で海堂と乾を圧倒していた。乾と海堂はお互いのそりが合わないのか、お互いに個人プレーを始めていた。

しかしそれは乾達の作戦で、乾がデータ収集している間に海堂がおとりになり、鳳のプレイや、癖などを計算していた。

そして青学は怒涛の反撃が始まり、見る見るうちに宍戸達に追いついていった。そんな時、遂にブーメランスネイクが完成したのか、海堂のブーメランスネイクがシングルスコートに入ったが、逆にそれが仇となり、逆転もむなしく、Ｄ１は氷帝が勝利した。

そして次のミクスドＤでは捺希と不二の息の合ったコンビプレーで相手を圧倒し、青学は２勝１敗と勝ち越していた。

そうしてＳ３の試合が始まり、タカさんＶＳ樺地のパワープレイヤー同士の対決が始まった。

試合のラリーが続いている中、美和はこんな事を言った。

『樺地君のパワーも半端じゃないけど、彼の持ち味はそれだけじゃ無いわ。』

するとタカさんは不動峰の石田が打った波動球の両手打ちを打ち、試合は一気に青学ムードだった。

しかし、暫くすると樺地も波動球を打つようになり、試合は波動球対決となった。

捺「美和は知ってたの??樺地がコピー能力がある事を。」

『うん、相手の技を瞬時にコピーしてまねる事なんてそうそう出来ない。

私も初めて見た時は正直驚いたよ。樺地君は純粋な故に何でも吸収してしまう。子供の様に…』

捺「そんなことが出来るなんて…」

そしてタカさんは今度は腕の負担がかかる片手打ちの波動球を打ち、流石の竜崎も止めに入ったのだった。

しかし、竜崎の制止も虚しく、タカさんは波動球を打ち続けた。そして、連続で波動球を打ったせいか、タカさんの手は血まみれになっていた。それは棒地も同じ様で、試合は両者試合続行不能により、ノーゲームとなった。

竜崎はタカさんの腕を見ながら安心した顔で言った。

竜「大丈夫、骨には異常無さそうだ。」

タ「あ…ハハハハ。」

竜「笑っとる場合か！！」

タ「いて！！」

竜「無茶し追って寿命が縮まったよ。」

タ「す、すみませんでした。」

竜「早めに外科の先生に診てもらった方が良いな。樺地君も一緒に連れてっても良いかな？？」

榊「行って来い、樺地。」

樺「ウス。」

榊「よろしくお願いします。」

竜「そんじゃ連れてくよ。それじゃあ誰かあたしの代わりにベンチコーチを…」

桃「あ…」

英「ありゃ…」

捺「あ～あ。」

堀水カ那巴「「「「「あ!!」」」」」

竜「ん??」

すると竜崎がベンチコーチを決める前にリョーマが先に座っていた。

乾「やるな、越前。俺ですら座った事無いのに。」

大「何やってるんだ??アイツ。」

海「あのタコすけが…フシュ～。」

沢「どこにでもいるで～ね、ああいう生意気な奴。」

リ「良いっすね、此処。背凭れあって。」

英「何とぼけたこと言ってるんだ!!どけどけおチビ!!」

桃「そうだ越前!!お前にはまだはぇ～な、はぇ～よ!!」

忍「何してんねん。」

宍「何か揉めてるみたいだな。」

向「ああ、しかも相当しょうも無い事でもめてる気がする。」

するとようやくジローが昼寝から起きた。

ジ「フア～！！」

一方美和達青学は…

堀「ったく、越前のああいう強引なとこよくねぇよな！！」

水カ那「「「うん、うん。」」」

巴「でもリョーマ君は生意気じゃないとらしくないよ。」

桜「リョーマ君…」

桃「降りろ！！」

リ「ヤダ！！」

英「降りろ！！」

リ「ヤダ！！」

桃「降りろっつうの！！」

リ「ヤダ！！」

英「降りれ！！」

リ「ヤダ、ヤダ、ヤダ、ヤダ！！」

すると今まで黙っていた美和が笑い出した。

『っプ！！あハハハハ！！』

全「？？」

七「美和ちゃん、そんなに可笑しかった？？」

『うん、あ～可笑しかった。アメリカで前にも似たようなことあったからね。その時もリョーマは駄々を捏ねてた事あったからね。』

リ「先輩、まだ覚えてたんスか??」

『勿論、あれはもう傑作だったからね。生涯忘れる事は無いよ。』

リ「っチェ。」

『さてと、本題に戻って、私は別にいいよ??リョーマがベンチコーチでも。』

英「美和、ホントに??」

桃「マジっスか??」

『うん、不二君と国光も良いよね??』

不「うん、僕は構わないよ。」

手「…」

『だってさ。』

桃「部長なにも言って無いっスけど、良いんスか??」

『国光は何も言わなかったら良いって事なんだよ??』

桃「っチェ、越前お前そういうとこよくねぇぜ??ったく。」

リ「良いじゃん、別に。」

英桃「「…」」

そう言って2人はベンチに戻り、美和もコートに入って行った。すると美和がコートに入る際に竜崎は美和を呼び止めた。

竜「美和。」

『??』

竜「くれぐれも無茶するんじゃないよ??」

『…努力します。』

そう言って美和はコートに入って行った。そして竜崎達3人も病院に行った。そんな時、タカさんが美和の腕の事を聞いた。

タ「先生、美和ってどこか怪我をしているんですか??」

竜「…口止めはされてたんだけどね、仕方ないか。美和は今左肘を怪我してね…本来ならオーダーに入れないつもりだったんだよ。」

タ「じゃあ…」

竜「だけど、相手の鳥取さんに勝てる奴がいるとすれば美和しかいないからね…それに、このオーダーは美和の希望でもあるんだ。腕は悪化してもいいから試合に出させてくださいってね。

河村、美和もまた身を削ってまで全国制覇を成し遂げようとしているんだよ??」

タ「美和…」

一方美和達は、いよいよ試合が始まろうとしていた。

審「ワンセットマッチ、青学上川トゥサーブ。」

『…（タカさん、タカさんの気持ち、ちゃんと伝わったから。）フ、ッハ！！』

美和はラケットを右で持ち、序盤からツイストサーブで攻めて行った。美和が打ったツイストサーブは当然鳥取の顔面向けてくるわけで…鳥取は打ち返せず、顔をそらしたのだった。

審「１５－０．」

『…フ。』

全「…」

鳳「今のサーブって…」

宍「あぁ、ツイストサーブだ。」

向「アイツ、ツイストサーブなんか打てたんだな。」

跡「それだけじゃ無い、アイツは樺地以上にコピー能力に優れたプレイヤーだ。」

忍「ホンマかいな!!」

ジ「すっげ〜!!あいつ強いC〜!!」

一方青学側は…

大「美和は序盤から攻めて行ってるな。」

七「でも美和ちゃん、女の子相手にツイストを殆ど無いのにね。」

捺「それだけ相手が強いって事なんだろうね。」

乾「鳥取ナヲミ、氷帝学園2年。１４８?と小柄だが、その内には無尽蔵の体力を秘めている。テニスのスポーツ特待生で、氷帝のミクスドエース。樺地と幼馴染らしい。」

『もう1球、行くよ??』

そして美和は鳥取を圧倒していき、一気に3ゲーム連取した。

審「ゲーム青学、３－０、チェンジコート。」

「ウソだろ??」

「鳥取が、押されてるなんて…」

鳥「はぁ、はぁ、はぁ…強い。」

『…フゥ。』

リ「…」

『今の3ゲーム見て私を倒す攻略法は見つかった??』

リ「というより先輩、本気出してないじゃないスか。」

『まぁ、そうだけどね。』

すると桃が美和を心配そうに見ていた。それに気づいた美和は…

『…クス、大丈夫だよ、桃。』

桃「え??」

『私は負けないから。』

桃「先輩。」

そう言って美和はコートに戻って行った。コートチェンジの際、跡部は美和に数日前の賭けの事を言った。

跡「上川、この前の賭け、忘れてんじゃねぇだろうな??」

『…フ、さぁね。でも景吾がその賭けに勝つ事は無いよ??勝つのは私達青学だから。』

跡「フン、言ってろ。」

そして再び試合が再開した。ラリーを打ってる中、捺希達青学は桃に先程の賭けの事を聞いていた。

捺「どういう事??美和と跡部って前から知り合いだったの??」

桃「そうらしいです。先輩は、ドイツのジュニア選抜の経験もあってそのジュニア選抜とイギリスのジュニア選抜の合同合宿があったらしいんです。そこで美和先輩と跡部さんと樺地が知り合ったって聞きました。」

大「そう言う事だったのか…」

英「じゃあさっきの賭けって何のことかにゃ??」

桃「実は…関東大会の数日前、偶然氷帝のレギュラーと出くわしたんです。そこで、もしこの試合で氷帝が勝ったら美和先輩は氷帝に

行ってしまうんです。」

捺「それって…」

不「うん…引き抜きだね。」

七「どうしてそんな…」

桃「俺にもわかんないんスけど、先輩はそれだけ俺たちを大事に思ってくれてる…だから負ける訳にはいかない…」

捺「美和…そこまで、私達の事を…」

すると、鳥取は得意技のスカイハイ-スライス-ロブを打ち、美和を追い上げて行った。美和もなんとかゲームを取って行ったが、これといった攻略法が見つからず、遂に逆転を許してしまった。

審「ゲーム氷帝、５－４、チェンジコート。」

『はぁ、はぁ、はぁ。』

鳥「はぁ、はぁ、はぁ。」

「よっしゃ！！遂に逆転だ！！」

「イケイケ！！鳥取！！」

『…』

捺「美和、どうするんだろうね。あの技、バウンドしないから落ちる前に打たないとまず打ち返せないよ。」

リ「先輩、そろそろマジでいかないとヤバいんじゃないスか??」

『言われなくても分かってるよ。』

美和は暫く考えた後、ある策を考えていた。

『…やっぱりあれしかないか。』

七「美和ちゃん、あれって??」

『見てれば分かるよ。でも正直自信ないんだよね…』

不「美和でもそんな事あるの??」

『私はロボットじゃないんだから、それぐらいあるよ。』

そしてラリーが続く中、鳥取は再びスカイハイ-スライス-ロブを打ったがその打球は美和の側の吸い寄せられ、美和は何とか同点まで追いついた。

捺「あれは…」

不「ランキング戦で手塚がやった…」

乾「いわゆる手塚ゾーン。」

手「…」

審「ゲーム青学、５－５、チェンジコート。」

向「アイツ強いな、鳥取があそこまで追いつめられるとは思わなかったぜ。」

鳳「そうですね、しかもあんな腕で…」

捺「どういう意味??美和、怪我してるの??」

忍「アンタら、知らんやったん??あの子、結構前から利き腕怪我してたんやで??」

乾「そうか…だから都大会の決勝でもダブルスで出たんだな。腕の負担を和らげるために…」

不「美和…」

その後も美和は手塚ゾーンを使い続け、ついにマッチゲームまで詰め寄った。

審「ゲーム青学、6－5、チェンジコート。」

その度大歓声が起こり、勝負あったかと思ったその時…

『はぁ、はぁ、はぁ…っぐ!!』

捺「!!美和!!」

美和は左肘に限界が来たのか腕を抑えて激痛に耐えていた。そこに審判がやって来た。

審「上川さん、大丈夫かい??」

『…痛、はい大丈夫です。』

そう言って美和はベンチに戻って行った。七海はすぐさま美和の腕に氷を当てて痛みを和らげていた。

七「…（ひどい、今までこんな状態でプレイしてたなんて…）」

捺「美和！！棄権した方が良いよ！！これ以上続けたら…」

『腕が壊れるって言いたいんでしょ？？』

捺「分かってるなら…」

『でも棄権はしない。』

捺「どうして！？」

『この試合に負けたら、私達3年は引退、今年は絶対全国制覇するって決めてるから。』

不「美和…」

全「…」

『その為の犠牲なら、構わない。』

すると若菜が美和の所に来た。

若「そんなの許さない！！」

『！！天条院さん…』

若「私との決着もまだついて無いのにテニスを辞めるなんて私認めないから…絶対に。」

『…』

若「上川さんは私にとって最大のライバルだから。勝手にやめて貰っちゃ困るわ。」

『…そうだね、まだ現役を引退するには早すぎるか。』

若「…フ、それでこそわがライバル。」

そう言うと若菜は去って行った。そして傍できていた七海は意を決したかのように美和に言った。

七「美和ちゃん、私にできる事何かない??」

『七海…』

捺「七海、アンタまさか…」

七「みんな忘れた??美和ちゃんがなんて呼ばれてたかを…」

不「…黄金の不死鳥。」

七「そう…どんな状況でも決して負けない強さ…そして何かを成し遂げようとする強い意志…美和ちゃんは自分の腕よりも、私達の勝利のために頑張ってくれてる。私達ができる事は見守る事だけだと思うの。」

全「…」

七「美和ちゃんの覚悟、ちゃんと伝わってるから。今まで気付かなくてごめんね。」

『…謝らなくていいよ、怪我を隠してたことは事実だし。でも、ありがとう。皆。』

捺「しょうがないね、美和は意外と意地っ張りなところがあるから。」

『一言余計だよ??』

そして七海は美和の言った通りに手当てを始めた。暫くして大分痛みも和らぎ、美和は再びコートに入って行き、試合は再開された。

しかし腕の激痛もあり、試合はタイブレークまで持ち込まれた。そして両者激しい攻防戦が続き、お互いに1歩も譲らなかった。だが腕の限界が来たのか試合は氷帝が制し、美和は惜しくも敗れたのだった。

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ氷帝鳥取、7－6.」

『はぁ、はぁ、はぁ。』

試合の終了時と同時に歓声が上がり、美和の敗北に青学の誰もが絶句した。

鳥「ありがとうございました。」

『こちらこそ良い試合だったわ。』

鳥「上川さん、強いですね。天条院先輩がライバル視するのも頷けます。」

『そんな事無いよ、現に私は貴方に負けたから…』

鳥「いいえ、腕を怪我してるのに此処まで強いとは思いませんでした。完治したらまた試合してくださいね。天条院先輩とも。」

『勿論。』

それからすぐに美和の応急処置入り、捺希たちは心配そうにしていた。

七「これでいいの??美和ちゃん。」

『うん、良いよ。ありがとう。』

手「試合が終わったら病院に行け。」

『そうなるだろうね、間違いなく怒られるけど。』

手「当然だ。」

すると美和のラケットを拾った不二がラケットを見つめたまま考え事をしていた。

不「…（あんな怪我をしてまで、美和は…）」

捺「??周助、どうしたの??」

不「…美和、このラケット使ってもいいかな??」

『??良いけど、不二君には少し小さいかもしれないよ??』

不「ううん、構わない。」

そして不二はコートに入り、ジローは半場寝起き状態だった。

美和は不二がコートに入る前にこんな事を言った。

『不二君。』

不「?.?.何?.?」

『負けた私がこんなこと言うのも何だけど、たまには思いっきり戦ってみるのも悪くないよ?.?』

不「…クス、そうだね。」

暫くして試合が始まり、不二は初っ端から新技の消えるサーブを打ち、ジローの意標をついた。

捺「何?.?今の…」

七「消えた…」

そして今度も消えるサーブを打ち、不二は会場内の度肝を抜いた。

『…クス。なるほどね。』

捺「美和分かったの??」

『うん、あれはカットサーブだよ。』

巴「カットサーブ??」

『そう、その名の通り、ラケットの面に落ちてきたボールをカットするように繰り出すサーブの事だよ。』

那「でも、只のカットサーブが消えますか??」

『恐らく不二君はサーブのインパクト時に、予め回転をかけたんだよ。そのおかげで、相手の手元で急激に外側へ逃げて行くから消え

たような錯覚に陥るんだと思うよ??』

捺「すご…周助いつの間にあんなサーブを…」

那「やっぱり不二先輩って…」

巴「天才ですね。」

『私もあんなカットサーブは初めて見たよ。』

七「…不二君。」

不二の実力を知ってすっかり目覚めたジローは持ち前の天性の手首で不二を翻弄していった。しかし不二は最後のトリプルカウンターの白鯨を出し、ジローに圧倒的差をつけて勝利した。

ジ「マジ完敗だけど、オメェとはまた試合したいぜ。」

不「うん、僕としては、あのマジックボレーは食らいたくないけど。」

ジ「打たせてくれなかったくせに!!よく言うよ!!しかしオメェなんかより強い奴いるんかい??」

不「うん、居るよ。」

すると不二は手塚を見た。

ジ「なるほど、お前さんとこの部長さんね。納得。でも手塚は別格っしょ。」

不「まぁね、それと多分もう2人。」

そして不二は今度は美和と跡部を見た。暫くして手塚はリョーマとともにアップに行き、美和は従兄妹の白石と電話をしていた。

白＜＜そうやったんやな…美和が負けるぐらいやから相当強かったんやな。＞＞

『まだまだ、修行が足りないって事なんだろうね。』

白＜＜せやけど、腕大事ないんか??＞＞

『うん、今のところはね。』

白＜＜はよう治しいや、飛鳥は美和の対戦楽しみに待ってるさかい。＞＞

『…そうだね。』

すると近くに時音が通り、立ち尽くしていた。

『…精市の前で強くなるって言ったものの、実際はあまり進歩してなところが多いからね。』

時「!?美和…」

白＜＜美和は充分強いと思うで??＞＞

『ううん、今のままじゃダメ、いくら怪我してるからと言ってそれに甘んじることはできない。

だから1度自分のテニスをやり直してみるよ。今度は大切な人を悲しませない様に。』

白＜＜さよか、分かった。美和の好きにしたええ。＞＞

『…ありがとう、蔵。』

そう言って電話を切ると時音が美和に声をかけた。

時「美和。」

『!?時音…』

時「試合どうだった??」

『…ごめん、私、負けちゃった。』

時「そっか…しょうがないよ。相手はあの鳥取さんだったんでしょ??それに怪我してるんじゃ、負けても無理ないよ。」

『…』

時「でも、今度負けるようならその前に私が美和を潰しに行く。覚えておいてね。」

そう言って時音は去って行った。暫くして手塚ＶＳ跡部の試合が始まった。お互い1歩も譲らず、激しい攻防戦が続き、いつしか白熱した好勝負となった。

しかし、跡部はずば抜けた眼力（インサイト）で手塚が肩を負傷している事を見抜き、持久戦に持ち込んで行った。

それでも尚、手塚は懸命に戦い続け、ついにマッチポイントとなった。しかし、手塚の肩は限界を超え、サーブを打つ際にラケットを落とし、肩を抑えていた。

七海はすぐさま手当をしたが、手塚の肩は美和以上に酷かった。不二達の制止も聞かず、手塚はコートに戻って行き、試合はタイブレークまで続いた。だが、限界を超えた跡部に勝利する事は無く、試合は3勝3敗1ノーゲームで控え選手によるシングルスマッチで勝敗を決める事となった。

暫くしてリョーマＶ日吉の試合が始まり、リョーマもまたツイスト

サーブで氷帝の度肝を抜いた。

そしてリョーマは今までの鬱憤を晴らすかのようにテンションがどんどん上がり、日吉を全く寄せ付けなかった。そして圧勝で勝利し、青学は４勝３敗１ノーゲームで関東大会１回戦を突破した。

それぞれの覚悟

試合が終わった後美和と手塚は竜崎と桜乃と一緒に金井総合病院に行き、美和は芹香、手塚は美奈子にそれぞれ怪我の具合を見て貰っていた。

『痛い!!痛い!!』

芹「我慢しなさい!!よくもまぁこんなになるまで放っておいたわね。今までのリハビリが水の泡よ!!」

『だって…』

芹「だってじゃない。そう言うとこホントに姉さんそっくりだね。」

『そうなの??』

芹「えぇ、美和は昔の姉さんそっくりだよ。何でも1人で抱え込んで、プレイヤーとしても将来有望だったのに無理して挙句の果てに腕を壊して再起不能。

今はスポーツドクターとして多くの患者を診てるけど、たまにホントにそれで良かったんかって思う時があるわ…美和にはそんな思いして欲しくないのよ。勿論蔵ノ介や飛鳥にもね。」

『芹香さん…』

芹「先生って呼びなさい。」

『は～い、芹香先生。』

芹「でもマジな話、これからもテニスを続けたいなら無茶は禁物よ？？」

『…分かってます。』

芹「ならいいけど…取り敢えず明日詳しい検査するから学校は遅刻していきなさい。当然、ラケット握るのも禁止だよ??」

『右でもダメなんですか??』

芹「当然よ!!アンタ右も壊したいの??」

『…』

芹「とにかく、暫くラケットを扱うのは禁止。部活もしばらく休むこと、良いね??」

『…は〜い。』

芹「…美和、心配なら様子だけでも見に行ってあげたら??」

『…いいえ、今はいいです。今行ったら気持ちが揺らぎそうだから。』

芹「無理してない??」

『…大丈夫です。それに精市は私なんかいなくても充分強いですから。』

そう言って美和は診察室に出て行った。

診察室から出ると桜乃が心配そうに駆け寄った。

桜「美和先輩、大丈夫ですか??」

『う〜ん、大丈夫でもないかな??暫くの間ラケットも握れないし。』

桜「そうなんですか…」

竜「しばらくの間は部活は休部だな。」

『すみません…無理言って…でも私、後悔はしてませんから。』

竜「全くお前さんというやつは…そう言うとこ美奈子にそっくりだよ。」

『…さっきも言われました。そっくりだって。』

桜「あの…手塚部長は…」

『あ…国光はまだ時間かかると思うよ??国光の肩、私よりひどいみたいだから…』

桜「…」

暫くして手塚が出てきて2人は自宅に帰って行った。

次の日、美和は検査のため学校を遅刻し、病院に来ていた。一方大石たちは…

竜「皆集まったかい??」

全「はい!!」

竜「まずは氷帝戦お疲れさん。今までに無い激戦だったが、立ち止まってるヒマはないからね。

関東大会の次の試合までにしっかり調整しとくんだよ??」

全「はい!!」

竜「この先、さらなる競合が待ってるからね。気合い入れていきな？？以上だ。」

大「あ…竜崎先生。」

竜「何だ？？大石。」

全「…」

大「て、手塚と美和は…」

R「！！」

竜「…2人ともあの怪我だ。暫くの間は来られないだろう…」

大「…そうですか。」

竜「副部長、暫くの間柊と一緒に部を頼んだぞ??」

大「はい。」

竜「柊、美和の事も心配だろうがしっかりな。」

捺「はい。」

竜「関東大会はまだ始まったばかりだ。このままで行くとは限らない。今レギュラーじゃないものも現レギュラーを蹴落とすくらいの意気込みで練習に励んでくれ。」

全「はい!!」

竜「最後にもう1つ、今回試合中に負傷する者が多かった。怪我で実力が出せないんじゃ、元も子もない。各自怪我には十分注意するように。以上練習始め！！」

それから暫くして朝練が終わり、教室に行った捺希たちは美和が遅刻することを聞いた。

捺「え??美和が遅刻??」

「うん、何でも病院に行くって聞いたよ??」

捺「そっか…ありがとう。」

七「美和ちゃん、相当悪いのかな??」

英「かなり酷かったもんねぇ。」

不「いずれにしろ、完治までは時間がかかるって事だね。2人とも。」

捺「…うん。」

その頃、美和は…

『…時間かかりそうですか??』

芹「う～ん、やっぱり結構酷いわねぇ。」

『どのくらいかかりそうなんですか??』

芹「そうねぇ、長くて1ヶ月ちょっとかな。でも場合によっては1ヶ月かからないかもしれないけど。」

『できるだけ、急いでもらえますか??関東大会の決勝までには間に合わせたいんです。』

芹「…それは自分のため??それとも…」

『…もう後悔はしたくないんです。それに私の正で大切な人が傷付くのは…耐えられない。』

芹「…分かった、やってみましょう。ただし、想像を絶するほど過酷よ??」

『…お願いします。』

そしてさっそく美和は肘の治療に入ったのだった。暫くして美和は学校につき、授業中の教室に入った。

『失礼します、遅くなりました。』

捺「美和…！！」

竜「あぁ、来たか。取りあえず席につけ。」

『はい。』

そう言って美和は席につき、授業が終わると竜崎は美和に言った。

竜「上川、昼休みになったら職員室においで。」

『はい。』

そうして竜崎は出て行った。

捺「美和、どうしたの??そのサポータ??」

『うん、念のため、サポータをした方が良いって言うから。恐らく肘にかかる負担を最小限に抑えるためだと思うよ??』

七「そっか…」

不「ラケットを持って来てないって事は当分は握れないって事なんでしょ??」

『うん、右でもダメかって聞いたら、右も壊す気かって言われてさ…』

英「徹底してるにゃ〜。」

捺「とにかく、美和は怪我を治す事だけを考えて。後は私達が何とかするからさ。」

『ありがとう。』

それから月日が流れ、美和の腕は驚異的なスピードで回復していった。そんな中、美和が病院に行く途中杏から連絡が入り、ストリートテニス場に来て欲しいという内容だった。

暫くして美和がストリートテニス場に来てみるとそこには杏の他にリョーマ、桃、不二、七海、神尾、伊武、裕太、観月、柳沢が居た。

『何だ、結構いるんだね。』

杏「あ!!来た!!上川さ~ん!!」

全「ん??あ!!」

『橘さん、どうかしたの??』

杏「いえ、最近上川さん病院通いって聞いてたから気分転換でもどうかって思って。」

『そうだったの、ありがとう。』

七「美和ちゃん、今日病院じゃなかったの??」

『そうだったんだけど、此処によってからでもいいかって思って。』

すると美和は七海の耳元でこう言った。

『ねぇ、もしかして七海、不二君とデート??』

七「う、うん…一応。」

『何か歯切れ悪いけど、どうかした??』

七「それが…ストリートテニス場に行ったら私の家に行こうって…」

『マジ??それ…』

七「う、うん…」

『まぁ、頑張って。折角デートに誘ってくれたんでしょ??』

七「そ、そうだよね。」

すると不二が割り込んできた。

不「2人して何話してるの??」

『!!ううん、何でもないよ。』

七「ただね、美和ちゃんの腕の事を聞いてただけだから。」

『そうそう、この調子で言ったらあと少しでラケットも握れるって話してたの。』

不「??そうなんだ、早く握れるといいね。」

『うん。』

それが成り行きで混合ダブルスをすることになり、桃・神尾ペアVSリョーマ・伊武ペアの試合が始まった。

序盤は桃達が押してたもののリョーマの上手い心理作戦で桃達を崩し、リョーマと伊武は見事勝利した。

試合が終わると美和は病院に行き、七海と不二に別れを告げた。

暫くして病院につくと芹香は美和の驚くべき回復力に目を疑わずにはいられなかった。

『??芹香さん、どうかしました??』

芹「…美和、アンタ、どんな生活してるの??」

『は??食べてるものは芹香さんとほとんど変わりませんよ??今は母さんが作ったものしか食べてませんから。』

芹「…凄い回復力だわ。正直、此処まで聞くとは思わなかった。」

『それって今やってる超音波治療が私にはあってたって事ですか？？』

芹「そう言う事ね。」

『芹香さん、まだラケット握っちゃだめなんですか？？』

芹「…正直、もう握ってもいい段階には来てるの。ただし、右だけね。練習に復帰するのは完治してからにしなさい。無理をしてまた壊したら元も子もないから。」

『…じゃあ、練習は無理でもマネージャー業ならやってもいいですか？？マネージャーならラケットもあまり使わないから。』

芹「…いいでしょう。」

『ありがとうございます。』

芹「…美和、手塚君に何かあっても目を逸らさないで。」

『…はい。』

そうして美和は出て行った。そして病院から出る際、美和は偶然幸村と鉢合わせした。

幸「…」

『精…市。』

幸「どうして…美和が…」

『それは…』

幸「…ちょっと来て。」

幸村は半場強引に美和を屋上に連れて行った。

幸「どうして美和がここに居るの??竜胆先生と美和のお母さんがこの病院に居るって事は知ってたけど…」

『…』

幸「俺には話せない事??」

『…黙っててゴメン。実は私、今怪我してるの。左腕をね。』

幸「テニス肘って事だね。」

『そう、だから今芹香さんにその治療をしてもらってるの。おかげで大分良くなったよ。』

幸「竜胆先生は性格こそは荒っぽいけど外科医としての腕は確かだからね。」

『そうね。』

幸「でも一言言ってほしかった。そうしたら一目でも美和の顔を見られたのに…」

『…ごめんね。』

そう言うと美和は幸村にキスをした。暫くして美和が帰るころになり幸村は美和に言った。

幸「またこうして会いに来てくれる??」

『…それはできない。どんなに想い合ってても私達は敵同士。それは精市も分かってるでしょ??』

幸「…」

『精市は私なんか居なくても精市は充分強い。それに精市にも大切な仲間がいるように、私にも掛け替えのない大切な仲間がいる。私はそんな仲間と一緒に全国制覇を成し遂げる。

だからもう精市とは一緒には居られない。ゴメンね。』

そう言って美和は去って行った。家に帰った後美奈子も帰りつき、夕食を済ませた後美和は美奈子にある事を聞いていた。それは…

『え??ドイツに??』

美「えぇ、急で悪いわね。私が日本にいる間仕事が増えたみたいで…」

『そ、そう…（それじゃあ、国光は…）』

美「美和、国光君の事が心配かもしれないけど、今は聞かないで。時期に本人が話すから。」

『…分かった。』

そう言って美和はある疑惑を抱いたまま部屋に戻って行った。

突然の別れ

次の日から美和は部活のに出るようになり、次の試合からの士気が高まったある日の事、七海や桃を含めたレギュラー全員が大石に夜は空けといてくれと言われていた。

暫くしてそれぞれ集合場所に着き、美和、捺希、七海も少し遅れて来た。

七「ゴメン、遅れて。」

捺「皆早いねぇ。」

『でもまだ大石君は来てないみたいね。』

リ不英タ乾桃海「「「「「「「！！」」」」」」」

『？？皆どうかしたの？？』

タ「美和、それひょっとして普段着？？」

『そうだけど？？』

英「俺、美和の普段着初めて見たにゃ～。」

『ねぇ、捺希。私の格好って変なの？？』

捺「そんな事無いと思うよ？？」

巴「なんていうか…先輩クールです！！」

那「うんうん！！」

そう、美和は全身真っ黒の黒のワンピースを着ていた。美和の見慣れない姿を見たせいか手塚を除く男性レギュラーは不覚にもトキメタていた。

捺「まぁ、もともと美和はスタイル良いもんね。」

七「うん、美和ちゃんはこういう黒とか大人のイメージの色の服が1番あってるもんね。」

那「私、そんな色が似合う人って憧れちゃいます！！」

『そう？？あんまり意識したことないんだけどな。』

不「って事は手塚はそんな美和を毎日見てるって事だよね？？」

英「手塚、羨ましい！！」

手「…」

リ「で、大石先輩の用事って何なんスか？？」

英「さぁ？？何だろうね？？」

乾「何だ、英二も知らないのか。」

捺「英二なら何か知ってるって思ったんだけどな。」

桃「タカさんは？？」

タ「いや、俺も知らない。」

不「手塚は、何か聞いてる??」

手「…いや。」

七「小鷹さんや巴ちゃんも知らない??」

那「はい。」

巴「知らないです。」

『じゃあ、誰も知らないって事か。』

リ「皆、知らないで集まったんスか??」

するとようやく大石が来て、呼び出した内容はみんなで山に登ろうと言うものだった。当然1，2年生は乗り気じゃなく…

リ「あ～あ、急に呼び出すから何かと思ったら…」

桃「マジで言ってんスか??」

海「時々、青春モードに入る時があると思っていたが…」

桃「どうする??越前。」

リ「オレ、パス。」

大「え??皆、行きたくないのか??」

そして大石が落ち込んだその時…

『良いじゃん、行こうよ。』

大「え??」

『私、実は山頂からの朝日って見た事無いし。』

不「そうだね、僕も見た事無いよ。」

捺「私も!!」

七「皆で朝日を見るのもいいんじゃないかな??」

タ「うん、俺もいいよ。」

乾「俺も見た事無いな。」

大「（パァ。）…」

桃「ど、どうする越前。」

リ「…桃先輩こそ、どうするんスか??」

タ「大石は氷帝戦に出れなかったのも、無念だっただろうし、関東大会に向けて、気持ちを引き締めたいんだろう。」

英「よ〜し、決まり!!皆で山に行こう!!」

リ巴那桃海「「「「「…」」」」」

海「フシュ～。」

桃「こりゃ、逃げらんねぇな、逃げらんねぇよ。」

リ「はぁ…」

巴「決まりみたいだし…」

那「行くとしよっか。」

大「…よ～し!!山へ行こう!!」

不英タ乾捺七「「「「「「おお!!」」」」」」

そうして美和達は山に向かい無事に朝日を見ることが出来た。その

後不二はカメラを持って風景を撮ったり美和達を写したりしていた。
そんな時、美和が不二に手塚との2ショットを撮って欲しいと言った。

不「え??美和と手塚の??」

『うん、ダメかな??』

不「うん、良いよ。その代りと言っちゃなんだけど、僕との2ショットも撮って良いかい??」

するとその話を聞いていた英二も割り込んできた。

英「不二と手塚だけずるい!!オレも撮って欲しい!!」

『分かったから、順番ね??』

英「イエ～イ！！」

そして美和は他の皆との2ショットも写るはめになり、結局レギュラー全員と写ったのだった。

そうして最後はみんなの集合写真を撮り、美和達は朝練に向かった。

大「レギュラーと七海は部室に集合、手塚からの呼び出しだ。」

不「手塚から??」

英「??」

『…（ついに来たか）』

英「何だろ??用って。」

そして手塚はある事を言った。それは…

大「…今、なんて言ったんだ??手塚。」

手「…次の試合には出られない。左肩の治療のため、長期でドイツに行くことになった。

『…』

手塚の爆弾発言に美和以外は驚きの余り絶句した。それから数時間が経ち、授業が始まった。美和達は授業中でも手塚の事を考えており、気がつけば昼休みになっていた。

美和は昼食を終えると屋上に行き、その後に手塚が来た。

手「こんな所にいたのか。」

『…国光。』

手「知っていたのだろう??俺がドイツに行くことを。」

『…知ってたわ、この間母さんがドイツに発つって聞いてからなんとなくそんな気がしてた。

でも言ってほしかった。国光にとって私は邪魔な存在??』

手「そんな事は無い、お前が居てくれてよかった。感謝してる。」

『じゃあ…』

手「だがもう美和に迷惑はかけられない。すまない。」

『…迷惑だなんて思ってないよ。私が好きでやってる事だから。』

手「そうか…ありがとう。」

『…国光。』

手「何だ??」

『約束するよ。全国大会の切符を持って待ってるから。そして肩が完治したらまた私と試合をしてよね。』

手「…あぁ、約束しよう。」

そう言って美和と手塚は指切りをした。すると不二がやって来た。

手「…不二。」

不「手塚…」

手不「「…」」

『…じゃあ、私先に戻ってるね。』

そう言って美和は去って行った。残された2人は…

不「美和、僕達に気を使ったのかな??」

手「そのようだな。」

不「でもドイツか…遠いね。」

手「心配はしていない、青学には大石が居る。お前や美和もな。」

不「どれくらいむこうに行ってるの？？」

手「…分からない。完治するまでは治療に専念するつもりだ。」

不「帰って来た時は完璧な手塚国光…か。」

手「あぁ、ベストな状態で試合に臨むことが出来る……誰とでも。」

不「！！誰とでも…」

手「あぁ、誰とでもだ。」

不「…そうか、楽しみだな。」

そして瞬く間に放課後になり、手塚は部員全員にドイツに行くことを告げた。そうして練習の終わりに手塚とリョーマの試合が行われ、６－４で手塚が勝利した。

そして手塚はリョーマに“次に会うまでに俺を倒せるようになっておけ”と言いドイツに旅立った。

2回戦～華村の作品～

手塚がドイツに旅立ってから数日が経った週末の事、関東大会の２回戦が行われ、美和が会場に着くとリョーマが女の人と話していた。だが、その女の人は今日の対戦校のコーチだった。

美和は特に気にする事も無くリョーマに近付いた。

『リョーマ、おはよう。』

リ「ウィーッス。」

？「あら、あなたは上川美和さんね。」

『失礼ですけど、あなたは??』

？「はじめまして、私は城成湘南のコーチの華村よ。

それにしても残念ね、上川さんは中学テニス界でも1位2位を争うトッププレイヤーだと言うのに。」

『…』

華「でも大丈夫、全国で貴方達の無念を晴らしてくるから。」

『…言いたい事はそれだけですか??』

華「…」

『なら言わせてもらいますけど、私や国光が欠場して戦力ダウンしてるのは確かです。

でも私達が居なくても青学は充分強いです。それだけは自信を持っていえます。』

華「仲間の勝利を信じる事は良い事です。しかし現実はそう甘くないわよ??」

『試合をしてみればわかりますよ、それに私達の無念を晴らしてくれなくても結構です。試合は私達青学が勝ちますから…行くよ、リョーマ。』

リ「んじゃ、そう言う事で。」

そう言って美和とリョーマは去って行った。

梶「…失礼な奴め。」

暫くして全員集まり、竜崎が号令をかけた。

竜「よし、これで全員そろったね、さぁ、一言頼むぞ部長代理。」

大「…はい。さぁ、油断せずに行こう！！」

桃「おう！！」

大「行くぞ、青学～！！ファイト～～！！」

リ巴桃海大不英乾捺「「「「「「「「「「おう！！」」」」」」」」」」

タ「じゃあみんな応援は俺と美和でまかせてくれ。」

『頑張ってね。』

すると桃がタカさんにラケットを渡し、タカさんはバーニング状態に変化し、勝った人はすしの食べ放題、負けた人はわさび寿司とい

う爆弾発言をした。

リ「寿司の…」

巴桃海大不捺英乾「「「「「「「「食い放題（食べ放題）！！」」」」」」」」

竜「準備は出来たかい？？それではオーダーを発表する。Ｓ１不二、Ｓ２リョーマ、ミクスドＳＳ柊、Ｓ３海堂、ミクスドＤ桃城・巴、Ｄ１大石・菊丸、Ｄ２桃城・乾。以上だ。」

そうして青学ＶＳ城成湘南の試合が始まった。しかし相手のペアは双子なだけあり息もピッタリだった。そんな中でも果敢に挑み続け、やっと反撃開始かと思ったその時、桃が乾汁を飲んだせいで桃はノックアウトし、試合は棄権負けとなった。

続くＤ１は余りの身長差で英二達も困惑し、ダブルス特有の協力技のサンダーボルトが炸裂し、流れは城西湘南ペースだった。そんな時、華村は大石がまだ手首が完治してない事に気付き、大石を徹底的にマークした。だが経験の差が出たのか英二と大石は何とか勝利し試合は１勝２敗と後半戦を迎えた。

次のＳ３は美和と同じコピーテニスを得意とした若人が出場し、次々とプレイスタイルが変わるプリテンダー戦法で海堂を翻弄していった。しかし、海堂のブーメランスネイクで一気に流れを取り戻し、勝利した。

そしてミクスドＳＳでは捺希の本来の実力が発揮し、６－３で勝利した。そうしていよいよ青学は城成湘南に王手をかけたＳ２は大接戦となった。そして試合の中盤でリョーマの対戦相手の神城は禁止されていたディープインパルスでリョーマ自身を傷つけて行った。

しかし、リョーマはもろともせず、遂にはリョーマの潜在能力が開花し、華村は勝敗が決まる前に負けを認めていた。

華「もはや勝負は見えました。竜崎先生ベスト４進出おめでとうございます。」

竜「随分諦めが早いじゃないか。」

華「引き際を見定める事もゲームには大事な事ですわ。大切なのは

負けて何を学ぶのか。今日のゲームは作品がより輝く通過点に過ぎません。」

すると華村は美和の方を向いて行った。

華「上川さん、貴女の言う通りでしたね。青学はみんな強い。青学が強い理由、それは全国制覇という目標に向かってチームが一丸となり突き進む心。私はそんな青学の強い思いを読み取ることが出来ませんでした。」

『…城成湘南の皆も強いと思いますよ??作品……っていうのは納得がいきませんけど、先生が皆を大事に思ってるように、皆も先生の事大切に思ってる心はちゃんと伝わりましたから…』

華「優しいのね…竜崎先生、素晴らしい生徒さんを持ちましたね。」

竜「ちょっとばかし、物分りが良すぎるんだけどね。」

そして勝敗が付きリョーマは６－４で神城を下し、青学はベスト４を決めた。

審「ゲームアンドマッチ、青学越前６－４．」

暫くして美和達が帰る準備をしていると城成湘南の部長の梶本がやって来た。

梶「どうも、部長の梶本です。」

大「部長代理の大石です。」

梶「ベスト４進出おめでとう。」

大「ありがとう。」

梶「ところでシングルス1の人は…」

不「僕だよ。」

梶「！！」

不「今日は越前に持ってかれちゃったけどね。」

大「うちの不二だ。」

梶「君の噂は聞いているよ、シングルス1まで周れば戦えたんだけどね。残念だよ。」

不「お互いにね。」

梶「全国、頑張ってくれ。」

大「ああ、頑張るよ。」

そして美和達は口約通りお寿司の食べ放題に行っていた。そこで負けた桃、乾、巴の３人はわさび寿司を食べたのだった。

勝負へのこだわり

次の日美和、英二、大石、タカさん、七海以外の青学レギュラー陣は山吹ＶＳ不動峰の試合を身に来ていた。

桃、リョーマ、巴が遅刻した中不動峰はＤ２７－６、Ｄ１４－６、ミクスドＤ５－７、Ｓ３６－１、ミクスドＳＳ６－３と勝ち越していた。

そしてＳ２の神尾ＶＳ千石では神尾のスピードで押しているかのように見えたが動体視力の良い千石はそのスピードを狂わせ、神尾を混乱していった。しかし神尾の新技、ソニックブリットで流れを引き戻し、試合はタイブレークまで続き、神尾は見事千石に勝ち、不動峰はベスト４進出を決めた。

一方病院に行った美和と付き添いに来た七海は…

芹「うん、順調に完治に至ってるよ。このまま行けば、あと少しで完治だよ。」

『ホントですか??』

七「良かったね、美和ちゃん。」

『うん!!』

芹「でも油断は禁物よ??出来れば完治した後の長時間のプレイはやめといた方が良いわね。」

『了解。』

芹「七海ちゃんって言ったわよね??」

七「はい。」

芹「美和、ちょっと目を離すとすぐ無茶するから良く見ておいてね。」

『大きなお世話です。』

芹「あ、そうそう。美和。」

『何です??』

芹「たまには母さんの顔も見てあげな??」

『…それはお互い様でしょ??七海、帰ろっか。』

七「うん、じゃあ失礼します。」

そして病院を出ると大石、英二、タカさんが居た。

『3人ともどうしたの??』

英「美和と七海を待ってたにゃ〜。」

タ「どうだったんだい??」

大「この中じゃ、美和が1番重傷だからな。」

『そこまで大袈裟じゃないよ。』

七「でも実際美和ちゃん酷い怪我だったじゃない。」

大「で、どうだったんだ??」

七「このまま行けばあと少しで完治だって。」

英「マジ?!良かったにゃ〜。」

そう言うと英二は美和に抱きついた。

『え、英二…苦しい…』

英「あ!!メンゴ、メンゴ。嬉しくってつい…」

『これからどうする?!今戻っても試合はもう終わってると思うし。』

七「そうだよね…」

英「じゃあ、このメンバーで遊びに行くって言うのはどう??」

タ「良いね、それ。」

大「あぁ、行こう。」

七「うん!!」

英「よぉ〜し!!なにはともあれ、美和とデートって事には変わりないからね!!レッツゴ〜!!」

『オォ〜!!』

そう言って美和達5人は遊びに行ったのだった。その光景を幸村は病院の屋上から見ていた。

近付く2人

青学がベスト4に進出してから暫く経ち、大石達は準決勝進出を祝してレギュラー＋αでボーリング場に来ていた。しかし、集合場所には美和は居なく、美和は用事があると言い欠席していた。

美和は皆がボーリングをしている中1人神奈川に行き、もう1人の幼馴染、真田の実家に行き、座禅や茶道などの修行をしていた。

気がつけばお昼近くを回り、真田が帰る前に美和は東京に戻り、美和と真田が鉢合わせする事は無かった。

暫くして美和は東京に着き、美和はレクレーションが行われているボーリング場に行った。

美和がボーリングに着くと、美和は見るも無残な光景を目の当たりしていた。それは参加者全員がグッスリ眠っていて、美和はただ呆然と見ていた。するとボーリング場の関係者が来た。

美和は代金を立て替えた後竜崎を先に起こし、タクシーを呼び、リョーマ達を自宅へ運んだ。暫くして美和は家の空き部屋に運んだ後、お菓子を作りながらシルバーアクセサリーを作っていた。すると、

不二が目覚めたのか家の中を散策していた。そしてリビングに着き、美和が熱心にシルバーアクセを作っている所を見ていた。

そんな時、美和が気付いたのか不二に声をかけた。

『あ、不二君。起きたんだね。』

不「ねぇ、此処ってもしかして…」

『うん、私の家だよ。用事が終わって来てみたら皆寝てるんだもん。ビックリしたよ。』

不「じゃあ、僕達をここまで運んだのって美和??」

『そうだよ??流石に15人運ぶのは骨が折れたよ。』

不「大丈夫??」

『うん、もう大丈夫。そこまで軟な鍛え方してないからね。』

するとキッチンのオーブンに焼いておいたラズベリーパイが焼けたのか美和はキッチンに向かった。

『…あ、うまく行ったみたい。』

不「なに作ったの??」

『ラズベリーパイだよ、この間兄さんの彼女が来てラズベリーを持って来てくれて折角だから作ろうと思って。不二君、食べてみる??』

不「うん。」

そして不二は何の遠慮もなくラズベリーパイを口にした。

『どう??』

不「すごくおいしいよ、美和って料理も上手なんだね。美和はきっといいお嫁さんになるよ。」

『おだてても何も出ないよ??（そう言えば不二君と由美子さん何と無く雰囲気が似てるような…まさかね。）』

不「ホントだよ??（でも、美和のラズベリーパイ、姉さんが焼いたパイの味にそっくりだな…）」

美和と不二はお互いに似たようなことを考えていた。暫くして2人は美和の昔の写真を見てお互いの過去を語り合っていた。そんな時、不二は美和にこんな事を聞いてきた。

不「ねぇ、美和。美和と手塚って昔から今みたいな関係だったの?

？」

『どうしたの？？突然。』

不「うん…僕と捺希は全然そんな事無かったんだけど、美和と手塚はどうだったのかな…って。」

『…今と全く変わらなかった訳じゃ無いよ。』

そう言って美和は3年前の事を語りだした。3年前、ある人を好きになった事、そして今日が初恋の彼と出会って3年たつ事。そう言っている美和はとても安らいでいた。

『でも気持ちのすれ違いがあって半年もたたないうちに別れたけどね。』

不「…美和は今でもその彼が好きなの？？」

『…正直分からない、今でも彼の事を忘れられないのは確かだよ。でも、たとえ気持ちが繋がっているとしても一緒に居られないと思うから…だからもういいの。』

不「…」

『…それにね、不二君ってその彼にちょっと似てるんだよね。』

不「僕が??」

『うん、テニスが上手なところとか…後、私に対しての態度とか、少なからず似てるよ。たまに…どっちか分からないくらい…』

不「…美和。」

すると不二は無意識に美和を抱きしめていた。美和もまた不二に寄

り添い、暫くの間2人は何も言わなかった。この時2人は気付いていなかった。七海がその光景を見ていたことに…

三角関係

ボーリング大会が終わってから数日が経ち、準決勝に向けて練習する中七海は美和を屋上に呼び出していた。

『どうしたの??大事な話があるって。』

七「…うん、美和ちゃん…不二君の事どう思ってるの??」

『え??どうって…不二君はそりゃ優しいけど、掛け替えのないチームメイトだし、時にはクラスメイトだと思ってるよ??』

七「…ホントに??」

『勿論だよ。それ以外に何かある??』

七「じゃあ、なんでこの間美和ちゃんと不二君抱き合ってたの？？」

『！！七海…まさか…』

七「見てたの、この間のボーリング大会があった時に美和ちゃんが不二君に寄り添ってたところを…」

『…まさか、見てたとはね。』

七「酷いよ、美和ちゃん…私の気持ち知ってるくせに…」

『…』

七「私にとって美和ちゃんは憧れだった。でも、これだけは譲れない。」

『…そう、なら一言言っておくよ。七海にとって不二君は特別かもしれない…でもね、七海を必要としてる人は他に居るって事を忘れないで。』

そう言って美和は出て行った。コートに行く途中美和は心の中で聞こえるはずもない七海に呟いた。

『（少なくとも国光は七海をマネージャー以上の存在として見てる。七海がいつ国光の気持ちに気付くかは分からないけど…）』

一方七海は美和が最後に言った意味を理解できずにいた。

七「…どういう意味なんだろう。私を必要としている人は他に居るって…」

それからというものの美和と七海はお互いに距離を置くようになり、捺希達レギュラーも不思議に思っていた。

浪速の少女登場

それから美和と七海はお互いにギクシャクした関係が続き、2人は必要最低限話さない様になった。

そんな日々が数日続いたある日の事青学レギュラー陣はトレーニングがてら海に行くことになり、千葉県に来ていた。

しかし、1年生組がタカさんが貰った宿泊券を落としてしまい、途方に暮れていたその時、変装をしたリョーマの父、南次郎が現れ、海の家の手伝いをする代わりに宿泊代は建て替える約束をした。

捺希たちが手伝いをする中、リョーマと巴は南次郎を連れて裏に行き、ある話をしていた。それは…

巴「とにかく、私達とおじさんが知り合いだと言う事は何があっても言わないで下さいね??」

南「なんでだ??」

すると美和も話に割り込んできた。

『そりゃ恥ずかしいからに決まってるじゃないですか。』

南「おぉ!!美和ちゃん、久し振りだな。暫く見ないうちに綺麗になっちゃって!!」

『お久しぶりです、南次郎さん。おだてても何も出ませんよ??』

巴「先輩!!おじさんの事知ってるんですか??」

『まぁね。』

南「ところで俺のどこが恥ずかしいんだよ??」

リ巴「「『全部！！」」』

リ「とにかく、絶対秘密にしててよ。」

『お願いしますね。』

そう言って美和達は中に入って行った。そんな中、またひと騒動起こり、成り行きで美和とリョーマがペアを組み、ビーチバレーをすることになった。

しかし結局のところ南次郎はとんずらをし、仕方なく帰ろうとしたその時、捺希がリョーマ達を足止めした居た。

捺「ちょっと待った！！」

英「何？？捺希。」

捺「泊まる所確保できるかもしれないよ??」

桃「マジッスか??」

大「でも俺たちそんなお金持ってないぞ??」

捺「大丈夫、美和が心当たりあるってさ。」

その頃美和は誰かと電話をしており、許可が出たのか嬉しそうな顔をしていた。

『ホントに??助かる~!!じゃあ今からそっち行くね??うん…じゃあ。』

捺「美和、どうだった??」

『ＯＫだってさ。』

捺「ホントに??」

大「美和、ホントにいいのか??」

『うん、１つだけ条件があるけど…』

捺「何??」

『…私がそのお店の手伝いをすること。』

那「どういう事ですか??」

『まぁ、行けばわかるよ。』

そう言って美和は宿泊がとれた宿に向かった。その途中偶然次の対戦校六角中のレギュラーメンバーに会い、不二と捺希は久々に会う佐伯に喜びを露わにしていた。

捺「サエ～!!会いたかった!!」

佐「捺希、久し振りだな。」

捺「うん!!ここに来てからずっと考えてたんだ、サエに会えないかな～って!!」

佐「ハハハ、そんなに俺に会いたかったのか??」

捺「べ…別に深い意味はないからね。」

そんな時、部長の剣太郎がリョーマの所に行き、成り行きで六角中

のテニスコートに行くことになり、美和は捺希達と別行動をとり、道順を教えて先に行っていた。

暫くして美和は水蓮花という名前の老舗旅館につき準備に取り掛かった。そしてひと段落したその時、丁度捺希達が来て美和も入り口に出向いた。

捺「あ、美和。」

『皆、丁度いいタイミングだったよ。』

大「美和、此処でホントに間違いないのか??」

『まぁ、驚くのも無理ないか。ここはね、私のお祖母ちゃんが経営してるお店なの。』

全「お祖母ちゃん!?」

『そう、此処の総支配人みたいな人。たまにはこっちにも来なさいって言われてたから丁度いいと思ってね。じゃあ、部屋に案内するからみんな来て。』

そう言って美和は大部屋1部屋と、小部屋2部屋に案内し、それぞれの説明をした。

『この大部屋は男子レギュラーが使っていいよ。私達は隣の小部屋。後1つ小部屋をとってあるけど、そこはミーティング用、大石君とか乾君は必要でしょ??』

大「あぁ、美和、ありがとう。」

乾「助かるよ。」

捺「流石美和!!気が利く!!」

『さてと、これからどうする??』

那「お風呂入りたい!!」

巴「私も!!」

『なら先にお風呂にしよっか。』

捺「賛成!!」

『じゃあ私達はお風呂に行ってくるね。リョーマ達は好きにしていいよ。あ、でもあんまり騒がないでね??他のお客さんもいるから。』

大「あぁ、分かった。」

そう言って美和達は荷物を置いてお風呂に向かった。リョーマ達も美和達を追う様にお風呂場に行ったのだった。

暫くして美和達は温泉の湯につかり、他愛のない話をしていた。その頃リョーマ達は誰もいない露天風呂で騒いでいた。

そんな中リョーマ達は我慢比べを始め敗者は乾汁を飲むと言う恐怖の我慢比べをしていた。

そんな時、捺希が美和にこんな事を聞いてきた。

捺「ねぇ美和、美和って好きな人いないの??」

『え??好きな人??』

捺「うん。美和って結構モテるじゃん。だから好きな人くらいいるんじゃないの??」

巴「あ!!私も思ってたんです!!」

七「…」

その頃美和の好きな人が知りたいのかリョーマ達は静まり返っていた。

『う～ん、別に好きな人はいないかな。ただ、リョーマとか国光は他の皆と付き合いが長いから話しやすいけど。』

那「じゃあ、先輩の好みのタイプってどんな人なんですか??」

『そうだなぁ……どんな挫折が待ってたとしても諦めないで強い心を持った人がタイプかな。』

七「…」

捺「何か美和、誰かの事を言ってるみたいだね??」

『そう??気のせいだよ…さてと、私はそろそろ上がるよ。準備もあるからね。』

捺「なら私も…」

『良いよ、1人でできる。それに今回捺希達はお客様なんだから。ゆっくりして言って。』

そう言って美和は先に上がって行った。この時捺希は美和が一瞬だが泣き出しそうな表情をしたことにいち早く見抜いた。そして捺希は美和が以前言っていた初恋の人の事を考えていた。

捺「…（もしかして美和は、まだ…）」

暫くして捺希達は温泉から上がり、夕食を食べ、部屋でくつろいでいた。そんな時のこと…ドンドンと足音がし、1人の女の子が美和達の部屋に乱暴にあけた。

するとその女の子は美和を見ると満面の笑みを浮かべ美和に言った。

？「（パァ！！）美和～～！！会いたかった～～！！」

そう言うと女の子は美和に抱きつき、美和はバランスを崩し、倒れてしまった。

『アイタタタタ…』

捺「美和、大丈夫??」

『うん…何とか。それより、早くどいてよ、飛鳥。』

飛「ごめん、ごめん。嬉しくって…つい。」

那「先輩、知ってるんですか??この人。」

『うん…この子は白石飛鳥。私の従姉妹だよ。』

全「従姉妹!?」

飛「白石飛鳥です。大阪の四天宝寺中学の3年だよ。よろしくね。」

捺「今、白石って言ったよね??」

七「って事は…」

『そう、飛鳥は白石蔵ノ介の双子の妹。』

巴「双子なんですか??」

『うん。』

那「全然似て無〜い。」

飛「どっちかって言うと美和は蔵に似てるよね??」

『そうだね。まぁ、蔵のような腹黒にはなりたくないけど。』

飛「いえてる!!」

捺「自己紹介が遅れたね。私は柊捺希。よろしく。」

七「東雲七海だよ、よろしくね。」

那「小鷹那美です。よろしくお願いします!!」

巴「赤月巴です!!よろしくお願いします。」

飛「こちらこそよろしく!!」

『で、なんで飛鳥がここに居るの??』

飛「いや～また蔵とケンカしちゃってさ、休みの間だけお祖母ちゃんの家で泊めて貰ってるの。そしたらちょうど美和がここに居るって聞いてさ、早く会いたくてすっ飛んできたって訳。」

『成程ね…でもアンタたちまたケンカしたの??ホントよく懲りないね…』

飛「だって蔵が悪いんだもん!!この前なんか…」

『あぁ！！話はあとで聞くから今言わないで。』

飛「絶対だよ？？」

『分かったから…飛鳥も部屋に戻り？？どうせ今日はここで寝泊まりするんでしょ？？』

飛「へへ、あったり～！！じゃあ美和待ってるからね？？絶対来てよ？？」

そう言って飛鳥は出て行った。

『やっと帰ったか…』

捺「でも白石さんって賑やかで明るいね。」

『飛鳥でいいよ。あの子も呼ばれなれてるだろうし。』

那「大阪の四天宝寺って言ってましたね??」

巴「でも言葉が標準語でしたね。大阪の人はみんな関西弁だと思ってました。」

『飛鳥の場合はね。でもあの子キレると言葉遣いが関西弁になるのよ??』

七「器用だね。」

『まぁ、あとで部屋に行ってみるか。どうせまたくだらない喧嘩だとは思うけど。』

そして美和はひと段落終えて飛鳥の部屋を訪ねた。そうして美和は

何とか飛鳥を説得して部屋に戻って行った。

暫くして皆が寝静まった頃美和はそっと起き、レギュラーウェアに着替え、ラケットを持って出て行った。美和が出て行ったその後に七海も起きて美和の後を追っていた。

七海が美和を探して暫くしてようやく美和を見つけると美和はラケットのグリップに鉛の板を何枚も張った状態で一心不乱に素振りをしていた。七海は美和に気付かれない様に物陰に隠れていた。そして素振りを始めて１０００回経とうとしていた。

『９９８…９９９…１０００！！フゥ…』

美和は素振りを１０００回ふり終えたその時、美和の背後からボールが向かってきた。しかし美和は直前でラケットをいなし向かってきたボールの方向に視線を向けた。

美和が視線を向けた側には四天宝寺のレギュラーウェアを着た飛鳥が居た。

飛「深夜に練習するなんてお互い考えてる事は同じの様ね。」

『…そうね。』

飛「…美和、アンタホントはまだ幸村の事が好きなんじゃないの？？」

七「！！」

『……どうしてそう思うの？？』

飛「だって美和、今明らかに無理してるって顔してるもん。」

『…』

飛「何があったのかは聞かない。聞いても美和は言わないと思うしね。」

『…分かってるじゃん。』

飛「伊達に長年美和の従姉妹してないからね。それに…」

『それに??』

飛「今幸村は美和が必要だと思う。幸村の気持ちは今も変わらないと思うから。」

『…仮にそうだとしても、精市や弦、立海のレギュラー全員は欠けてるものがある。』

飛「欠けてるもの??」

『そう…テニスをする者にとって最も重要な事。』

七「…（テニスをする者にとって最も重要なこと…）」

『だけどそれは精市や立海のメンバーだけじゃない、全員に言えることだけどね。』

飛「私や蔵にも??」

『うん…そしてそれを自覚し解き放った時、あの扉は開かれる。』

飛「あの扉って何??」

『いずれわかるよ。私が青学に来たのはそれを見定めるため。恐らく精市は理解しないと思うから。

そんな精市と一緒に居ても無意味なだけだから。』

飛「美和…」

『それともう1つ、精市の邪魔はしたくないから…このリストバンドとペンダントにかけても…もう私の前で大切な人が傷付く姿は見たくない…例え誤解されようともね…』

七「!!（美和ちゃんは…最初からそのつもりで…）」

飛「でも、無理するのと無茶するのは違うよ??いつか…その蟠りが解けたら、一緒に居られる日が来ると思うよ??」

『…だといいんだけどね。』

飛「…ところで美和、アンタ怪我してたんじゃないの??」

『そうなんだけど…』

飛「あ～！！ひょっとしてもう完治してるとか！！」

七「！！（嘘…）」

『…たぶんね。もう全然違和感ないし。でも、芹香叔母さんに直接言われた訳じゃないからさ…』

飛「なるほどね…」

七「…（美和ちゃん…）」

七海が壁にもたれかかったその時、側に会った庭木が揺れ気付いた美和と飛鳥が七海の方を見た。

『誰？？』

飛「出てきなよ、居るのは分かってる。」

そして七海は観念したのか2人の前に出て来た。

『七海…もしかして今の話…』

七「うん…全部聞いてた…」

『…そっか。』

飛「…じゃあ美和、私そろそろ戻るから。」

『うん。』

そう言ってあるかは部屋に戻って行った。

七「…知らなかった。美和ちゃんと立海の幸村君がそんな関係だったなんて…」

『…黙っててゴメンね。私と精市の関係を知ってるのは国光と先生、兄さんに立海の副部長の弦一郎と時音だけだから。』

七「…どうして別れたの??」

『…別れたって言うより、引き離されたって言った方が良いのかな??昔兄さんは精市の事を嫌ってたから。

妹を誑かした男だと思ってね。』

七「…」

『…不二君を精市と重ねて見てたって言うのは本当。怖いくらいよ

く似てたから…そのせいで七海を不安にさせてしまった事には悪いと思ってる。ゴメンね。』

七「…もういいよ、美和ちゃんの気持ちは分かったから。私は1人で美和ちゃんにライバル意識を燃やしてたんだね。美和ちゃんは全然なんとも思ってないのに…」

『だけど誤解させてしまった事は事実だから…』

七「私の方こそゴメンね。美和ちゃんに酷いこと言ってしまって…」

『ううん、そんな事無いよ。ただ、この事は、皆には黙ってて欲しいの。これは私と精市の問題だから…迷惑かけたくないの。』

七「…分かった、約束する。」

『ありがとう。』

七「…美和ちゃん、また…前みたいに仲良くしてくれるかな??」

『もち!!』

そう言ってようやく2人は和解し、部屋へ戻って行った。次の日、急遽決まった六角中の練習試合をし、リョーマは次の準決勝に向けて闘志を燃やしたのだった。

完治

もうすぐ準決勝が始まる中、美和は再び病院に行き、検査の結果が出るのを待っていた。そしてようやく芹香の口から完治したことを聞いた。

『…叔母さん、どうなんですか??』

芹「先生と呼びなさい!!」

『良いじゃん、別に。』

芹「まぁ、それはともかく…正直此処まで回復が早いとは思わなかったよ。お疲れ様、完治したよ。」

『ホントですか!?』

芹「えぇ、でも次の試合は大事をとって出ない事。完治したからといってすぐ試合に出たんじゃ折角の苦労が水の泡だからね。それと前にも言ったけど、なるべく長時間のプレイは禁物だよ??」

『は〜い。』

芹「そう言えば、この間母さんの所に行ったそうね??元気だった??」

『はい…それとこの前お祖母ちゃんの所で飛鳥に会いました。』

芹「飛鳥に??」

『はい、飛鳥、相変わらず元気でしたよ??』

芹「…そう、元気そうでよかった。」

『…1度でもいいから飛鳥に会ってみませんか??飛鳥だってきっと会いたいって思ってるだろうし…』

芹「…それが出来れば苦労はしないよ。それに美和は他人の心配より自分の心配をしなさい。

知ってるはずでしょ??もう少ししたら幸村君の手術の日だって事くらい…」

『…』

芹「行ってあげたら??少なくとも幸村君は喜んでくれるはずよ??」

『…いえ、行きません。』

芹「…自分の気持ちに嘘をつけばつくほど辛いのは自分自身よ？？」

『…覚悟の上ですから。それに…』

芹「それに？？」

『精市はきっと戻ってきます。例え如何なる挫折が待ってたとしても…』

芹「…信じてるのね、彼を…」

『…はい。だから大丈夫です。』

芹「…そう、その信念と愛し合う心が繋がってさえすれば、またいつか一緒に居られる日が来るかもしれないわね。」

『…』

芹「何??」

『クス、やっぱり親子だなぁと思って。この前も飛鳥に同じこと言われました。』

芹「飛鳥が??」

『はい、でも…心強いです。ありがとうございます。』

そう言って美和は出て行った。次の日の朝、美和は竜崎に完治したことを告げ、次の試合は大事をとって出ない様にと言う事も言った。

竜「そうだろうな、妥当な選択だ。」

『すみません、心配をかけて…』

竜「全くだよ、その分、決勝では思う存分暴れておいで。」

『はい！！』

そうしてあっという間に放課後になり、美和は部員全員に左肘が完治したことを告げた。リョーマ達は美和が復帰することを大いに喜び、さらに過酷な練習に励んで行った。

そしていよいよ準決勝が始まろうとしていた。

準決勝～激闘の末～

数日後、いよいよ準決勝が行われ、青学はほぼ互角の試合をしながらも順当に勝っていき、ダブルスはストレート勝ちをしシングルス３を迎え、リョーマＶＳ剣太郎の試合が始まった。

剣太郎はその高いコントロールで次々とリョーマの得意技を返していき、リョーマを翻弄していった。

しかしリョーマも次第に剣太郎のテンポを崩し、試合は両者一歩も引かない白熱した試合となった。

そんな試合が続く中日没となり、試合は４－４で一時中断となり、明日再開することになった。

そして次の日、もうすぐ試合が再開する中いつまで経ってもリョーマが来る事は無く、海堂がアップに行こうとしたその時、近くの木の木陰でリョーマと健太郎がぐっすり寝ていた。

そうして試合は再開され、リョーマは低い打点からドライブＢを打ち、青学はついに関東大会決勝まで上り詰めた。

試合が終わった後美和と七海はもう1つの準決勝立海大ＶＳ不動峰の試合を見に行っていた。しかしその結果は悲惨なものだった。

ダブルスはすべて６－０で不動峰の惨敗、次のＳ３の切原ＶＳ橘戦は橘が右足首を損傷しながも1ゲーム返していったが、切原が足首を集中的に狙っていき６－１と惨敗した。

美和と七海はその試合をただ呆然と見ていた。

七「…こんなにも差がひらいてるなんて。」

『…っく!!（まさに王者立海。明らかにレベルが違う…）』

七「…勝てない、今のままじゃ…」

『…』

試合が終わった後橘は人体損傷で入院した事を聞いた。その後七海は帰り、美和は人気のない所でオカリナを吹いていた。

そこに時音が通りかかった。しかし美和を気付いて無いのか見向きもしなかった。そんな時、美和の携帯が鳴り、電話をとると飛鳥の声がした。

飛＜＜やっほ～！！美和、六角戦の決着はついた？？＞＞

『えぇ、おかげさまでストレート勝ち。』

飛＜＜なら、いよいよ決勝戦だね。勿論勝つ気満々なんでしょ？？＞＞

『そのつもりだけど、正直言って今のままじゃ勝つのは無理だろうね。』

飛＜＜確かに…今年の立海の強さは半端じゃない。今青学のメンバーで勝てる見込みがあるのは美和だけだろうしね。＞＞

『せめてリョーマがあの力に目覚めていれば勝機は見えていたかもしれないけど…』

飛＜＜いくらサムライ南次郎の息子だとしてもあの力は本来たどり着く事すら出来ないのよ??＞＞

『普通の人ならね、でももしかしたらリョーマの潜在能力が開花すればたどり着くかもしれないからね。』

飛＜＜その可能性は限りなく低いけどね。＞＞

『どっちにしろ、このままじゃ終わらせないよ。私だって譲れないものがあるから。』

飛＜＜決勝には私も蔵も見に行くつもりだよ。負けたら承知しないからね。＞＞

『誰に言ってるの?!負けないに決まってるじゃない。相手が立海大ならなおさらね。』

飛＜＜期待してるよ。＞＞

そう言って美和は電話を切りかえって行った。時音はいよいよ美和と決着をつける時がことに喜びを感じていた。

乾汁の恐怖…再び！！

それから数日後の週末、竜崎を除く青学レギュラー陣は決勝進出を祝して皆でビリヤードをすることになり、早速ビリヤード場に行った。

不「ゲームは9ボールのトーナメント戦、まず4人ずつに別れて4台のテーブルに別れる。そして各勝利者4人で決勝トーナメントを行い優勝者を決めるんだ。」

堀「でもどうせ優勝したって例の特製ドリンク飲まされるんじゃないのか??」

巴「あ～、それはあるかも…」

水「そ、そうなのかな??」

不「クス、心配しなくても大丈夫だよ。今回の優勝者には河村寿司の食べ放題チケットが進呈されるんだ。ね、タカさん。」

英「ほえ～、タカさん太っ腹～。」

桃「やる～！！」

タ「はは、いや～親父に頼んで特別に許可してもらったんだ。」

リ「ふ～ん。」

那「まともな優勝賞品で良かったね。」

巴「そうだね、前回は赤酢だったみたいだからね…」

不「ルールは公式戦でも使われているアメリカンルールに乾ルールをプラスしたものとする。」

桃「乾ルール？？」

乾「つまり、公式ルールに加えて1ゲームに3回ファールしたものは罰ゲームとしてこの赤酢ジョッキを飲んでもらう。」

すると美和達はかすを避けるように後ずさりした。

そうして各自くじ引きをし、1番テーブルは桃、海堂、リョーマ、巴、2番テーブルは捺希、タカさん、大石、英二、3番テーブルでは乾、不二、カツオ、那美、そして最後は美和、七海、堀尾にカチローとなった。

そしてミスは許されない状況下の中、次々と赤酢の犠牲者は増え2番テーブルのメンバーは全滅、堀尾も3回ファールして脱落していった。そしてカツオトカチローは乾が作ったラッキーポケットに球を入れた。

そんな中リョーマ、不二、美和の3人は見事予選トーナメントを突破し、決勝トーナメントを開始した。

そして全員1歩も引かない中リョーマは見事優勝し、優勝賞品を獲得した。その後に美和達はラッキーポケットの本当の意味を知り、カツオトカチローはまたしても乾汁の飲まされる羽目になったのだった。

不死鳥の意地

もう少しで決勝戦が始まる中美和達青学は打倒立海に向けて日々過酷な練習を続けていた。

そんな中、日没も過ぎ、ライトアップされたテニスコートで美和は一心不乱に練習をしていた。そこに不二がやってきて美和が必死に練習している姿度見ていた。

そして美和がサーブを打ったその時、ツイストサーブがジャイロ回転し、カーブしながら飛んで行った。

不「…今の技は。」

『!!不二君…どうして此処に…』

不「ちょっと用事を思い出してね…それより今の…」

『あぁ、さっきのサーブ??』

不「うん、まさか美和がそんな技を身につけてるとは思わなかったよ。」

『…ツイストサーブトルネード。新しい技だよ。』

不「頼もしい限りだよ。」

『…ここまで来たんだもの。立海大を倒して優勝する、国光の為にも。』

不「クス、そうだね。じゃあ帰ろうか??送って行くよ。」

『そうね、ちょっと待ってて。着替えてくるから。』

そう言って美和は部室に行き、不二と帰ったのだった。

そして数日後の昼休み、リョーマが美和のクラスに訪ねてきて寿司の食べ放題の事をを言った。

『え??タカさんが言ってたあれ今日までなの??』

リ「そうみたいっス。それに人数制限ないみたいだから先輩一緒に行かないッスか??」

『それは良いけど…』

すると美和は捺希達を見ていた。当然皆も行きたいわけで…

捺「私達も行きた～い！！」

英「おチビ、俺達も一口乗せろよ～。」

七「英二君…」

不「クス。」

『こう言ってる事だし、皆連れてってあげたら??』

リ「チェ。」

そして放課後になりリョーマは全員連れて行くことになり、お寿司をご馳走になった。暫くすると杏も来て捺希達は立海大の事を聞いていた。

捺「そう言えば、美和と七海も見に行ってたんだよね??準決勝。」

『…』

七「う…うん。」

桃「どうだったんすか??」

『…はっきり言って今の私達じゃ立海に勝つのはほぼ不可能よ。』

那「そんなに…」

乾「…終わってからみんなで見ようと思ったんだが。」

大「何のビデオだ??」

乾「立海大対不動峰の試合が写っている。」

杏「！！」

そしてさっそく捺希達は試合内容を見て余りの力の差に全員愕然としていた。

大「そう言えば竜崎先生が言っていた。立海大のレギュラー全員手塚クラスだって。」

英「レギュラー全員が手塚！？ほえ～、そりゃすごいじゃん。」

それからシングルス３の試合が始まり、橘でも立海大には歯がたたないほどその差は歴然だった。

暫くしてビデオが終わり、大石がタカさんに全員分のわさび寿司作るように言った。

全「え??わさび寿司!?」

タ杏「「??」」

大「決勝戦、わさび寿司喰って気合い入れるぞ!!皆!!」

不「クス、素人がわさび寿司を食べるのは辛いと思うけど??」

大「その位次の対戦相手は強いって事さ!!」

『そうね、強大って事は間違いないから。』

桃「そうっすね。」

英「そうだ、そうだ!!食おう、食おう!!」

捺「橘さん、大丈夫、仇は絶対取るから。」

杏「は…はい！！」

そしてタカさんはレギュラー全員分のわさび寿司を作った。

タ「ヘイ、お待ち！！」

大「よし皆、１個ずつ取ってくれ。」

全「…」

大「立海大、相手にとって不足無しだ！！手塚クラスの選手ばかりだろうが俺達は負けない！！

食って掛かるぞ！！」

全「おう！！」

暫くして美和達はそれぞれ自主練を始め、打倒立海大に向けて闘志を燃やすのだった。

決戦前夜

決戦の時は刻一刻と近付いていき、そしていよいよ前日まで近付いてきた。

竜「いよいよ明日は関東大会決勝戦だ。こう言う重要な局面に立ってこそ、気持ちがゆるみ思わぬ怪我をするものだ。良いかい??呉々も…」

するとギャラリーが集まり騒いでいた。

「キャ～～～!!」

「応援してます!!」

「頑張って下さい!!」

「キャ～～～～！！」

竜「今はミーティング中だ。応援は有り難いがちっとは静かにしてくれ。」

「は～い。」

英「今日は何時にもましてギャラリーが多くない？？」

大「そうだな。」

乾「今週の平均の人数よりざっと3．5倍だな。」

竜「う、ううん。つまり、各々万全の体調で決勝の日を迎えてほしい。特に上川！！呉々も無茶だけはするんじゃないよ？？」

『は～い。』

捺「そうだよ??美和はミクスドの要なんだから。」

竜「今日の午後の部活は休みにするが、各自家で大人しくしてるんだよ??」

全「はい!!」

そうして各自解散し、いつも通りの日々を過ごしていた。

暫くして昼休みになり、美和が屋上でくつろいでいたら、偶然不二と女子生徒の告白に遭遇した。

美和は気付かれない内に離れると、この間告白を受けた男子生徒に会い、もう1度告られた。

「上川…オレこの前お前に振られたけどヤッパリ諦めきれないんだ!!

頼む!!上川が誰を好きでも構わないから、オレと付き合ってくれないか??」

美和は暫く考えた後申し訳無さそうに言った。

『…ゴメンね??気持ちはすごく嬉しいけどやっぱりその気持ちには応えられないの。

ごめんなさい。』

「…」

『中途半端のままじゃ例え付き合っても辛いだけだと思うし、今は…テニスに集中したいから。』

「…そうか、上川らしいな。」

『そうかな??』

「あぁ、関東大会頑張れよ??応援してるから。」

『うん、ありがとう。』

そう言って去っていった。すると美和の携帯に手塚から電話が入り、美和は嬉しそうな顔をして話していた。

『もしもし??久し振りね。』

手《あぁ、美和も元気そうだな。》

『うん、腕もスッカリ完治したからね。そっちはどう??』

手《順調に回復してる。これも先生のお陰だな。》

『母さんの腕は確かだし、国光も頑張ってると思うよ??私も怪我をしてたからかな??体が想うように動かない気持ちは何となく分かるから。』

手《美和…すまない、俺はお前に迷惑をかけてばかりだな。》

『迷惑だなんて思ってないよ。私と貴方の付き合いじゃない、そのくらいは覚悟してるから。』

手《あぁ……いよいよ明日か…》

『…うん、いよいよ明日。明日で全てが決まる。』

手《…そうだな。》

『…国光、明日の決勝戦絶対に勝つから。そして優勝メダルを貴方に届けるから。約束する。』

手《あぁ、お前達なら出来る…美和。》

『何??』

手《お前が青学にいて本当に良かった。礼を言う。》

『国光……私も青学に来て良かった。掛け替えのない仲間に出会えたんだから。』

手《…そうか、変わったなお前。》

『だとしたらそれは国光達の影響かもね…それじゃあもう少ししした

ら授業が始まるから切るね？？』

手《あぁ、決勝戦頑張れ。》

『うん…ありがとう。』

そう言って美和は電話を切り、不二が居ると想われる方へチラッと見て去っていった。

不二は美和の覚悟を噛み締めた後教室に戻っていった。

暫くして美和達レギュラーは言われたとおり家で大人しくしていたが決戦を前にして居ても経っても居られずそれぞれレギュラーウェアに着替えて学校に来ていた。

美和が練習を始めようとしていると、捺希も到着したのか2人で打ち合っていた。

それから七海や後のメンバーも到着し、各自コートに入り夜遅くまで練習していた。

その光景を竜崎や校長は微笑ましい眼差しで見ていた。

力の差

次の日いよいよ関東大会の決勝戦が行われようとしたが生憎の雨でレギュラーは審査待ちをしていた。

そんな時、不動峰の神尾と杏がやってきた。

神「よぉ、元気ねぇな。」

全「??」

杏「は～い。」

英「あり??不動峰じゃん。」

桃「何だよ??俺達の応援に来たのか??」

神「バ～カ、偵察に来たんだよ。」

桃「偵察って俺達のか??」

神「立海大に決まってるだろ。準決勝で受けた屈辱は絶対に全国で晴らしてみせるさ。」

全「…」

杏「だから試合を録画してお兄ちゃんに見せてあげたかったんだけど、この分じゃ中止かな??」

不「橘の具合はどう??」

杏「それが…」

すると立海大の真田、柳、切原、時音が現れた。

美和達はいがみ合いながらも、言葉は交わすことはなく、去っていった。

しかし切原は美和達の所に来た。

切「久し振りだな、青学。不二周助。」

不「…」

切「手塚さんが居ない今、事実上アンタが青学のエースだ。少しは歯ごたえのある試合を期待していますよ。上川さんもね…」

桃「何だと?!?この!?」

『止めなさい!!』

桃「!?先輩…」

不「今日戦うかは知らないけど…良い試合にしよう。」

神杏「「…」」

切「…不動峰か、青学に敵討ちでも頼みにきたのか?!?」

神「まだ全国大会がある。

その時はこの前みたいにはいかねぇぞ!!」

切「期待してるぜ?? またハンパな試合されたんじゃこっちも物足りねぇからよ。」

杏「ハンパな試合ですって!!」

神「杏ちゃん!!」

切「試合中に怪我するってことはハンパな証拠だぜ。」

杏「アンタが怪我させたんでしょ!?

アンタのせいでお兄ちゃんは入院しちゃったんだから!!」

切「…青学だけじゃ無く、不動峰も部長がリタイアか…最も上川さんは復活したみたいだけどな。

橘さんも手塚さん、それに上川さんも日頃よっぽど柔な練習してた

んだな…」

不「『…』」

桃「何だと??言わせておけば…!!」

大「よせ!!桃!!」

切「試合中の怪我は本人の自己責任。鍛え方が足りないんだよ。

アンタとはまともな試合がしたいものですね。」

不「あぁ、同感だね。」

切「最も最後に勝のは俺達立海大ですけどね。」

不「どうかな??勝負はやってみないと分からないよ??」

そして両者の睨み合いが続く中、美和は切原に言った。

『切原って言ったわね。』

切「何スか??真田さんと雪村先輩はアンタの事認めてるみたいだけどホントの所、大したこと無いんじゃないんスか??」

『…確かに試合中の怪我は本人の自己責任かもしれない。

でもね、アンタが言う柔な練習はしてないって思ってる。私や国光、橘君も…

少なくとも私は切原のようなテニスを人を傷付ける道具にするような人には負けない。』

杏「上川さん…」

捺「美和…」

切「…ッケ、口だけじゃ何とでも言えますよ！！」

『口だけかどうかは試合をすれば分かるわよ。』

すると真田と時音が戻ってきた。

真「切原。」

切「あ、真田さんに雪村先輩。」

時「何をしているの??早く集合場所に来なさい。」

切「今行きますよ、ちょっと挨拶してたところです。」

桃「ちょい待ち、立海大さんよ…」

真時切「「「…」」」

桃「一言詫び入ってくれないスか??

アンタんとこの選手が散々言いたいことを言ったんだからよ。」

真「…何を言ったかは知らないし、その必要は無い。」

桃「何だと!?」

時「試合をすれば分かることよ、手塚君が居ないあなた達じゃ私達に勝てる可能性は無いわ。

最も彼が居ても結果は同じだけど。例え、青学に美和がいたとしてもね。」

『…』

時「…美和、腕は完治したみたいだから心配はしてないけど、前のような負けかたをしたらただじゃおかないわ。」

そう言って3人は去っていった。

暫くして竜崎が戻ってきて試合は1週間後に延期となった。

美和は学校に行くさいに竜崎に病院に行くと告げた。

竜「病院??完治したんじゃ無かったのかい??」

『完治はしましたけど念の為もう1回診て貰っておこうと思って。』

竜「…そうだな、用心に超したことは無いからな。
よし、許可しよう。」

『ありがとうございます。』

竜「なるべく早く戻れよ??」

『…分かりました。』

そう言って美和は病院に行き芹香の診察を受けていた。

芹「痛むところは??」

『ありません。』

芹「問題無いわね、念を押す様だけど無茶は禁物よ??」

『分かってます。』

芹「試合前にもう1回診ておきたいから1週間後また来て頂戴。」

『了解。』

芹「…幸村君の手術には来るの??」

『……いいえ、行きません。』

芹「…そう。」

『私が行ったところで何か変わる訳じゃ無いし、今精市の邪魔はしたくないんです。

それに私が精市に出来ることは彼が進むべき道を指し示す事ぐらいですから。例えその道が険しい道でも…』

芹「美和…」

『それじゃあ失礼します。』

そう言って美和は出て行った。病院を出ると時音からメールが入り、美和はあるコートに来ていた。

暫くして美和はコートに着くと真田とリョーマが試合をしていた。

必死に食らいつくリョーマだったが真田との差は歴然としていてリョーマは手も足も出ずに惨敗した。

その試合を見ていたのは美和だけでなく、阿久津もその試合を見ていた。

美和は試合が終わった後学校に行き、暫くして美和の行き先には時音がいた。

2人はお互い黙ったままだったが美和が時音に言った。

『私にあれを見せる為にわざわざ呼んだの??』

時「…一応美和には知らせておいた方が良いと思って。止めても良かったのよ??」

『……リョーマにとってはこれが1番良いんだと思う。立海大の強さを肌で感じるなら試合が1番手っ取り早いからね。』

時「あの子の潜在的才能は認めるよ。

でも私達に勝のはまだ早いわ。精市のためにも…」

『…だけど私達もただやられる訳には行かないわ。

国光との約束を果たすためにも…そのためなら何を犠牲にしても構わない。』

時「それは…青学の全国制覇の為なら、私や精市、弦一郎を敵に回すって事よ??」

『覚悟の上よ。精市には悪いけどね。』

時「美和…」

『じゃあ私行くね、竜崎先生に無理言って出て来たの。そろそろ戻らないと痺れ切らす頃だから。』

時「1週間後、アッサリ負けないでよね。

全国制覇を目指す位だもの、骨のある試合を期待してるわ。」

『言われなくても、そのつもり。

時音こそ覚悟してね??例え元ダブルスパートナーや幼なじみが居ても手加減しないから。』

時「その言葉を聞いて安心したよ……美和。」

『ん??』

時「美和の事だから、手術の日は行かないつもり何だろうけど、精市にとっての1番の特効薬は美和の笑顔なんだよ??

それを忘れないで。」

『…肝に銘じておくよ。』

そう言って美和は学校に行った。

そしてその日リョーマはいつまで経っても来ることはなかった。

次の日の部活、リョーマは昨日の真田の試合がショックだったのかリョーマは何をしても上の空だった。

その頃美和とタカさんが休憩していると、リョーマが来てとんでもない頼み事をしていた。それは…

タ「え??波動球を連続で??」

リ「はい、美和先輩、1ゲームでいいんで本気で相手して貰っても良いですか??」

『本気で??私は構わないけど…』

大「越前、なにを言っているんだ!?美和もやっと腕の怪我が治ったばかりだし、タカさんの波動球だって腕の負担がかかるって知っているだろ??」

『私は構わないよ??（恐らくリョーマはタカさんの波動球と私の技術やコントロールで弦一郎に見立てようとしてるんだろうね…）』

タ「俺も大丈夫だよ。決勝に響くような真似はしないからさ。」

そして先にタカさんが練習相手になり、美和は出来る限り真田のショットと重なるようにした。

暫くして部活が終了し、美和は再びリョーマと真田が試合をしたコートに来ていた。

するとリョーマと阿久津が試合をしており、その近くにはタカさんもいた。

美和は暫くの間試合を見ており、やがてリョーマは真田の敗戦のショックが吹っ切れたのか、いつもの輝きを取り戻した。

美和はタカさんのところに行き、こう言った。

『どうやら吹っ切れたみたいだね。』

タ「美和は知っていたんだ。」

『昨日時音から連絡があったの。今のリョーマには必要な事だったから…

私達が倒そうとしている相手がいかに強大かを。』

タ「…そうだな。」

『そしてリョーマが惨めな負け方をするとリョーマに負けた人達の立場がないって事を知る良い機会だったしね。』

すると美和は着ていたレギュラージャージを脱いだ。

『さてと…阿久津の次は私がリョーマの練習相手になるか。

なんたってあの子は時期青学の柱だからね。』

そう言うと美和は阿久津の入れ替わりにコートに入りリョーマの練習に付き合ったのだった。

強化合宿

それから暫くして美和達レギュラーはある所にいた。

タ「立海大か…」

海「フシュ～、気にいらねぇ。」

リ「このまま負けるわけには…」

『行かないね。不二君と捺希もそうでしょ？？』

捺「当然！！」

不「クス、そうだね。」

桃「相手にとって不足なし！！」

乾「だが今の俺達では立海大に勝つのは決して高い訳じゃない。」

那「だからと言って何もしない訳には行きませんね。」

巴「うん…」

暫くすると自転車に乗った竜崎と七海がやってきた。

そして大石は美和達を集めるとあることを言った。

大「みんなに話があるんだ。」

タ「何だい？？話って？？」

大「みんな知っての通り、決勝戦は1週間延期された。

しかし、だ1週間いつものの練習で終わらせて良いものだろうか…」

不「クス、なんだい??改まって??」

大「そこで我が青学テニス部は関東大会決勝、対立海大戦に向けて集中合宿を行う。」

全「合宿!?」

英「でも学校は??授業受けなくても良いの??」

竜「学校には手をうっている。決勝戦が終わったら全員補習授業を受けるって事でな。」

英「やっぱしね。」

捺「まぁそれが妥当だろうね。」

竜「みんな感謝しろよ??合宿所を提供してくれたのは東雲なんだからな。」

捺「ホント??七海。」

七「うん…私のお父さんが軽井沢に別荘を所有してるから、特別に許可して貰ったの。」

『ありがとう、七海。助かるよ。』

七「そんな…大したことしてないよ。」

竜「そんなこと無いぞ??現に合宿所が無ければ合宿自体出来ないからね。もっと自信持ちな。」

七「先生…はい。」

大「頑張ろうな。」

リ「ウィッス。」

那巴「「はい!!」」

不タ乾桃海「「「「「おう!!」」」」」

捺「『うん。』」

英「にゃ〜!!」

七「出発は明日の朝7時、駅前に集合だよ。」

竜「みんな遅れないようにするんだよ??」

全「はい!!」

そして次の日、美和達は合宿所がある軽井沢に来ていた。

中にはいると朋香と桜乃、そして七海がいた。

『七海、先に来てたんだ。でもどうして桜乃ちゃんと小坂田さんが??』

七「2人には合宿期間中家のお手伝いをお願いしてるの。」

桜朋「「よろしくお願いします。」」

捺「よろしくね。」

七「美和ちゃん達の部屋はこっちだよ。だだ…」

『だだ??』

七「大部屋を大石君達が使うから私達は別れて寝泊まりする事になるの。」

捺「大体、何人位に分けるの??」

七「7人居るから4人と3人に分けようかなって。」

『じゃあちょうど良いんじゃない??1年生と3年生しか居ないわけだし、1年組と3年組に分かれたら。

それとも巴達は他の分け方が良い??』

巴「いえ、それで良いです。」

那「同学年の方が話しやすいですし。」

捺「じゃあ決まりだね。」

そうして美和達は早速着替えて練習に入った。

美和達はボロボロになりながらも練習に励み気がつけばもうすぐ日没を迎えようとしていた。

暫くして練習が終わり美和達女子組が先にお風呂に入り、あがった後夕食の準備をしていた。

朋「先輩達練習の後なのにキツくありませんか??」

『確かに練習の後だからキツいけど女の本業をやらない訳には行かないでしょ??』

捺「そうそう、気持ちは有り難いけど私達そこまで神経図太く無いよ。」

そんな時、桜乃が震えながら野菜を切っているのを見て、美和は桜乃に言った。

『桜乃ちゃん、ひょっとして料理苦手なんじゃ無いの??』

桜「え??あ…」

『苦手なら苦手って先に言って??危ないから。』

そう言って美和は桜乃の代わりに野菜を切った。

それをみていた捺希、七海、桜乃、朋香、巴、那美、堀尾、カチロー、カツオは美和の手際の良さに絶句していた。

捺「すごい、美和。美和って何でも出来るね。」

『料理は昔から好きだったから。それに私がドイツに居た頃は毎日作ってたからね。ドイツでの暮らしは保々1人暮らしに近かったから。』

捺「なるほど…」

那「だからあんなにうまかったんですね。」

暫くして、夕飯のカレーが出来上がり、美和は隠し味としてコーヒーを入れ始めた。

捺「美和、何してるの??」

『見ての通りだよ。隠し味にコーヒーを入れるとコクが増すんだよ。』

そうしてリョーマ達もお風呂からあがり、夕飯に入った。

そして美和達が作ったカレーは大好評だった。

そんな日々が何日も続き、美和達は徐々にパワーアップして行った。

そして東京に帰る日が明日に迫ったある日、最終日のスペシャルメニューとして、テニス・バイアスロンをする事になった。

桃「テニス…」

海「バイアスロン??」

乾「バイアスロンと言えば、スキーをつけてライフル銃を背負い一定の距離を滑り、定められた射撃場で射撃を行うスキー競技だ。」

不「それをテニスでやろうって事なの??」

大「その通り。」

そう言って大石は不二に地図を渡した。

美和達もその地図にのぞき込んでいた。

英「何々??」

大「ラケットを持ってコースをダッシュ、途中3ヶ所のクリアポイントでパワー、コントロール、スピードを競うんだ。」

捺「成る程…」

英「へぇ、おもしろそうじゃん。」

乾「この山道でこれだけの距離を走るのはかなりしんどい。1位になるのは難しそうだ。」

リ「1位って事は当然ビリも居るってことっスよね??」

那「確かに…」

巴「まさか、乾先輩…」

桃「あっ!!」

英「まさか、また例の…」

すると不二以外のレギュラーは後ずさりした。

乾「何を期待してるのかな??」

リ大英タ桃海捺那巴「「「「「「「「「『してない、してない!!」」」」」」」」」』

乾「残念だが流石に山の中にまでは用意してない。」

リ大英タ桃海捺那巴「「「「「「「「「『はぁ〜。」」」」」」」」」』

大「いいか??みんな。ここがスタート&ａｍｐ;ゴール地点だ。

各ポイントに堀尾達が待っているので指示に従うこと。

各地点をクリアして１番最初に戻ってきた人が優勝だ。

全「はい。」

大「先生、では始めたいと思います。」

竜「じゃ、ちょっと行ってくるからね。後は頼んだよ、大石。」

大「はい、分かりました。」

『……ッフ。』

竜「よ～い！！」

パン！！

そうしてテニス・バイアスロンが始まり、竜崎はあるところに行っ

た。

暫くして不二、英二、乾、巴が第１クリアポイントに着いた。

そこで待っていたのはカチローだった。

カ「第１ポイントはスピード能力を競って貰います。」

乾「スピード…」

カ「準備が出来たら手を挙げて合図してください。

そしたら、僕がボールを落とします。

同時にダッシュしてボールを拾えたらクリアです。」

英「ＯＫ。楽勝、楽勝。オレ１番！！」

乾「落下地点まで約２５メートル。

３秒台前半で走らなければまず届かない。」

そうして４人供難無くクリアして次のポイントを目指した。

その頃、竜崎と七海は自主合宿をしている跡部の別荘地に来ていた。

一方美和達は凄まじい勢いで英二達を追い抜いて、先頭に立ち、リョーマ、不二、海堂、美和、捺希、那美の６人は第２クリアポイントに来ていた。

堀「第２ポイントはコントロールを競ってもらうッス。

サーブを打つ瞬間に俺が缶の色を言います。

見事缶の色にボールが当たったらクリアッス。」

『ＯＫ、分かった。初めて頂戴。』

そして堀尾は美和に黄色の缶を指名し、美和はいとも簡単に当てた。

捺「わぁ～お。」

那「流石美和先輩。コントロール抜群ですね。」

堀「美和先輩クリア。」

『じゃね、バイバーイ。』

そう言って美和は先に行き、残りのメンバーも尽かさず追い掛けた。

その頃跡部の別荘地ではレギュラーが食後のデザートを堪能していた。

宍「しかし、朝から豪勢だな。」

跡「オードプルとデザートが出ないのは食事とは言えねぇからな。

なぁ樺地。」

樺「ウス。」

すると執事の1人が跡部の所にきた。

「景吾坊ちゃま、お客様がお見えになりました。」

跡「…来たか。」

そんな時、美和達のスペシャルメニューは大詰めを迎え、レギュラ

ー全員最後のチェックポイントに居た。

すると美和達の前方には辺り一面川だった。

そのすぐそばにカツオが居た。

水「えっと、まずみなさんのラケットのフェイスにカバーをつけて貰います。

そして僕が川からテニスボールを流します。

皆さんは川の中から側にある籠の中に打ち返して下さい。」

桃「何だよ、川に入るのか??」

英「流しそうめんのテニス版だにゃ。」

乾「フェイスにカバーをつけたパワー競技だな。」

そして美和達は楽勝とは行かないものの全員クリアし、テニス・バイアスロンは全員同着で終わった。

美和達は暫く休憩した後合宿所に戻っていった。

合宿所に戻るとレギュラーが待っていたのは氷帝正レギュラーが居た。

竜「まだ特訓は終わりじゃないよ。」

全「え??」

竜「これより、氷帝学園との練習試合を行う。」

桃「氷帝との練習試合??」

竜「そう言うことだ。」

英「ヒェ～、だけどびっくりだにゃ～。
こんな所に氷帝がいるなんて。」

竜「実はこの近くに跡部君の別荘があってね、そこで氷帝テニス部が自主練習をしていると聞いたもんで、それならうちと手合わせ願えないかと密かに交渉して追ったんだよ。」

乾「そうだったのか。」

タ「すごい、個人の別荘か。」

跡「お前ら、手塚が抜けて何してるかと思えば、こんな所でお遊びか??」

桃「何!?」

竜「止めんか桃。」

桃「でもバアさん…」

『桃の気持ちも分からなく無いよ。でも熱くなったら向こうの思うつぼだよ??』

桃「…は～い。」

竜「それじゃあ大石、後は頼んだよ。」

大「はい、ではシングルス3試合を同時に行う。

試合はタイブレーク無しの1セットマッチ。6ー6になったら引き分け。サーブ権は氷帝側からスタートだ。」

跡「じゃ、早速始めようか。」

すると跡部はテーブルセットをセッティングし、美和達に言った。

跡「とにかく、今ここでうちに負けてるようじゃ、お前ら立海大には到底勝てないぜ??なぁ、樺地」

樺「ウス。」

跡「まぁ、負けたとしても上川は他に行く宛があるだろうがな。

それじゃ、俺は暫く拝見させて貰うぜ。」

『…私、転校する気なんてないから。』

桃「アイツ、何様のつもりなんだ??」

『俺様何じゃないの??景吾は昔からあんな感じだから。』

大「じゃ青学のみんなは此処から1本引いてくれ。

そこに今回の対戦相手が書いてある。

ただし赤月と小鷹は男子相手は少しキツいだろうから、事前に対戦相手を決めている。」

那巴「「はい。」」

英「ふ~ん、それじゃあまずオレから。」

『捺希、私先にしても良い??』

捺「良いけど、美和誰かやりたい相手が居るの??」

『特には居ないけど、どうせやるなら忍足君とやってみたいと思ってね。』

忍「自分、それはあらへんやろ??」

『面白そうじゃない。』

そう言って英二と美和はくじを引き、英二は樺地、美和は鳳を引いた。

英「え〜っと、か、ば、じ。え??樺地って…」

そう言う英二は恐る恐る樺地を見た。

『英二…頑張れ。私は…』

捺「美和は誰？？」

『クス、復帰戦にはちょうど良いかもね。私も2年生だよ。相手は鳳君。』

鳳「…よろしくお願いします。」

そして次々とくじを引いていき、乾ＶＳ日吉、不二ＶＳ忍足、巴ＶＳ鳥取、大石ＶＳ宍戸、桃ＶＳ向日、小鷹ＶＳ若菜、タカさんＶＳ鳳、海堂ＶＳジロー、捺希ＶＳ、宍戸、そしてリョーマＶＳ跡部の対戦相手が決まった。

それぞれ接戦する中美和は鳳のスカッドサーブを目の当たりにし、窮地に美和は表情を崩さなかった。

若「ゲーム氷帝鳳、１ー０。チェンジコート。」

『…うん、間近で見ると一段と迫力あるね。それに1回戦の時よりも更に磨きがかかってる。』

鳳「ありがとうございます。」

『（でも私にはもうそのサーブは通用しないよ。次はキッチリ返すから。）』

若「…フ。（恐らくもう上川さんにはスカッドサーブは通用しないね。）」

そして美和のサービスゲームになり、美和はツイストサーブを打った。

『…そっちがスカッドならコッチはこれよ！！』

美和が打ったツイストサーブはそのまま鳳の顔面に向かって行った。

鳳は避けるのが精一杯で美和もまたノータッチエースでサービスキープした。

その後も鳳はスカッドサーブを打ち続けたが美和には通用せず、試合は6－1で美和の圧勝だった。

若「ゲームアンドマッチ、青学上川、6－1。」

鳳「はぁ、はぁ…完敗です。やっぱり上川さんは強いですね。」

『そんな事ないよ?? シングルスだから勝てたものの、ダブルスだったら負けてたかも知れないし。』

鳳「今度手合わせするときはダブルスでやってみたいですね。」

『クス、そうね。』

鳳「決勝、頑張って下さい。応援してます。」

『ありがとう。』

それからの試合は激戦の中青学は6勝3敗2引き分け、1ノーゲームで見事勝利した。

そこでリョーマは僅かだが潜在能力を開花させ、美和はその光景に驚きを隠せずにいた。

暫くして氷帝が帰る前に美和は跡部の所に行った。

『ありがとう、リョーマの練習相手になってくれて。』

跡「アーン??お前知ってたのか??」

『国光から聞いてた。だからお礼を言ってるの。

私じゃリョーマの潜在能力を目覚めさせる事は多分出来ない。』

すると七海、捺希がやってきたが2人は気付いて無いらしく、2人は近くの茂みに隠れていた。

跡「フン、そう思うならさっさと俺の女になってしまえ。」

『それとこれは話が別でしょ??

…景吾の事は嫌いじゃない。いざという時頼りになるって思ってる。

だけど私景吾をそう言う対象で見てないから…ゴメンね。』

跡「これで2度目だな。お前が俺様を振るのは。」

『…そうね。』

跡「俺達が練習相手になったんだから勝たなきゃタダじゃおかねぇぞ??」

『…えぇ、約束する。』

すると跡部は美和を抱きしめこう言った。

跡「勝てよ、決勝戦。他の奴はどうでもいいが俺はお前の味方だ。」

『…ありがとう。』

跡部は美和を離すと美和と一緒に捺希達が隠れている茂みに視線を向けた。

跡「いつまで隠れているつもりだ??」

『とっくにバレてるよ。諦めて出てきなよ。七海、捺希。』

捺「気付いてたの??」

『えぇ、残念ながら。』

跡「盗み聞きとは感心しないぜ??大方美和を呼びに来たんだろうがな。」

捺「ねぇ、前から気になってたんだけど、なんで2人は名前で呼び合ってるの??」

『あれ??言ってなかったっけ??

実は私達、元許嫁同士だったの。』

七捺「「許嫁!??」」

『うん、でも私そんな政略結婚とか興味ないから白紙に戻ったって訳。』

跡「コイツ、意外と我が儘な所があるからな。」

『そういう景吾だっていっつも強引じゃない。人のこと言えないよ。』

捺「あ、それは言えてる！！」

跡「何!?」

七「まぁ2人とも落ち着いて。そんな事より跡部君、そろそろ出るって言ってたよ??」

跡「あぁ、そうか。悪いな。

とにかく、決勝戦負けたら承知しねえからな。」

そう言って、跡部は去っていった。

そして次の日、波乱の強化合宿は終了し、美和達は東京に戻っていった。

次の日、美和達が東京につくとそれと同時に各自解散し、美和は病院に行こうとした。

その時、捺希が美和を呼び止めた。

捺「美和、帰りにどっか寄って帰らない??」

『あ、ゴメン。これから病院に行くから。』

捺「え??病院!??」

七「美和ちゃん、まだ腕が完治してないの??」

『そうじゃないよ、試合前にもう1回診て貰うだけだから。

大丈夫だとは思うけど用心にこしたことは無いからね。』

捺「なんだ、そうだったの。

じゃあ私も病院に行く。七海も来るよね??」

七「私…これから決勝のオーダーを決めないといけないから。」

『じゃあ待ってるよ。終わったら病院に来てくれる??』

七「分かった。ついたら連絡するね。」

そう言って美和と捺希は病院に向かった。

しばらくして2人は病院につき、美和は芹香の診察を受けていた。

芹「大丈夫みたいね、間に合うかどうか正直心配だったけど。」

『先生は口は悪いけど外科医としての腕は優秀ですから。』

芹「アンタ…私のこと何だと思ってるの??」

『そのまんまの意味ですよ。

でも感謝してます。私の無理な我が儘聞いてくれて。』

芹「美和…」

『それに、精市の事も教えてくれてありがとうございます。

そのお陰で前に進むことが出来ましたから。

例え精市に恨まれようとも変えるつもりはありません。』

芹「…そう。なら、もうなにも言わないわ。

美和のやりたいようにやりなさい。」

『はい。』

そして美和は出て行き、捺希の所に行った。

捺希の所に行くと、七海から連絡が入り、屋上に居ることが分かった。

暫くして2人は屋上に行くとそこには幸村、真田、そして時音がいた。

長い沈黙の後捺希は七海を呼び、美和がようやく口を開いた。

『待たせちゃってゴメンね。』

七「そんなに待ってないよ。それよりどうだった??」

捺「問題ないってさ。」

七「良かった～。」

幸「腕は完全に完治したようだね。」

『…お陰様でね。』

時「美和、この短期間でどれほど力を増したかは知らないけど生半可な試合だけはしないでよね。」

『心配しなくても大丈夫よ。勝って優勝するのは私達だから。』

捺「そう言うこと。」

七「それじゃあね。幸村君、手術頑張って。」

そして帰り際に美和は捺希と七海に分からないようにドイツ語であることを言った。それは…

『Ｇｏｏｄ　ｌｕｃｋ，　Ｃｈｉｒｕｒｇｉｅ．　'Ｌｌ　Ｗａｉｔ．．．（手術、頑張って。待ってるから…）』

幸「！！Ｏｈ，　ｋ　ｍｐｆｅ　ｉｃｈ．Ｄａｎｋｅ．（あぁ、頑張るよ。ありがとう。）」

幸村も美和と同じ様にドイツ語で答えると美和は一瞬だが笑顔を見せ去っていった。

美和達が去った後、捺希はこんな事を聞いてきた。

捺「ねぇ、美和。あの幸村って人と知り合いなの??彼、妙に美和に親しげだったじゃない。」

『…彼は幸村精市。立海大の部長だよ。』

捺「え??立海大の部長!?マジ??」

『うん、ついでに言うと私の元彼。』

捺「ウソ〜!!」

七「ホントだよ??幸村君も言ってたから。」

捺「でも意外。美和の初恋の人って手塚みたいなタイプだと思ってた。」

『よく言われるよ。でも今彼はそれどころじゃ無いからね。』

捺「どういうこと??」

七「幸村君、今難病にかかってて明日その病気の手術があるんだって。

心配だよね…早く治ると良いんだけど。」

捺「ところでさ、美和さっきその部長さんに何て言ったの??」

七「英語じゃ無かったよね??」

『まぁね、ドイツ語で言ったから。』

捺「ねぇ、ねぇ、何て言ったの??ヤッパリラブコール??」

『クス、秘密だよ。』

そう言いながら捺希は美和が言ったことを聞こうとするが美和は肝心な所ではぐらかすのだった。

暫くして美和は2人と別れた後ストリートテニス場に行った。

するとコートに居たのは時音だった。

時「来ると思ってたよ。」

『時音が呼び出したんでしょ??

それで大事な話って何??

あの時言わなかったくらいだから精市達には聞かせられないんでしょ??』

時「流石美和、全くその通りだよ。場合によっては裏切りになるから。」

『そんな危険をおかしてまで私に頼みたいことって??』

時「実はもしミクスドシングルスが回ってくるなら無我の境地を使ってほしいの。」

『無我の境地を??何でまた…』

時「恐らく手塚君が居ない今無我の境地をコントロール出来るのは美和だけだから。」

『…確かにね。』

時「今の赤也には必要だと思うから。」

『…リョーマが次期青学の柱である様に切原もまた来年の立海を背負うってことか。』

そして美和は暫く考えた後時音に言った。

『いいよ…特別にやってあげる。

私も考えてたことだしね。』

時「ホントに??」

『約束する。ついでに精市達にはこのことは黙っておくよ。』

時「助かるわ。」

『それじゃあまた明日。』

そう言って美和は帰って行った。

青学ＶＳ立海大

次の日、いよいよ関東大会決勝が始まった。

試合は青学が必死に食らいつくも立海は実力を見せ付け、ダブルスはすべて落としてしまい、立海は早くも優勝に王手をかけた。

そんな中シングルス３の乾ＶＳ柳の試合が始まった。

両者激しい攻防戦が続き、白熱した試合が繰り広げていた。

そして試合はタイブレークまで続き、両者互角の勝負を繰り広げていた。

そうして暫くタイブレークが続いたが、乾は見事勝利した。

そして立海大と青学の応援コールが続く中、いよいよ美和の試合が始まろうとしていた。

「上川先輩！！頑張って下さい！！」

「立海大に先輩の強さを見せ付けてやってください！！」

『任せとき！！』

竜「美和、久々の公式戦だ。思いっ切り暴れといで。」

『…はい！！』

そしてミクスドシングルスの試合が始まった。

審「ワンセットマッチ、青学上川、トゥサーブ。」

『（まずは様子見って所かな）ッハ！！』

それから暫くラリーが続き、美和は2ゲーム連取された。

審「ゲーム立海大、2ー0。チェンジコート。」

切「ヘン、やっぱりな。でかい口叩いた割には大したこと無いッスね。」

時「そうじゃないわ。今の2ゲームは…」

真「ワザと落とした。相手の力量を見るために。」

柳「次ゲームで上川がツイスト関連のサーブを打つ確率８８％だ。」

時「油断は禁物よ。」

「分かってる。」

一方青学側は…

『ふぅ～。』

竜「どうだい??久しぶりの試合は??

立海大は強いだろう??」

『そうですね、彼女もジュニア選抜の経験者みたいですし。』

竜「お前さんもドイツではジュニア選抜の経験があるじゃないか。」

『もう3年も前の話ですよ。』

すると大阪から駆け付けた飛鳥と白石がやってきた。

そして飛鳥は美和に向かって怒声に似た声を発していた。

飛「こら～!!美和、しっかりしろ～!!」

全「??」

『??飛鳥!??』

時「…（あの子は確か美和の従姉妹で四天宝寺の…）」

生「珍しいてすね、四天宝寺の方も見にいらっしゃるとは…」

時「美和とあの子は従姉妹同士だからね。」

柳「白石飛鳥。身長１５６センチ、体重４６キロ。痩せ型、大阪四天宝寺のエースレギュラーで部長の白石の双子の妹だ。」

切「柳先輩そんな事も知ってるんスね。」

その頃、美和と飛鳥は…

飛「美和～、負けたら承知しないからね～！！」

すると今度は白石もやってきた。

白「美和、ちゃんとな！！美和の実力はそんもんじゃあらへんやろ？？」

『クス、全くあの２人は…』

竜「エンジン入ったかい？？」

『はい、お陰様で。』

すると美和は観客の前で勝利宣言した。

『確かに彼女はジュニア選抜の経験があって正直強いです。

でも私に勝つのはまだ早いですよ。

ここからは私も本気で行きますから。』

すると美和は両腕に付けているリストバンドとパワーアンクルを外し、左手首にｎｅｖｅｒ　ｇｉｖｅ　ｕｐと刺繍されたリストバンドを付け、ペアネックレスをユニフォームの襟周りに広げた。

七「あのネックレスって…」

捺「うん、立海大の部長も同じものをつけてたね。」

七「…（ってことは美和ちゃんはまだ幸村君の事が…）」

巴「にしても先輩凄い鉛ですね。全部でどれくらいありますか??」

『全部で8キロ弱かな??両腕に4キロ、両足に4キロ弱あるから。』

那「スゴいですね…」

『そう??普通じゃないかな??』

そう言うと美和はコートに入っていった。

そしてラケットを右に持ち替え、新しく会得したツイストサーブトルネードを打った。

相手はジャイロ回転するツイストに対処しきれず、顔をそらしてしまった。

審「15ー0。」

「何だ今の…」

「曲がったよな??」

海「何だ??今のサーブは…」

タ「ツイストみたいだったけど…」

英「曲がったにゃ〜??」

大「美和のやつ、いつの間にあんなサーブを…」

不「あれはツイストサーブトルネード。美和の新しいサーブだよ。」

捺「周助知ってたの??」

不「うん、僕も1度だけしか見たことが無かったからね。」

一方立海側は…

時「やっぱりね、美和がただ怪我を治るのを待ってるだけとは思わなかった。」

仁「アイツ、意外と策士ナリ。」

柳「またデータの取り直しだな。」

それから試合は一変し流れは完全に青学モードだった。

美和はその後1ゲームも落とすことはなく、相手を圧倒していった。

審「ゲーム青学、4ー2。チェンジコート。」

朋「スゴい!!上川先輩!!」

『クス、ありがとう。』

そう言う美和はあることを考えていた。そして美和はリョーマにこんな事を言った。

『リョーマ、無我の境地って知ってる??』

時「!!(いよいよ出すのね…美和。)」

リ「何スか??それ。」

『無我の境地…それは己の限界を超えた者のみが辿り着く事が出来る領域。

大抵の人はその域にすら辿り着けないけど、反対にその領域をコントロール出来る人も居るってこと。

リョーマはその領域には辿り着いて無いけどね。」

リ「先輩はコントロール出来るんスか??」

『モチ!!出なかったら最初から言わないよ。』

七「でもどうして今まで使わなかったの??」

『ずっと封印してたから。』

捺「封印…」

『私は無我の境地を含め、５つの奥義を封印してるの。

次世代の柱を覚醒させるために…』

そして美和はコートに入り無我の境地を発動すると同時に英語であることを言った。

『Ｂｅｃａｕｓｅ ｍｙ ｈｅａｒｔ ｉｓ ａｌｒｅａｄｙ ｅｍｐｔｙ, ｉｓ ｅｍｐｔｙ; ｎｏｔｈｉｎｇ.（我が心すでに空なり、空なるが故に無。）』

切「時音先輩、今なんて言ったんスか??」

時「我が心すでに空なり、空なるが故に無…つまりあれを発動してる時は無心って事よ。

赤也、よく見ておくことね。」

そんな事を言っていると美和は閃光のオーラを纏い次々とプレイスタイルを変え翻弄していった。

そんな時、リョーマ達は美和の圧倒的な強さを目の当たりにし、絶句していた。

その時、飛鳥がリョーマに言った。

飛「越前、美和はアンタ達のために無我の境地を発動してるの。本来なら、決して使うことはないから。」

リ「どういう事スか??」

飛「美和には天性のコピー能力が身に付いているから無我の境地を使わなくてもコピー能力でカバー出来るの。

でもそれを使わないのは越前や切原にその領域に辿り着いて欲しいから。

アンタ達にはその素質は十分にあるからね。」

そして相手は美和に手も足も出ないまま美和の圧勝で終わった。

審「ゲームアンドマッチ、ウォンバイ青学上川。６ー２。」

試合終了時に美和はオーラを解き、握手を交わした。

「上川さん、強いね。ここまで強いとは思わなかったよ。流石真田君と雪村さんが一目置いてる事はあるよ。」

『そんな事無いよ。』

「でも全国ではこうはいかないよ。全国大会で会いましょう。」

『楽しみにしてるわ。』

そして美和がリョーマ達の所に行こうとすると、真田が美和に話しかけてきた。

真「強くなったな、お前。」

『何時までも怪我人扱いされちゃあ困るからね。』

真「お前が我が立海に来なくて残念だ。来ていれば全国3連覇は確実なもの立ったのにな。」

『…例え頼まれてたとしても私は立海には来ないわ。』

時「…」

真「何!?」

『弦達はテニスをする者にとって最も重要な事を忘れているわ。』

時「最も重要な事??」

『そう。ねぇ、弦。あなたは何のためにテニスをしてるの??』

真「何のためにだと??

それは勿論…」

『勝つため??全国3連覇を成し遂げる為??

そんな事の為にテニスをやってるの??』

真「そんな事の為にだと！？
いくらお前でも言って良いことと悪い事があるぞ！！」

『私にとってはたかがしれてるよ。
勝利の為には他人も傷付けて良いって言うの？？
私はそんなの認めない…絶対に…』

そう言うと美和は切原を思いっ切り睨んだ。その頃青学側は…

捺「美和、珍しく怒ってるね。」

七「あんな美和ちゃん…始めてみた。」

飛「美和は怒ると私達でも手がつけられないからね。」

白「美和はテニスでぇ人を傷付ける奴がいっちゃんすかんやからな。」

不「でも美和の気持ちはよく分かるよ。」

七「うん…」

『全国3連覇の為だけに他人まで傷つけて良いテニスをするなら、私は全力で3連覇を阻んでみせる。』

真「…そのメンバーの中に幸村がおってもか??」

『…そうよ。そのために私はドイツから帰国してきたの。』

そう言うと美和は去って行った。

暫くして桃があることを聞いた。

桃「所で美和先輩、幸村って誰ッスか??」

『え??それは…』

乾「幸村は立海大の部長だよ。」

那「先輩、その人と知り合い何ですか??」

『うん、まぁね。』

捺「まぁ良いじゃない。美和と幸村君がどんな関係にしろ、美和は立海大ではなく私達の味方で居てくれてるんだからさ。」

タ「そうだね。」

不「…」

そんな時、紫義がやってきた。

紫「ナイスゲームだったぞ??美和。」

『…兄さんは来なくて良かったわよ??』

紫「な!?お前なぁ…」

その時、不二の姉由美子が紫義に助け船を出した。

由「美和ちゃん、そんな事言わないの。たった1人のお兄さんじゃ

ない。」

『!?由美子さん…』

不「由美子姉さん。」

不「『え??」』

2人はお互いの顔を見合わせた後驚きのあまり絶句していた。

不「ひょっとして…」

『姉弟!?』

紫「美和、知らなかったのか??」

『知らないわよ！！似てるなとは思ってたけど…こんな身近に居たなんて…』

不「なんだ、姉さんが言ってた人って美和の事だったんだね。」

由「美和ちゃん、ゴメンね??ちゃんと紹介すれば良かったわね。」

『もう良いですよ。分かりましたから。』

由「でも良い試合だったよ。流石周助が認めるだけの事はあるわ。」

不「姉さん！！」

『不二君が…そんな事を…』

そして暫くするとシングルス2の試合が始まろうとしていた。

不二がコートに入る前に美和は不二にあることを言った。

『不二君…気をつけて…』

不「クス、心配しなくても大丈夫だよ。」

そう言って不二はコートに入っていった。だが美和の不安は消えることは無かった。

『だと良いんだけど…』

七「やっぱり、心配だよね。橘君みたいになるんじゃ無いかって…」

『…うん。』

それから試合は不二がリードしていき、不二は切原を翻弄していった。

しかし切原は隙を付いて、不二の右膝を集中的に狙い、不二は激痛に耐えながらも試合を続行していた。

そんな時、切原はナックルサーブという顔面を狙うサーブを打ち、不二の体はボロボロだった。

不二はそんな中トリプルカウンターで応戦していたが切原はワザと膝に負担をかけるプレーをし、遂に逆転を許してしまった。

そんな時、入院しているはずの橘がやってきて不二に渇を入れた。

だが切原はそのやり取りが気に入らなかったのか橘に向かってナックルサーブを向けた。

不二はそんな切原に完全に怒り、容赦ない攻撃を次々と出していき、切原はそんな不二に恐怖心を抱いていた。

そして不二は切原を圧倒し、勝利を収めた。

暫くすると真田と竜崎、大石の3人は大会本部に行き、真田、時音を除くレギュラー全員は幸村のお見舞いに行った。

そんな中、シングルス1の試合が始まり、真田はリョーマに圧倒的力の差を見せ付けた。

リョーマは必死に食らいつき、合宿で開花したサイクロンスマッシュを打ち真田を追い上げていった。

だが真田は徐々にリョーマを追い詰め、マッチポイントとなったその時…

『!!あれは…』

時「辿り着いたって言うの??」

リョーマは遂に無我の境地に辿り着き、真田を翻弄していった。

七「あれって…」

捺「さっき美和がやった…」

『無我の境地…まさかここで出るとはね…』

そしてリョーマは英語であることを言った。

リ「Ｙｏｕ　ｓｔｉｌｌ　ｈａｖｅ　ｌｏｔｓ　ｍｏｒｅ　ｔｏ　ｗｏｒｋ　ｏｎ．（まだまだだね）」

『クス、まだまだだね…か。リョーマらしいね。』

リョーマは無我を持続させたまま次のポイントを奪うと再び英語であることを言った。

リ「Ｎｏｂｏｄｙ　ｂｅａｔｓ　ｍｅ　ｉｎ　ｔｅｎｎｉｓ．（テニスでは誰にも負けたくない。）」

時「テニスでは誰にも負けたくない…全く恐ろしいルーキーね。」

ラリーが続く中、巴がこんな事を言った。

巴「美和先輩、無我の境地って言ってみれば保々無敵じゃ無いんですか??

色んなプレイスタイルに変わるわけだし…」

『良いとこに気がついたね、巴。確かに無我の境地は色んなプレイスタイルに変わるし無敵に近いかもしれない。

だけど普通の人には決して出来ないことをやってのけるからその副作用として体力の消耗が普通より何倍も激しいの。

言ってみれば無我の境地は諸刃の剣って所ね。』

捺「成る程、究極奥義故のリスクか…」

『最も私が使ってもあんまり意味ないからね。』

そしてリョーマは遂に真田を追い詰め、青学は王者立海を倒し、関東大会優勝を決めた。

試合が終わると真田と時音がやってきた。

真「良い試合だった。完敗だ。」

大「こちらこそ。」

真「だが全国大会ではこうはいかん。その時は幸村が居る。」

大「うちにも手塚が居る。」

時「今回は直接対決は無かったけど、全国大会では決着を付けましょう。美和。」

『そうね、楽しみにしてるわ。』

すると時音は小声で美和にお礼を言った。

時「それと、ありがとう。」

『！！クス…』

そして2人は次はリョーマの所に行き、握手を求めた。

リ「良いんスか??行かなくて。」

真「む…」

『手術中でしょ??』

真「美和、本当に来なくて良いのか??」

『良いの、けじめだから。』

真「…そうか。」

時「後で必ず連絡する。」

『待ってる。』

真「越前リョーマ、全国で会おう。」

そう言って2人はダッシュで病院に行った。

暫くして時音から連絡が入り、手術は無事成功したことが分かった。

この時誰1人気付くことは無かった。幸村の身に大変な事が起きていたことに…

ドイツでの再会

関東大会が終わって暫くして夏休みが始まった。
美和達は夏休みを利用してドイツに居る手塚に会いに行く事になり、
美和は久々に見るドイツの光景を堪能していた。

暫くすると美奈子がやってきてそれぞれ観光する者やお喋りする者
人それぞれだった。

数分後、手塚が療養しているスポーツ施設に着き手塚が歓迎した。
その後手塚は施設内を案内し、美和達は興味津々で見ていた。

そして一通り見て回るとドイツの観光をする事になった。

美「竜崎先生、お疲れでしょう??」

竜「あぁ、成田から11時間長旅だったからね。」

手「先生は休んでいて下さい。みんなの引率は俺がしますから。
美和も来るか??」

『私はいいよ、住み慣れてるからね。
久しぶりにテニススクールにでも行って暇を潰してる。』

捺「じゃあ私も美和と一緒に行くよ。」

七「私も。」

『それは良いけど…』

捺「美和の方がこの町には詳しいだろうし手塚1人でこれだけの人数の引率は大変でしょ??」

那「じゃあ私達も…」

『小鷹さん達はいいよ。私達3人で行動するから。それにみんなと観光したいでしょ??』

七「そういう事だから。」

『私達は別行動するね。何かあったら連絡するね。』

手「あぁ、頼む。」

そう言って美和達はそれぞれ好きなように過ごした。

暫くして手塚から連絡が入り、リョーマ、巴、桃、海堂、乾が迷子になったことを聞き、手当たり次第に探していた。

捺「全く、こんな時に迷子にならなくても良いのにね。」

『仕方ないよ、みんなドイツは初めてなんだから。』

七「もうすぐ夕方になるよ??

もしかしたらみんなクリストフ通りに居るのかも知れない。」

『その可能性はあるかもしれない。

とりあえずクリストフ通りに行ってみよう。』

そして3人はクリストフ通りに行き、近くにあるテニスコートに行くと、海堂を除くレギュラーがおり、リョーマはある人と試合をしていた。

美和はその人に見覚えがあった。

『あの人は…ハンナ!?』

七「美和ちゃん知ってるの??」

『うん、母さんの紹介で知り合ったんだけど、あの人凄く強いよ。なんたって…』

不「プロだからでしょ??」

『知ってたの??』

不「手塚から聞いたんだけどね。」

『成る程…でもハンナ、容赦ないね。』

そして暫く試合が続き、リョーマはハンナ相手に一歩も引かず逆転

勝利した。

ハ「ゲームアンドマッチ、リョーマ・越前。

Ｄａｎｋｅ（ありがとう），リョーマ。」

リ「Ｂｉｔｔｅ．（どういたしまして）」

桃「なんていったんスか??」

『どういたしましてだよ。』

桃「越前のやつ、英語だけじゃなくてドイツ語もペラペラか??」

そう言うと桃はコートに入った。

続く手塚と美和もコートに入っていった。

手「ハンナ、先生からコレを…」

すると手塚はハンナにプロの時に使っていたヘアバンドを渡した。

『プロの世界は私達が考えてるほど甘くないかもしれません。でも…』

手「もう一度付けてみませんか??」

全「…」

ハ「ありがとう、国光、美和。私もう一度頑張ってみる。」

桃「ってことはプロに復帰するって事ッスか??」

ハ「そんなに簡単な事じゃ無いのよ??トップになるのは。」

大「プロに戻るだけじゃなく…」

不「トップになる…か。」

『クス、良いんじゃない??ハンナらしくて。』

ハ「美和も早く上がっておいで??アンタもその素質は十分あるわ。」

『その時は例え顔見知りでも容赦しませんからね。』

ハ「もちろん。」

そしてひとまず美和達は施設に戻っていった。

次の日美和達は日本に帰国し、ハンナはあるところで美和、リョーマ、手塚に向かってつぶやいた。

ハ「美和、リョーマ、国光、いつの日かウィンブルドンで会いましょう。」

その決意を胸にハンナはプロに復帰したのだった。

never give up

美和達が帰国してから数日が経ち、今日も青学テニス部は全国大会に向けて厳しい練習をしていた。

そんなある日のこと、美和達が練習を終えて帰るとき、正門前で時音がテニスバックを持って待っていた。

だがその様子は何時もと違っていた。

捺「あれ??美和、あの人って確か…」

不「うん、立海大の雪村さんだったかな??」

七「でもちょっと様子が変だね…」

『…時音??』

時「！！美和…」

『どうしたの？？何かあったの？？』

時「美和…！！」

そう言うと時音は美和に抱きつき、泣き始めた。

時「ヒックヒック……。」

『時音？？どうしたの？？何があったの？？』

時「精市が……精市がぁぁぁ！！」

七「精市って……立海大の部長の幸村君の事だよね??」

時「美和!!お願い!!精市を助けて!!」

『と、兎に角、場所変えよ??ね??』

時「（コクリ）」

『そういう事だから私先帰るね。時音、行こう。』

そう言って美和は時音を労りながら家に帰って行った。

残された3人は…

不「…ねぇ、いい加減教えてくれないかな??美和と幸村がどういう関係か。」

捺「…言わなくても周助はもう知ってるんじゃ無いの??」

七「美和ちゃんと幸村君は3年前に付き合ってたみたいなの。別れた理由までは知らないけど、この間会ったとき幸村君は美和ちゃんの事、まだ好きなんじゃないのかな??」

捺「その可能性はあるかもね。美和は優しいからそんな幸村がほっとけないんだと思うよ。

美和自身幸村の事どう思ってるかは知らないけど。」

不「…（美和）」

暫くして美和と時音は家に帰り、時音に事情を聞いていた。

そして美和はあることを聞いていた。それは…

『テニスが出来ない身体…』

時「うん…手術は成功したけど今の精市の身体ではまともなテニスは出来ないって…」

『そんな事が…』

時「お願い、美和。精市を、精市を助けて!!精市を助けられるのはもう美和しかいないの!!」

『……時音、悪いけどそれは出来ないわ。』

時「どうして!!」

『私にも出来ることと出来ないことがあるわ。

今回ばかりは精市をどう説得していいか分からない。』

時「……そうだよね、美和にも出来ないことぐらいあるよね。ゴメン。」

『私の方こそ期待に添えられなくてゴメン。』

時「考えてみれば私は何時も美和に縋ってばかりだね。

美和はいつも誰の力も借りずに頑張ってるのに。」

『そんな事無いよ。私はいつも時音に助けて貰ってる。支えられてる。』

時「止してよ、同情なんて。」

『同情なんかじゃ無いよ。時音が居たから今の私が居るの。

自分を高められたの。

時音は私にとって最も親しい友であり、ライバルだから。』

時「美和…」

『だからもっと自信を持って。』

時「私も美和の事は最も親しい友であり、最大のライバルだよ。」

『そう来なくっちゃ。』

その後2人はそれぞれのことを話した。

暫くして時音は帰って行き、美和はその週末幸村の病室を訪ねたが幸村は居なく、屋上に向かっていた。

そして物思いに耽っている幸村に声をかけた。

『随分と情けない顔ね。』

幸「!!美和…帰ってくれ、今君と話す気分じゃない。」

『…そうやってまた逃げるの??暫く会わない内に随分弱気になったわね。』

幸「美和に俺の気持ちなんか分かってたまるか!!」

『…そうね、分からないし、分かりたくもないわ。

今の精市は悲劇の主人公なんか演じて現実逃避してるだけじゃない。』

幸「何だと??」

『言ってること間違ってる??私はそうは思ってないわ。

少なくとも私が好きだった精市は簡単に諦めたりしなかった。』

幸「きれい事を…」

『でもホントの事でしょ??以前の精市はやる前から諦めたりしなかった。

私はそんな精市が好きだったのに…

今の精市はそんな気持ちの欠片も無いわ。

そんな半端な気持ちで全国3連覇なんて簡単に言うな!!』

幸「!!」

『それぐらいで諦めるくらいなら最初からテニスなんてしないでよ

！！』

すると立海大のレギュラーがやってきた。

切「そんな言い方、あんまりだと思うよッスよ??」

『…立海大。』

切「いくら何でも言い過ぎッスよ！！

アンタに幸村部長の何が分かるんスか??幸村部長の努力も知らないクセに知った風な口を言うな！！」

柳「赤也。」

真「美和が言うことも一理ある。」

切「でも！！」

『言いたいことはそれだけ？？』

切「何？？」

『言いたいことはそれだけかって聞いてるの。

なら言わせて貰うけど、アンタ達は何のために此処までやってきたの？？

1日でも早く精市にコートに戻ってきて欲しいからじゃないの？？』

全「…」

『私はそんな生半可な気持ちで今までやってたなら最初からテニスなんてするなって言ってるの。

精市、あの時なんて言った??必ず戻ってくるって言ったじゃない。
あれは嘘だったの??』

幸「…」

『私はその約束の為だけに腕の怪我も早めに治して貰ったのに…
精市はその程度でしか考えて無かったってことね。精市なら乗り越
えられるって思ってたのに…』

そう言って美和は屋上を出て行こうとした。

『精市、這い上がってきなよ。

私じゃなくてもあなたを支えてるのはいくらでも居るでしょ??
もう少し仲間を信じてあげな。私待ってるから。』

そう言うと美和は出て行った。美和が出て行った後幸村は以前のやる気を取り戻し、過酷なリハビリに取り組んでいった。

暫くして美和が病院を出ると、病院の正門に不二が居た。

不「良くやるね、幸村相手に単身乗り込むなんて。」

『直接話したかったからね。

それより不二君こそこんな所でどうしたの??

ずっと待ってるなんて随分物好きね。』

不「それを言うなら美和もだよ??

いくら元彼でもそこまで気にかけないと思うよ??」

『そうかもしれない…でも放っておけないのも事実。

精市をその気にさせるにはこれが1番良いと思ったから。』

不「本当に優しいね。」

『そうかな??でも私が精市に出来ることと言ったらこんな事だけだと思うし、何より昔の精市に戻って欲しいから。』

不「昔の幸村??」

『そう、今の立海大は王者故に勝利に執着し過ぎている。だからテニスを楽しむ心を完全に忘れているの。』

不「テニスを楽しむ心…」

『それを精市自身気付かない以上、私は精市の敵でしか無いわ。

例えそれがどんな結末だとしてもね。』

不「美和…君はそこまで…」

『…さてとお喋りはここまでにして、不二君この後暇なら買い物に付き合ってよ。』

不「それってつまり…」

『デートって事よ。嫌なら良いよ。他当たるから。』

そう言って美和は携帯を取り出したが不二に取り上げられてしまった。

不「誰も嫌とは言ってないでしょ??」

『不二君がサッサと言わないからでしょ??』

不「まさか美和から言うなんて思わなかったよ。
せっかくの美和からの誘いを断る理由がある??」

『だと思ったよ。』

不「じゃあ、あんまり時間無いし行こう??」

そう言って不二は反場強引に美和を連れてデートを楽しんで行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9543u/

golden　phoenix

2011年10月11日08時53分発行